

ハイスクールD×D ～転
生した大導師～

尾尾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大十字九郎に敗れ外宇宙へと放逐された大導師マスターテリオン。

エセルドレーダと共に絶望の輪廻から解放された外宇宙を漂っていたが気がつけば赤ん坊としてハイスクールD×Dの世界に転生していた。

ニトロプラス屈指のチートキャラであるマスター様によるハイスクールD×Dの世界での活躍にご期待下さい。

目次

| | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 第13話 | 第12話 | 第11話 | 第10話 | 第9話 | 第8話 | 第7話 | 第6話 | 第5話 | 第4話 | 第2話 | 第1話 |
| 115 | 107 | 94 | 82 | 74 | 61 | 45 | 34 | 23 | 12 | 4 | 1 |

| | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|
| 第20話 | 第19話 | 第18話 | 第17話 | 第16話 | 第15話 | 第14話 |
| 204 | 189 | 172 | 164 | 154 | 143 | 127 |

第1話

（冥界）

「オギヤー！オギヤー！」

「ミーシャ！産まれたのか！」

「はあ、はあ。ええ、見てくださいエドガー。ほら？あなた譲りの綺麗な金の瞳の元氣な赤ちゃんよ。」

（ツ！何だ！一体何が起こったのだ！）

つい先ほどまで最愛の伴侶であるエセルドレーダとともに宇宙で漂いながら永遠の時間を過ごしていたはずだったマスターテリオン。だがふと気がつけば何時の間にもやら若く美しい女性に抱かれ、その横からこれまた整った顔つきの男が此方のことを覗き込んだ。言葉を発しようとしても赤ん坊特有の泣き声にしかならず体を動かさそうにも手足をバタバタさせる事しか出来ない。

（落ち着いてくださいマスター）

（その声はエセルドレーダか！これは一体どういう事だ。つい先ほどまで余達は宇宙にいたはず。それにお前はいったい何処にいるのだ）

（申し訳ありませんマスター。私も気づいたらこの状況でした。それと私は今マスターの中に居ます。契約しているというよりは宿っているという言葉が適切かもしれませ
ん）

（宿っているだと？という事だ。ナイアルラトホテツプの仕業か？いやしかし奴は大十字九郎とアル・アジフの手によって……）

この不可解な自体を引き起こしたのはかの憎き邪神の仕業なのか、いくら考えても現時点でその答えが出るはずもない。それよりも今は目の前の男女の事だ。二人はまさに今が幸せの絶頂期であるかのような顔をしている。

「よし、お前の名前はアレイスターだ！元気に育てよ！」

「あら、良い名前ね。きつとこの子も貴方に似てかっこ良くなるわね。将来が楽しみだわ。」

マスターテリオンの顔を覗きながらそう楽しそうに会話する二人の名前はどうかやらミーシャとエドガーというらしい。そして恐らく会話の内容から二人の子供として生まれたという事が推測できた。

（余がこの平凡そうな二人の子供であるというのか！）

前世というべきなのかは分からないが以前は邪神ヨグ・ソトースと人類最強の魔術師ネロとの間に生まれ、邪神に翻弄され続けた生涯を送ったマスターテリオンにとって

誕生を喜んでいる幸せな両親というのは全くの未知のことであった。

(何だ？急に眠気が……)

(マスター。いくらマスターといえども今のお姿は生まれたての赤ん坊です。警戒は私
がしておりますのでどうぞご安心してお眠り下さい)

(ああ、任せたぞエセルドレーダ……)

「あらあら、どうやらアレイスターはおねむの時間見たいだわ」

「うお！寝顔も可愛いじゃないか！アレイスター、よく寝てよく育つんだぞ」

そういうやいなやマスターテリオンは眠りに落ちて行く。

こうして大十字九郎の手によつて邪神ナイアルラトホテップの呪縛から解放され
たマスターテリオンの新天地での生活が始まった。この世界はマスターテリオンに
とつて優しい世界なのか？それはまだ分からないが眠るマスターテリオンを見つめる
両親の顔は慈愛に満ちあふれているのであった。

第2話

この世界にマスターテリオンが生まれ落ちて12年、分かったことといえばこの世界は以前とはまるで異なっているということだけだ。確かに地球という点は同じでありこの世界にも魔術、悪魔、天使、墮天使、そして神というものは存在していた。しかしその実態はかつての世界に比べれば脆弱なものである。神とは名ばかりで宇宙一つ破壊する力も持たない。かの邪神と比べるにもおこがましいほどちっぽけな存在、それがこの世界の神であった。

(マスター、そろそろお父上を迎えにくる時間です)

(もうそんな時間か……)

今はすっかり日課となつた鍛錬の時間だ。いや、鍛錬というよりは力の確認というのが正しいかもしれない。この世界での父、エドガーは悪魔であり母、ミーシャは人間であった。つまりマスターテリオン、改めアレキスターは悪魔と人間のハーフとしてこの世界に生まれ落ちた。しかしどういう訳か邪神の因子も未だ体の中に存在している。従つて今のアレキスターの身体は半分が人間、四分の一が悪魔、残る四分の一が邪神と

いった割合で構成されていた。そして悪魔の血が新しく流れているせいなのか、かつての全盛期に比べればおよそ魔力は半分以下にまで低下し使用する事のできない術式もいくつかが存在していた。ド・マリニーの時計などがその典型だ。それゆえ少しばかり不安定になった力と己の新しい身体の確認をしていたのだ。

それと同時にアレイスターはこの世界の魔術にも手を出していた。以前の世界では大導師を名乗る程には魔術の造詣が深かったアレイスターにとって、この世界の目新しい魔術は十分興味深いものだったのだ。

(お前にも窮屈な思いをさせるなエセルドレーダ)

(滅相もございませぬマスター。私の喜びはマスターと共にあること。何にも囚われずただ平和にマスターと共に過ごす、これ程の幸せはありません)

現在、わりかし満足している生活を送っていたアレイスターにとって、ただ一つだけ困った事があるとすればそれはエセルドレーダの事。どうかして彼女を人型にしてやりたいのだが幾ら試してもナコト写本として現れるのみであり開く事もできない。勿論リベル・レギスも召喚出来ないのだがあれはこの世界には過ぎた力であるので問題はない。しかしアレイスターは伴侶であるエセルドレーダの事だけはどうかしてやりたいと思っていたのだ。

「おーい！アレイスター！もう昼食の時間だぞ〜！」

今世でのアレイスターの父、エドガーが向こうから声を張り上げ走ってくる。

「今日も相変わらず派手にやったもんだなあってその本どうしたんだアレイスター？」

「ふむ、父には見せた事がなかったか。これは余の半身とも言えるべき存在、ナコト写本だ。昔は開く事が出来たのだがどういう訳か開かなくなってしまうってな」

「何かその本、物凄いい気を感じるぞ。父さんバカだからよく分からないがただの本には見えないな。神器ってやつじゃないのか？」

「神器？何だそれは？」

「おお！アレイスターにも分からない事があつたんだな！父さん感激だよ！神器ってのは確か聖書の神が作った物で色々な効果がある魔道具みたいなものだったかな？本来は人間にしか宿らない筈だがきつとお前は母さんの血を受け継いでいるから神器を宿しているのだろう。詳しい事は母さんに聞くといい。母さんも神器を持っているからな」

「ふむ、なるほど」

アレイスターは手の中のナコト写本を眺める。エドガーはこれを神器と言ったがアレイスターは内心、それを否定する。さらに、自分の相棒であるナコト写本がこの世界のちっぽけな神が創り出した物と一緒にされる事に苛立ちさえ感じるのだった。



「まあ！それじゃあアレイスターも神器を持つているのね！さすが私の子だわ！」
「とりあえず神器について詳しく教えて貰いたいのだが」

家に帰ると母が昼食の準備を終えアレイスター達の帰りを待っていた。母、ミーシエは神器の事を話すととても喜んでいる様子でアレイスターの事を褒め抱きしめる。たったそれだけの事、普通の家族だったのなら当たり前前の事だが今まで体験した事のない両親との触れ合いをアレイスターは嫌がる事なく受け入れた。

「ええ、神器は聖書の神が作ったっていうのは知ってるのよね？そうね、先ず神器には色々な種類があるわ。純粹に武器として戦闘能力を持つもの、傷を癒したりするもの、はたまたまるで役に立たない物まで。きつと生み出した神ですら全ては把握してないんじゃないかしら。ちなみに私の神器は

白炎の双手、炎を生み出す神器よ。これがお料理にとっても便利なものよ！」

「母さんはこんな事言ってるが昔俺はそれに幾度となく焼かれたぞ。いま思い出しても身震いがする……」

「あらやだ！そんな事あったかしら？お母さん忘れちゃったわ」

この世界での両親はかつて敵対していたらしく何度も戦ったらしい。今の母の姿

からは想像する事が出来ないが若気の至りというやつなのだろう、アレイスターははしやぐ母を見ながらその様な事を考えていた。

「神器は人に様々な力を与えてくれるわ。それを悪用するもしないもその人次第。まあアレイスターにはそんな心配はいらないでしょうけどね。神器は人の思いに答える力よ。たとえばね、神器の中には神滅具と呼ばれる物があるわ。それらは人の身でありながら神をも殺す事が出来ると言われているのよ。人間の可能性は無限大つてやつね」

人の身でありながら神をも殺す……かつて大十字九郎がなし遂げた事だ。人間の可能性——それはアレイスター自身が一番良く分かっていることであつた。

「アレイスターは自分の神器がどういった物か分かっているのかしら？」

「ああ、だがそれを教える事は出来ない」

「そう、アレイスターがそういうのならそれでいいわ。きっと貴方には私たちには思いも寄らない考えがあるのでしょう。貴方は昔からそうだったわ」

「母よ、感謝する」

両親もやはり何処か違和感を感じていたのだろう。それも無理はない。しかしそれを受け入れ自分を愛し育ててくれる両親の事をアレイスターは愛おしく思い始めていた。

「今日は実は父さんから話があるんだ。アレイスターももう12歳になつただろうか？」

実はルシファー様から王都の学校に入学する許可が貰えたんだ！アレイスター、学校に興味はないか？」

「どうやらアレイスターへ王都の学校への誘いの様だ。しかし王都の学校はソロモン72柱のような貴族達が通う学校である。本来父の悪魔としての階級はソロモン72柱以外の家名すらない有象無象の一悪魔。その様な平民では全く縁のないところであるはずだった。しかし父であるエドガーは己の武力を持つてその力を示し魔王ルシファーの眷属に選ばれた唯一の平民悪魔だ。どうやらアレイスターの事を聞いた魔王ルシファーが特別に王都の学校に通う許可を出したようであった。

「どうだアレイスター？お前にも同年代の友達がいてもいいんじゃないか？」

「でもあなた、ただでさえハーフなのに平民のアレイスターが王都の学校なんかに通つたら虐められてしまうんじゃないかしら？私心配だわ！」

「おいおい、ミーシャ馬鹿な事いうな。よく考えろよ。三歳の頃に親子のスキンシップのキャッチボールで危うく俺を爆散させる様なやつだぞ。そんな心配はいらないさ」
「……………それもそうね」

母が反対しようとするが一瞬で父に論破される。確かにアレイスターは父との初めてのキャッチボールにて、いささか力を入れず過ぎてしまった事があった。エドガーが必死に避けなければきつと死んでいたに違いない威力で球を投げたのだ。

後日、アレイスターはこれをグラウンドマスターたる余の一生の不覚である、と語っている。

「それに王都には色んな書物があるぞ。きつとお前の知らない事が沢山待っているだろう」

未知が待っていると聞けばふつつつと興味が湧いてくる。ここ数年でアレイスターは家にある魔道書は読み尽くしてしまっていた。更なる知識を得るならば王都の学校へ行くのが一番の方法なのは明白だった。

（王都へと行けばエセルドーレダを召喚する方法も分かるかも知れんな）
（マスター……）

「父よ、決めたぞ。余は王都の学校へと行こうと思う」

「お！本当か！いやーこれでアレイスターが断つたりしたら俺が気まずくなるからよかったですよ」

「アレイスターがそう決めたなら私は何も言わないわ。貴方は貴方が思う道を行きなさい」

「よし！そうとなったら早速準備だ！入学式は来月にあるから急いで色々揃えないとな」

学校へと通うのならば必要となる物は色々ある。両親は早速準備のために動き出

そうとしていた。

(さあエセルドレーダ、来月からはまた新たな生活が始まるぞ)

(イエス、マスター。マスターと共になら何処へでも)

冥界の王都の学校、そこにはどんな未知が待っているのだろうか。柄にもなくアレ
イスターは期待に胸を膨らますのであった。

第4話

部屋に入ると魔王ルシファーが椅子に座りアレイスターのことを待ち構えていた。横には秘書であろうか？一人の悪魔が立っている。

「よう、こっやつて会うのは始めてだな。俺が魔王ルシファーだ。いきなりだが何で呼ばれたかは分かってるよな？」

「ああ、大方今日の模擬戦の事であろう」

「貴様！魔王に対してなんたる口の利き方だ！これだから平民は！」

秘書が無礼だと絶叫する。どうやらこの悪魔は典型的な選民思考の持ち主である様だ。それを聞いたアレイスターは鬱陶しそうに秘書の方に目を向けた。

「今は余と魔王との会合である。部外者は黙っていてもらおうか」

「っ！！」

アレイスターと秘書の目が合う。ただそれだけでまるで心臓を握り潰された様な感覚が秘書の全身を襲った。身体は動かさず、呼吸もできず、一言も言葉を発する事が出来ない。まるでアレイスターに全てを支配されているようであった。

「そこらへんにしといてくれないか？」

「貴重な語らいを外野に邪魔されたくないのな。なに、特に害はない。少々静かにしてもらっただけだ」

見兼ねたルシファーが秘書の解放を求めるがアレイスターはそれに取り合わない。ルシファーも害が無いのならば、と納得する。どうやらルシファーも余計な邪魔をされたくないと考えていた様子だ。秘書が絶望の表情でルシファーのことを見ているが二人はこれを華麗にスルーする。

「ちよいとばかりヤンチャをし過ぎたらしいな？」

「どうやら余と他の者との感覚がずれていたらしくてな。他の者からしたらやり過ぎであつたらしい」

ルシファーはアレイスターの言葉に苦笑する。

「あの後あるクラスメイトにたしなめられてな。次からは気をつけよう」

「いや、分かっているなら良いんだ。相手も多少非があるとも聞いているしな。ただお前さんは貴族達にはよく思われていない。おそらくそれはこれからも変わる事はないだろう」

俺が無理矢理お前さんを入学させたせいでもあるんだけどな、とルシファーが付け加えた。

「有象無象がどうしようが余には関係がないな。所詮弱者の遠吠えよ」

「ははっ、そうか。お前さんが言うなら俺からは何も言わんさ」

ルシファーはアレイスターの言葉を聞いて笑う。アレイスターの言葉には絶対的な自信と有無を言わさぬ凄みがあった。

それからはたわいの無い会話が続く。父エドガーのこと、魔術のこと、e t c e t c

それ等はアレイスターにとって久方ぶりに満足のいく会話であった。

◇

「それではそろそろ余は失礼するでしょう」

「そうか。アレイスター、まだ学院は始まったばかり。俺はこの学院の長としてお前が有意義な時間を過ごすことを願ってるよ」

魔王との会合が終わりアレイスターは学院長室から退出する。その瞬間今までピクリとも動かなかった秘書が崩れ落ちた。

「おーい、大丈夫かー?」

ルシファーが秘書に安否の確認をするが当の秘書は体内に酸素をいれることに必

死で返答する事が出来ない。

「あーあー、こりやダメだな。しっかしエドガーから聞いてたがありやとんでも無いガキだわ」

ルシファーは悪魔の中で最も強いという自負があつた。しかし今日、それは間違いだという事を認識させられた。あれには逆立ちしてもかないそうにない。

願わくばアレイスターが悪魔の敵にならんことを、ルシファーはそう思いながら椅子に深くもたれ掛かり酷く凝り固まった身体を伸ばすのであつた。

◇

それから一ヶ月、アレイスターを見下すような目をするものは誰もいなくなつていた。皆、アレイスターを恐れているのだ。無理もない、誰だつて四肢を切断されたり串刺しになんかなりたく無いのだ。あれから模擬戦も数回行われたがアレイスターの相手に選ばれた者は皆、頼むからアレイスターの相手だけは勘弁してくれと教師へ泣きついていた。

その結果アレイスターへと話し掛ける者はファルビウム、サーゼクス、そしてサーゼクスの友であるらしいアジュカ・アスタロトの三人のみとなつていた。もとよりその

様な事を気にしないアレイスターは毎日授業を受け、新たな魔術の知識を得る為に図書館にこもるといふ日々を繰り返していた。

そして本日もまた授業が終わり図書室へと向かう途中であった。

いつも通り魔術書を手に取り席に座る。ほとんどの貴族の悪魔達というものは自らの生まれ持った力に酔いしれ努力をしないと考へを持っていない。なので図書室を他に利用する者などおらずいつもアレイスターの独占状態であった。(もちろんアレイスターに近づきたがるものが居ないというのも理由の一つではあるが)

しばらく読み進めていると扉が開く音が聞こえた。視線をそちらの方へと向けると目を涙で赤く腫らした一人の少女が目に入る。なにやら右手にポロポロの本の様な物を持っているようだ。少女もアレイスターの存在に気付き一瞬驚いた様な顔をするがアレイスターから最も遠い椅子へと座るとまた泣き始める。

少女の容姿は紛れもなく美少女であった。普通の男であったのなら間違いなくその少女の事を慰めたりしていただろう。しかし今ここにいるのは大導師マスターテリオンである。エセルドレーダなら話は別だが、見ず知らずの少女の事など気に掛けるぐらいなら魔道書を読み進める事を優先する男だ。

図書室にはアレイスターの本を捲る音と少女の嗚咽のみが響き渡っていた。

(あの少女はいささか読書の邪魔であるな)

(ならばあの小娘の存在を排除いたしますマスター)

(エセルドレーダ、すぐそうやって物騒な手段に出るでない)

少女の事を排除しようとするエセルドレーダに若干の頭痛を感じる。人型にならないことよってストレスが溜まっているのだろうか。アレイスターはこの世界に生まれてからエセルドレーダは少々好戦的になっている気がした。

「その少女よ、そう貴公だ。貴公しか居ないであろう」

少女は始め自分が呼ばれていると気づかなかったのか辺りを見回す。その顔はいまだ涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「貴公は何故そんなに泣いているのだ。正直読書の迷惑なのだが」

「っ!!」

アレイスターの辛辣な言葉にまた少女は泣きそうになる。

その時アレイスターの目に少女が大事そうに抱えているボロボロの本が目に入った。

「何だそのゴミのようなものは?」

「ご、ごみじゃない!」

少女が始めて声を荒げた。正直誰が見てもゴミにしか見えないが少女にとっては大事な物なのであろう。

「それが直つたらここを出て行くと言うのなら余がそれを直してやろう」

「え？本当？」

アレイスターの言葉に少女が顔が明るくなる。

アレイスターが頷き指を鳴らす。するとまるでビデオの逆再生のように本が元の姿に戻り始めた。時間にしてわずか数秒。どう見てもゴミだったそれはまるで買ったばかりの新品と遜色ない姿になっていた。

「嘘……本当に戻っちゃった……」

少女は目の前の事が信じられないのか目を丸くしている。

「ふむ、何だこれは？」

「あつーダメー！」

アレイスターが復元された本を手にとった。少女は慌ててそれを止めようとする。が既に本はアレイスターの手の中にある。少女の顔が再び絶望感に見舞われる。その本の表紙には小さな女の子が豪華な服を着てなにやらステッキの様な物を持っている絵が書かれていた。タイトルは魔法少女リリカルさん、と書かれている。

「これは何だ？」

「えっ！あの……」

アレイスターの知識の中にはこれに該当するものがなかった。単純に好奇心として少女に問う。

「これは何だと聞いている」

「えっ、ま、魔法少女……」

「魔法少女？魔法をつかう少女という事か」

アレイスターは魔法少女リリカルさんペラペラとめくり始めた。

（魔法を使う少女が魔法少女ならエセルドレーダも魔法少女であるな。また人型になればたらこのような服をきてみるか？）

（イエス、マスター。マスターが望むのなら）

アレイスターとエセルドレーダは念話で以前の世界の者が聞いたら確実に噴き出すであろう会話を繰り返す。そんな中おずおずと少女が喋り始めた。その顔は希望半分、恐れ半分といった様子だ。

「あの…… 私がそんなの持ってた笑わないの？」

「何故笑う必要がある」

「だってもうそんなの見るような年齢じゃないし……」

「貴公はこの様なものが好きなのだろう？何を恥じる必要がある。堂々と好きと言えば良いではないか」

「そうかな……」

「しかしこれはなかなか面白いな。この様な魔法もあるのか」

「え！それ、さたんちゃんのスペースライトブレイカー!! 本物!! 嘘！すごい！」

アレイスターは本の中で主人公が使っている魔法をその場で再現する。

「ねえねえ！私もそれ出来るかな？」

「ふむ、まあ練習すれば出来るのではないか？」

先程までの泣き顔はどこへやら、一転して興奮した様子で少女はアレイスターにその魔法を教えて欲しいとせがみ始めた。

「貴公は他にもこの様な本を持つてるのか？」

「うん。好きだからいっぱいあるけど」

「ならばその本を余に貸し出せ。その代わり余が本に載っている魔法を教えてやろう」

「本当!! じゃあ明日早速持ってくるね！あと私は貴公じゃなくてセラフォルー、セラフォルー・シトリーだよ！セラって呼んで欲しいな！」

「セラか、了解した。」

「あ……でも学院では私に話し掛けられない方がいいかも……」

アレイスターがセラと呼ぶとセラフォルーは万円の笑みを浮かべる。しかしすぐに悲しそうな顔をしてそう言った。

「何故かは知らんが余には関係がないな。余を縛りたければ邪神でも連れてくる事だ」
「で、でもそしたらアレイくんまであいつらに……」

「あいつら？」

セラフォルーは一瞬口を閉ざすが数秒してポツポツと話し始めた。

「私ね、虐められてるの。その年になって魔法少女なんて変だつて…… 今日もこの本あいつらにやられちゃったの…… だからアレイくんも私と一緒にいたら巻き添え食らっちゃうよ……」

「ふむ、その様なクズ共に余の行動を制限される謂れはないな。余は余の好きな時に好きな事をするのだ。それにきつとセラの虐めも明日にはなくなるだろう」

「それって……」

「さて、そろそろ夕食の時間だ。余はもう寮へと戻る。セラもそろそろ帰るがよい」

アレイスターはセラフォルーが何か言う前にさっさと転移で寮へと帰ってしまふ。セラフォルーもアレイスターの最後の言葉が気になりながらも帰路につくのであった。

次の日、学院へと着いたセラフオールはあるニュースを耳にする。セラフオールを虐めていた主犯格の奴らが纏めて退学したと言うのだ。詳しく聞いてみればみな気が狂ってしまったとの事だ。何を言っても「いあ……いあ……」と言うだけで反応がないらしい。確実にアレイスターの仕業なのだが本人に聞いても誤魔化されてしまうのであった。

こうして確かにセラフオールへの虐めはなくなった。しかし同時に放課後のアレイスターの静かな読書もなくなってしまうのであった。

第5話

アレイスターの学院生活も五年が経ち、残すところ後一年。未だ他の生徒には怯えられているがファルビウム、サーゼクス、アジュカ、そしてセラフォルという掛け替えのない友を得ることができた。

(まさか余に友などというものが出来るとはな……)

(イエス、マスター)

アジュカとセラフォルが騒ぎ、サーゼクスがそれを煽る。アレイスターがそれを見守りファルビウムは相も変わらず眠りこけている。アレイスターもこの他愛もない時間的事を気に入っていた。

5人は思う——このまま平和な時がずっと続けば良いのにと。

しかし現実は無慈悲にもアレイスター達五人に襲いかかる。

悪魔、天使、堕天使の三竦みによる戦争が始まったのだ。悪魔と堕天使が冥界の覇を掛けて争ったのか？それとも古来より続く天使と悪魔の小競り合いが発展したのか？戦争が始まった理由は誰にも分からない。小さな争いは昔からあった。それが何時

の間にか大きな戦へと発展してしまつたのだ。

「戦争は嫌だね。ゆつくり眠ることが出来なくなつちやうよ」

「お前はどんな時でもそればっかだな」

はあく、嫌だ嫌だと言いながらベッドで転がっているファルビウムヘアジユカがツツコミを入れる。しかし何が起きようともマイペースを貫き通すファルビウムの存在はサーゼクス達にとつて少しでも戦争の事を忘れさせてくれる為ありがたかつた。

「今でこそ大人の悪魔達が戦っているけどこのまま戦争が激化すれば僕達学生も徴兵されるかもしれないな」

サーゼクスがボソツと言つた独り言によりアレイスターを除いた4人はまた顔を暗くさせる。

(マスター、マスターのお力を持つてすればこの戦争を終結させる事などたやすいのでは?)

(確かに余が天使と墮天使を皆殺しにすれば済むであろう。だがそれをすればもうこの4人とは共に居られぬ。大導師たる余が友を失う事を恐れるとはな……)

(マスター……)

エセルドレーダは始めて聞くアレイスターの弱音に驚きを隠す事ができない。かつて背徳の獣、666の獣と呼ばれ大十字九郎以外に興味を示さなかつた大導師マス

ターテリオンはこの世界で過ごす内に確実に変わってきているのだった。

◇

戦争が始まって数ヶ月、遂にサーゼクスの予測通り学院の生徒も戦争に徴兵される事となった。ほとんどの貴族は悪魔こそが至高の種族であると思っっている為、多くの学生達も我先にと勇んで戦争に参加していた。

勿論アレイスター達も強制的に参加させられる事となる。学生でもとりわけ優秀な五人の力により悪魔陣営の戦線は持ち上がった。

サーゼクス、アジュカ、セラフォルの三人はその武勇を持って敵を殲滅しリアルビウムはその類稀なる戦術、戦略を用い軍勢を指揮する。しかしアレイスターはその上をいった。アレイスターと相対した敵軍は必ず壊滅する。運良く生き残ったとしてもアレイスターへの恐怖心から二度と戦場に立つことができなかつた。

金色の髪をなびかせながらたった一人で敵軍を蹂躪する、その圧倒的な姿からアレイスターは天使、墮天使陣営からは畏怖を込めて金色の魔人と呼ばれていた。

しかしいくらアレイスター達が勝利を収めようとも所詮それは局地的なものだ。元々天使、墮天使の扱う光に弱い悪魔は三竦みの中で最も弱い勢力である。現状、アレ

イスター達がいるからこそ何とか踏みとどまっている状況であった。

◇

「あの魔人をどうにかしなくてはなりませんね」

「しかし主よ、あの者の力はあまりに圧倒的。セラフであろうとあの者を討つのは厳しいでしょう」

「ここは天界。現在アレイスターへの対抗策を話し合っている真つ最中である。

「私に考えがあります。冥界の外れにあの魔人の母が住んでいるとの情報がありました。その者を襲い人質にしないさい」

「なっ!? 主よ! いくら戦争とはいえども民間人を狙うなど! それにその様な行動は我らの正義に反します!」

「よく聞きなさい、ミカエル。その者は悪魔に身を売った元エクソシストです。これは異端者への断罪なのです」

「しかし……しかしそれはあまりにも!!」

「これは命令ですミカエル。エクスカリバーの使用を許可をします。これよりケルビムと共に冥界へ向かいあの魔人を討ちなさい」

「ぐつ！了解……しました……」

ミカエルと呼ばれた天使は拳を握りしめ渋々と聖書の神の命令に従う。

この時、行動したのが天使のみであったのならあの様な事は起こらなかつたであろう。しかし不幸にも、そう不幸にも墮天使陣営も同じ事を考え行動を起こしていたのだった。

◇

「何をしておるのだミカエル！早くしろ！」

「ケルビム…… やはりこの様な事は間違っているのではないか？」

「何を言うか！主の御言葉に間違えなどあるはずなからう！」

ケルビムと呼ばれた天使がミカエルの事を叱咤する。このケルビムという天使はセラフの中でも最も神に狂信的な天使であった。

「ミカエル！墮天使だ！墮天使が居るぞ！糞！奴らめ、どうやら同じ事を考えていたようだ。こうしてはおれん！私が墮天使を押しやる！お前は目標を確保しに行け！」

「え、ええ……」

アレイスターの母、ミーシャが住む家へと着いた二人の天使は墮天使と一人の女が

戦っている様子を目にする。情報通りなら炎の神器を使用しているあの女が目標人物なのであろう。ケルビムは墮天使に奪われまいと急いで戦いに介入する。

「貴様ら墮天使の好きにはさせんぞ！」

「くっ！天使まで！」

ミーシャの体は墮天使との戦いで既に満身創痍だ。かつては凄腕エクソシストであつたが長く戦いから離れていた上に墮天使の数は10人以上。中級、下級墮天使のみのようだが多勢に無勢であつた。むしろ今まで持つたのが奇跡的だ。

「ふん！見よこのエクスカリバーの輝きを！貴様ら墮天使などものの数ではないわ！」

ケルビムの介入により次々と墮天使の数が減らされてゆく。ただでさえ上位天使であるケルビムが聖剣エクスカリバーを持つているのだ。中級、下級程度の墮天使では相手になるはずもなかつた。

「ちっ！天使が出てくるとは！ここは俺が押さえるからお前は目標を連れて撤退しろ！」

「わかつた！」

「きやつ！」

ケルビムに叶わないと悟つたのか一人の墮天使がミーシャを捉え撤退しようとする

る。この時既に墮天使を振り払う力がミーシャには残っていないかった。

「何をしているミカエル！ 奴を逃がすな！」

「くっ！」

慌ててミカエルが光の槍を投げますが集中力のない槍は簡単に避けられてしまう。

「もうよい！ 私がやる！ 主の命を遂行出来ないのは残念だが墮天使に連れていかれるぐらいならここで滅してくれるわ！ 食らえ!!!」

ケルビムの持つエクスカリバーから特大の斬撃が飛び出す。それはやすやすと墮天使とミーシャを飲み込んだ。その一撃はまさに聖なる一撃。斬撃が通った後にはもはや何も残っていない。この場で生きているのはケルビムとミカエルの二人の天使のみだ。

「ミカエル！ 貴様のせいで主の命を成し遂げる事ができなかったではないか！」

「申し訳ありません……」

「もう良いわ！ 懺悔は主の前で行え！ 天界へ帰るぞ」

二人は天界へと帰還しようとする。しかしその時何処からか底冷えのする様な声が聞こえてきた。

「貴様ら…… 一体何をしているのだ……」

「ぐっ！」 「ぬ！」

途轍もない重圧が二人を襲う。気がつけばアレイスターが二人の目の前に佇んでいた。

「でおつたなアレイスター！今しがた貴様の母親を断罪したところよ！貴様もこのエクスカリバーの錆びにしてくれるわ！」

「余の母を……殺した……？」

ケルビムがエクスカリバーで斬りかかる。

「な、なんだと?!エクスカリバーが?!ぐっ!」

しかしアレイスターはそれをまるでハエを払うかのような動作で弾く。ただそれだけでエクスカリバーがガラス細工のように粉々に砕け散った。エクスカリバーが折れた事に驚愕するケルビムはその隙にアレイスターに首を掴まれる。

「がつーき、きさま……」

「お前が?お前如きが余の母を殺したというのか?」

「ぐ、ぐううう!」

徐々にアレイスターの手の力が強まっていく。

「ケルビムを離しなさい!」

ミカエルがケルビムを助けようと光の槍をアレイスターへと放つ。しかしその時アレイスターの横で浮かんでいた本が一瞬輝き次の瞬間、本は少女へと変化した。そし

てミカエルの槍は容易くその少女によって防がれた。

「マスター、只今戻りました」

「大義である、エセルドレーダ」

アレイスターの事をマスターと呼ぶ謎の少女。アレイスターに従者のように従っていた。

「余は怒っているぞ。ああ、怒りという感情をこんなにも感じるのは初めてだ」

「っ!!」

アレイスターがそう言うとは何時の間にか周囲の光景が変わっていた。先程の場所ではない。360度何処を見ても真つ暗闇で音も何も聞こえなかった。

「貴様らには無限の苦痛を与えよう。喜べ、滅多に味わえるものではないぞ」

そこから先は地獄だった。アレイスターによって焼かれ、斬られ、砕かれ、潰される。手足を折られ、目玉はくり抜かれ、内臓を生きたまま抜き出され、心臓を目の前で潰される。身体中礫にされ謎の生き物に食られる。毒に侵され全身に酸を浴びせられる。只々ケルビムとミカエルの絶叫だけが響き渡っていた。

死にたい! そう叫んでもそれが叶う事はない。一体全体どういう訳か死ねないのだ。いや、正確には死んでも生き返らされるのだ。殺されて生き返る、殺されて生き返

る。永遠と続く拷問のなかで見えたアレイスターの顔は深い悲しみと憎悪に染まっていた。

ああ、これは罰なのだ。ミカエルは終わらないループの中でそう思った。狂いそうになるが狂う事はない。もういつそ狂ってくれた方が楽になれるのに。ただ全身の痛みと死ぬ事への恐怖がミカエルを襲い続けた。

「貴様は伝令役だ。帰って聖書の神に伝えよ。貴様は余が直々に殺すとな」

もうどれだけの時間がたったのだろうか、一体何回死んだのだろうか。気がつけばミカエルは天界の宮殿の目の前で倒れていた。手足は潰れ身体中の骨は折れている。普通ならば間違いなく死んでいる怪我だ。恐らくアレイスターによって無理矢理生かされているのだろう。辺りにケルビムが居る様子はない。アレイスターの言葉通り自分だけが神への伝令として生かされているのだ。薄れゆく意識の中で辺りが騒がしくなるのを感じた。聖書の神はもう終わりだ。あれに手を出すべきではなかったのだ。驚愕した表情の神を見ながらミカエルは意識を失うのであった。

◇

ミカエルとケルビムへの制裁を終えアレイスターとエセルドレーダは今ももう見

る影もなくなつてしまつた実家の前にいた。

「マスター、私が完全に機能を取り戻した今ならお母上を復活させられるのでは？」
「それはならんエセルドレーダ。確かに生き返えらせることはできる。しかし母の肉体と魂は既に消滅している。もし生き返らせてもそれは母の情報をコピーした唯の肉人形でしかないのだ。幾度となく世界を壊し作り出してきた余が言う事ではないがな」
「マスター……」

「母の命はここで終わった。そう、終わったのだ。良き母であつた。願わくば最後にもう一度、もう一度だけお会いしたかつた……」

世界を超えた大導師マスターテリオンはこの日初めて涙を流す。

マスターテリオンが立ち去つた後には光り輝く立派な墓が立てられていた。

その墓にはこう彫られていた。

『偉大なる母ミーシャ　ここに眠る』

第6話

戦争が始まって長い年月が経過した。人間より長い寿命を持つ天使、墮天使、悪魔達にはそれが数ヶ月なのか、それとも数年なのかもう分からなくなっていた。お互いに引く事が出来ないままズルズルと長引き、犠牲者のみが増え続けてゆく。天使、墮天使陣営は多くの幹部を失い悪魔陣営もルシファーを除く魔王達を討ち取られていた。

アレキスターも母を失った日から変わった。いや、変わったというのは間違いだ。正しくは“戻った”であろう。

あの日からアレキスターには一切の容赦がなくなった。すこし前であれば撤退してゆく敵ならば態々手にかかる事なく見逃していたが今では逃走兵だろうが関係はない。敵兵ならば容赦なく皆殺しにする。慈悲は無くただひたすら作業の様に淡々と敵兵を殺す様は味方であるはずの悪魔達からも恐れられていた。しかし、それでも友であるサーゼクス達だけはアレキスターから離れる事はなかった。

終わりの見えない泥沼化した戦争にある日、突如として転機が訪れる。二天龍と称される赤龍帝ドライグ、白龍皇アルビオンが争いを始めたのだ。何処ぞの竜が喧嘩をする

のなら何も問題はなかった。しかし一部の者を除けば最強である二天龍の争いである。いくら本人達にその気がなかったとしてもその争いに依る余波は各陣営に多大な被害をもたらしていたのだった。そうなってしまうえばもう戦争どころでは無い。結果として一旦戦争は休戦となり、各陣営のトップによる対二天龍の会議が開かれる事となった。

◇

「いままで散々戦ってきたのにこうして顔を合わせるなんて変な感じだな」

「ああ、まったく厄介な時に暴れてくれるもんだぜ。あの二天龍共は」

悪魔からは魔王ルシファーが、墮天使からは総督アザゼルが、そして天使からは聖書の神がそれぞれこの会議に出席していた。

「それで、お二方は何か案があるのでしようか？」

「そんなもんあつたらここには居ねーよ」

「俺もなんも思いつかんわ。戦争で頭脳担当が死んじまいやがったからな。俺は基本的に労働担当なんだよ」

アザゼルが聖書の神に悪態をつく。脳筋であるルシファーも具体的な案を持っていなかった。そこへ聖書の神がある提案をする。

「ともかく二体を同時に相手にするというのは無謀です。分断して各個撃破を狙うというのが最善でしょう」

「まあ確かにそれはそうだが……」

「分断させる役目は我々天使が引き受けましょう。残る皆さんは待ち構えて分断した二体を仕留めて下さい」

聖書の神が自信満々に自らの案を説明する。確かに二天龍を分断するというのはいい考えであった。しかしここである事にアザゼルが気付く。

「おい、ちよつと待て。分断させるのはいい。だが此方の戦力も二つに分けなきやなんねーぞ。それだといまの俺らの戦力じゃ二天龍を倒せるとは思えねえ」

「確かにアザゼルの言う事は最もです。しかし二天龍を一人で相手どる事ができるかもしれない者がいるでしょう？ お二方も心当たりがあるはずです」

「——金色の魔人か」

聖書の神の言葉にアザゼルは一人の悪魔が思い浮かぶ。アレイスターだ。アレイスターはどの悪魔とも一線を画す存在である。アザゼルも戦争中その力は嫌というほど味わってきた。もしかすると二天龍をも凌駕するかもしれない。そう思えるほどの

力だった。

だがそれに反論するのはルシファーだ。

「てめえ、まさかアレイスターに一人で戦わせようって言うんじゃねーだろうな？」

ルシファーの言葉にははつきりと怒りの感情が込められている。それもそのはず、聖書の神の作戦は普通に考えれば死ぬと言っているようなものだ。ルシファーからすれば、そのような事は到底認める事はできなかった。

「それが最善だと私は思います。他の案があるならどうぞご提案を」
「ぐっ！」

そう言われると反論する事が出来ない。ルシファーは肝心な時に死んだ頭脳担当の魔王と回らない自分の頭が憎かった。

「異論はない様ですね。それでは細かい所を詰めて行きましょうか」

ルシファーの握りしめた拳からは悔しさと不甲斐なさのあまり血が流れ出ている。結局何も思い付く事は無く聖書の神の案を採用するしかないのであった。

◇

戦争が一時休戦となり僅かな間ではあるが冥界に平和が訪れる。しかしそれは再

び二天龍が暴れ始めれば崩れ去ってしまう儂いものであった。

そんな中アレイスターは一人、今は静まり返っている戦場を歩いていた。辺りには深く戦争の爪痕が残されている。その光景はまさに地獄。損傷が激しくどの種族か分からないため放置されている死体、抉れた地面、おびただしい血の痕跡。そのほとんどがアレイスターによって作り出されたものであった。

確かに母を殺した原因である聖書の神は憎かった。だが全ての天使が憎いかと言われれば別にそういう訳でもない。自分がその気になれば全て終わらせる事ができるのに実際にやっている事はただ漠然と目の前にいる敵を殺すだけ。無限回廊に捉えられていた時ならばこんな事を考えはしなかった。大十字クロウ以外の全てに興味がなく邪魔をするのなら排除する。それが大導師マスターテリオンであったはずだ。

だが今はどうだ？アレイスターの行動は全くチグハグな物であった。

「アレイ君」

「セラか……」

自らを呼ぶ声を聞き、そちらへと振り向いてみればセラフォールが佇んでいた。どいうい訳かセラフォールの顔は今にも泣き出しそうな表情をしている。

「何故そんな顔をしている」

「だって……だって……あんまりだよ！アレイ君はこんなに頑張ってるのに！どうして

みんな……」

母は殺され、仲間の悪魔達からは受け入れられることはない。残る父も復讐に取り憑かれアレイスターと久しく会ってはいなかったら。友人達から見たアレイスターはもしかすると焦燥している様に見えるのかもしれない。

「余は元より孤高。セラ達も余と共に居ればまた小煩い奴らに色々言われるだろう」
「そんな事言わないで!!!」

アレイスターの突き放す様な言葉にセラフォルーは大声をあげた。セラフォルー達は戦争で多大な戦果を挙げてきた。本人達が由緒ただしい貴族出身である事もあり悪魔達からは英雄扱いされているのだ。

一方、アレイスターは絶大な戦果を挙げつつも一部を除きまるで腫れ物の様な扱いをされていた。

次期魔王と称されるセラフォルー達がそんなアレイスターと共にいるのは貴族達にとつて当然面白くない。それゆえ幾度と無くアレイスターと距離を置く様に言われていたがセラフォルー達がそれを受け入れる事は無かった。

「私はアレイ君とずっと一緒に居たい!!!だって……だって私はあの時から!」「おう、ここに居たのか。お前ら」え?」

「いや、何処にも居なかったから探しちゃったよ、ってセラフォルー?どうした?」

「知らないっ！魔王様の馬鹿！」

「へぶっ！」

勇気を振り絞ってアレイスターへと告白しようとした所に絶妙なタイミングで魔王ブロックが入る。本人に悪気はないのだがセラフオールにとってはたまったものではない。せつかくの機会を邪魔されたセラフオールはルシファーにビンタをした後恥ずかしさのあまり走り去ってしまうのだった。

「災難であつたな魔王よ」

「いつつ……一体何だつてんだよ」

「ふふ、いささかタイミングが悪かつたようだ。それで？余に何か用か？」

「すまねえ！俺が不甲斐ないばかりに!!」

「……何やらよく分からんが顔を上げよ。王がそうやすやすと頭を下げるものではない」

ルシファーがその場で勢い良く土下座をする。他の悪魔がその光景を見ていたらきつとまた騒いでいただろう。しかしこの場にはアレイスターとルシファーしかない。

ルシファーは顔を上げて対二天龍作戦をアレイスターへと説明する。アレイスターはそれを顔色一つ変える事無く聞く。ただ発案者が聖書の神だと聞いた瞬間だけ

はスッとアレイスターの目が細まった。

「魔王だなんだっていつても結局最後にはお前に頼りきりになつちまう。俺は駄目な王だ」

「気にするな。二天龍程度、大した障害では無い。それよりも余が一匹仕留めている間にそちらがやられる方が心配だ」

「ああ、お前が言うとお本当に大した事のないように聞こえるよ。ただ、気をつけてくれ。俺は聖書の神が何か企てる気がしてならないんだ」

「無論だ。それにあやつにはしかとその身に報いを受けて貰わねばならん」

三大陣営の存亡はほぼアレイスターにかかっているといつても過言ではない。

作戦決行は明後日。平和を願う者、計略を張り巡らす者、復讐を望む者。様々な想いが渦巻きながら三大陣営は束の間の平和を過ごすのであった。

◇

作戦決行当日、強大な戦力であるサーゼクス達四人も駆り出された。

「いよいよか。無事成功するといいのだが……」

「それよりもアレイ君が心配だよ！ たった一人で二天龍を相手にするなんて！」

セラフオールの意見は最もだ。四人は誰一人としてこの作戦に納得している者はいない。しかし現状、自分達にできる事は無いためアレイスターを信じるより他がなかったのだ。

「よう！お前から緊張してないか？」

「「魔王さま！」」

「いいって、いいって。楽にしな。それよりも悪かったな。本来ならこんな作戦にお前からみたくない若者を参加させたくなかったんだが……」

「それだったらアレイ君はどうなんですか!!」

「ああ、耳が痛いな」

セラフオールの言葉にルシファーは苦虫を噛み潰した様な顔になる。ルシファーとしても苦渋の決断であった。だが、守らなければならぬ民達がいる。

この中で最も自分の無力さを嘆くものは間違いないルシファーであっただろう。

「来たぞ!!二天龍だ!!」

その時一人の伝令が声を上げた。天使による分断が上手くいったらしい。遠目でその姿が確認できた。

赤い、そして圧倒的な大きさ。赤龍帝ドライブだ。

必死に逃げる天使達を悠々と追いかけてながら空を飛ぶその姿はまるでわざわざお

前らの作戦に乗ってやったんだぞとも言いたげであった。

『お前らか。俺とアルビオンの邪魔をしてくれた奴らは』

辺りにドライグの声が響き渡った。空と大地が震えている。さすがは二天龍、まさに圧倒的な存在感だ。

「よく言うぜ。てめー等が勝手に暴れてんじゃねーか。迷惑してるのはこつちだつーの」

アザゼルが負けじと言い返すがそれにドライグは一切取り合わない。その態度にアザゼルは激しい苛立ちを感じる。

『お前らは地面に這いつくばるアリの事を気にするのか？ まあこつちもいつまでも邪魔されても迷惑だ。だから今日ここでお前らを蹴散らしてやろう!!!』

ドライグが巨大なブレスを放った。

『boost! boost! boost! boost! boost!』

「くっ！総員退避ーッ!!!」

ドライグの能力によってただでさえ巨大なブレスはさらに勢いを強める。もはやまるで小さな太陽のようだ。

ルシファーが慌てて退避命令を出す。直後、自陣が大きく火柱をあげる。

「何という一撃だ……」

サーゼクスは今の一撃を見て呆然とする。まさに桁違いの威力だ。今ので全軍の一割程度が持つていかれただろうか。

「ッ！ 各自分散してかかれ！ 纏まってるで一気にやられるぞ！」

『ははははは！ さあ逃げろ逃げろ！ まだまだ始まったばかりだぞ！』

こうしてあまりに絶望的な戦力差の三大陣営対二天龍の戦いの火蓋が切って落とされる。

戦いの結末は三大陣営の壊滅か？ それとも……

第7話

『ガアアアアア!!!』

「二天龍といえども所詮この程度か……」

目の前には巨大な龍が横たわっていた。白龍皇アルビオンだ。翼は無残にも引き裂かれ体は血に染められている。

対するアレイスターはその身に傷一つ負う事無く悠然とアルビオンを見下ろしていた。その目はまさに虫けらを見るような目だ。正直拍子抜けだ、というのが率直なアレイスターの感想だった。

『お、お前は……一体何なんだ…… お前の様な存在が……ただの悪魔な訳が……』

アルビオンは動かない体に鞭を打ちながら必死に声を絞り出す。今まで自分は狩る側であった。それが今はどうだ！手も足も出ずに二天龍である自分が地に落とされている。しかもたった一人の悪魔にだ。

「余は父はエドガー、母ミーシャより生まれ、同時に邪神ヨグⅡ ソトースと人類最強の魔術師ネロの血を引く者、アレイスター。またの名を大導師マスターテリオン。以後よ

ろしく頼む」

『邪神!!それにヨグソトースだと!!そんな馬鹿な!!』

「先ほどよろしくと言ったばかりではあるが余もこの後の予定が詰まっているのでな。この余興もそろそろ終焉といこう。天狼星の弓よ!」

アレイスターの手に光り輝く黄金の弓が現れる。

「さらばだ、白龍皇アルビオンよ。貴公はそれなりには強かったぞ」

『クソ!クソオオオオオ!!』

黄金の弓から矢が放たれる。それは一筋の光となり容易くアルビオンを飲み込みそのまま高くへと飛び去っていった。矢が過ぎ去った後にはもう何も残っていない。

「……………エセルドレーダ」

「イエス、マスター。どうやら何らかの封印術式が発動した様です」

アレイスターの不愉快そうな言葉にエセルドレーダが答える。

「ふん、大方聖書の神の仕業だろう。それよりも今は彼方の方だ」

「イエス、マスター」

アレイスターは転移術式を発動させた。向かうはもう一体の二天龍、赤龍帝ドライグだ。

◇

『どうした？もう終わりか？』

「くっ！このままじゃジリ貧だ！」

ドライグの圧倒的な力によって次々と味方は倒れていく。もう連合軍は満身創痕だ。それにもかかわらずドライグには若干のダメージは見受けられるがまだまだ余裕があるようであった。

「セラフオール!!!ぼさっとするな!!!」

「キヤアアア!!」

ドライグがセラフオールへとブレスを放つ。一瞬の隙を突かれたセラフオールは避けきれず巨大な炎に包まれた。

「セラフオール!!!無事かセラフオール!!!」

二天龍ドライグのブレスだ。一瞬で体が蒸発してしまっても不思議ではない。サーゼクスは無事であってくれと願いながら急いでセラフオールの元へと向かう。

するとそこには一人の悪魔に庇われているセラフオールの姿があった。

「無事か？セラちゃん……」

「叔父さん!!!」

アレイスターの父、エドガーだ。身を呈してセラフォルを庇った所為で全身に火傷を負っており、特に右手は無惨にも炭化していた。

「この腕はもう使い物にならないな」

「エドガー！無事か☒」

「魔王様。ええ、何とか」

ルシファアが駆け寄りエドガーの安否を確認する。エドガー自身は無事だと言っているがどう見ても無事ではない。今すぐ前線から下がらせて治療しても助かるかどうか分からないレベルの重傷であった。

「魔王様。これより私がドライグの注意をそらします。その好きに最大威力の攻撃を放って下さい」

「……分かった」

「叔父さん!!魔王様!!何言ってるの!!!」

「セラちゃん。俺はもうダメだ。この腕じゃ足でまといになる。だったら最後ぐらいは役立って見せるさ」

「そんな！アレイ君は！アレイ君はどうするの！」

「あいつは大丈夫さ。俺なんかよりずっと強い」

「叔父さん……」

セラフォルーが泣きそうになりながらエドガーを止めようとするが止まる気配は全くない。

「さあ、最後の最後の大花火だ。セラちゃんも見ててくれよ」

そう言うときエドガーは動かない利き腕とは反対の手に剣を持ちドライグに相対する。

「よう、大トカゲ。いつまでも調子こいてんじゃねーぞ」

『そんな体で何を言うかと思えば、笑わせる。もはや死に体じゃないか』

「あんまり悪魔を舐めんよ!!!」

エドガーがブレスを掻い潜り超スピードでドライグへと迫る。足が吹き飛び腹に穴が開こうとも止まることはない。

『なにっ!』

「これが悪魔の怒りだ!くらえよおお!!!」

『グアアアアアアア!!!』

遂にエドガーはブレスをくぐり抜ける。そして勢いよく剣をドライグの右目へと尽きたてた。執念の一撃であった。

「俺はダメな親だった。最後は復讐ばかりでお前の事を何も考えてやれなかった」

エドガーが残る魔力を収束させる。此処にきてアレイスターへの申し訳ない気持ち
ちが沸き起こってきた。

「魔王様！セラちゃん！あいつに伝えてくれ！俺は一足先に母さんの所に行くよ！そしてお前は変わった子だったけど俺達はお前を愛していたよ！」

「叔父さん!!!」

「アレイスター!!!お前は間違いなく俺達の子供だった!!!」

エドガーを中心に爆発が巻き起こる。魔力を暴発させ自爆したのだ。その爆発は
ドライグをまるのまま飲み込むほど巨大であり、一瞬の隙を作るには十分な大きさであつた。

「今だ！外すなよアザゼル！」

「おうー！」

アザゼルが巨大な光の槍を、ルシファーが練るに練った魔力弾を立て続けに放つ。
部下の命を無駄にはしないと、必死の思いで練ったそれ等は魔王、総督の名に相応しい
程の威力を誇っていた。

『グオオオオオオオオ!!!』

アザゼルの槍とルシファーの魔力弾はドライグへと命中し、ドライグは悲鳴をあげた。
今までで一番大きな悲鳴だ。連合軍はもはや戦う力が殆ど残っていない。これで

仕留められなかったらもはやお手上げだ。 真正正銘、最後の一撃だった。

「どうだ？ やったか？」

「ッ！ ルシファー！！！」

「なっ！ がふっ！」

『はあ、はあ、今のは効いた。 かなり効いたぞ』

ルシファーが巨大な爪に貫かれた。 ドライグだ。 いまの一撃でも倒れることはなかったのだ。

目は潰れ、鱗は剥がれてはいるが依然としてその巨体は空を飛んでいる。

「今の中でも……ダメか…… 俺も……焼きがまわったもんだ……」

『とつさに鱗の硬さを倍化しなければ俺もやられていただろうな』

「おい！ ルシファー！ しっかりしろ！」

アザゼルがルシファーを助けようと光の槍を投げる。 しかし先程の一撃で力を使い果たした所為で、その威力は下級墮天使のそれと変わりなく簡単にドライグに弾かれてしまう。

『チヨロチヨロと逃げ回ってくれたもんだが…… これでお前も終わりだな魔王ルシファー』

「ハハ……ハハハ……ハハハハ！！！」

『何故笑っている?』

ルシファーが急に大声で笑い始める。腹を貫かれ絶体絶命であるはずのルシファーが笑っていることにドライグは違和感を感じた。

「確かにお前の言うとおりで俺は終わりだ。確実にお前に殺されるだろう。けどな、それはお前も同じさ! 断言しよう。ドライグ、お前は俺を殺した後同じように殺される。それもたつた一人の男によってだ!」

『ならばさつさとお前を殺し此処にいる奴らを皆殺しにするとしよう』

ドライグはそう言うと言おうとブレスをチャージし始めた。

「あとは……頼んだぜ……アレイスター……」

「魔王様!!!」

逃げる力の残っていないルシファーはドライグの爪に引き裂かれ、巨大なブレスに飲まれた。

この日、偉大な魔王であったルシファーはその生涯を閉じたのだった。

『さて、厄介な者は死んだ。まずは先程殺しそこねた小娘からだ』

心の支えであった魔王が死に悪魔側に動揺が走る。悪魔、堕天使共に既に力を使い果たしていた。

そんな中再びドライグはセラフォルに狙いを定めた。

「セラフォルー！逃げる!!!」

ドライグの牙がセラフォルーに迫る。

「いや……助けて……助けてアレイ君……」

目の前には赤く大きな牙が視界いっぱい広がっている。仲間たちが逃げろと叫んでいるが足が竦んでしまい思うように動かない。セラフォルーは思わず想い人の名を呟いた。

絶体絶命の瞬間、

「すまぬな。少々遅くなった」

『グオオオオオオオオ!!!』

セラフォルーに牙を突きたてようとしたその時、顎に途轍もない衝撃を受けドライグは上空に吹き飛ばされ、そのまま地面に叩きつけられた。

何だ、一体何が起こった。いや何が起こったかはわかる。急に現れたあの男に殴り飛ばされたのだ。

しかし、理解は出来ない。魔力も使わず単純な腕力で殴り飛ばしたというのか？圧倒的体格差のこの俺を？あり得ない。あり得るはずがない。ドライグは地に伏している自分の状況が信じられなかった。

「重力結界」

『グアアアアア!!』

アレイスターが魔法陣を展開した途端、ドライグにかかる重力が急激に増加した。骨が軋み、体はピクリとも動かない。先程のまで雄大に空を飛んでいた龍は地に伏し、もがく様はただの巨大な赤いトカゲのようであった。

「父と魔王は逝ったか……」

「アレイ君……」

アレイスターは一瞬魔王と父へ黙祷を捧げ再びドライグと相對する。そして今地に伏しているドライグを嘲笑し言い放つ。

「どうした二天龍よ。それはかつてある者が人の身でありながらも破ってみせた術だぞ」

『グググツッ！舐めるな！二天龍を舐めるなよ!!! boost! boost! boost! boost!』

「そうだ。やればできるではないか。だが……」

ドライグは自分にかかる途轍もない重力から倍化の能力を駆使して脱出した。馬鹿にされた所為か、その表情は怒りに染まり今にもアレイスターを八つ裂きにせんと襲い掛かかる。しかしそう現実には上手くいかない。

『ギヤアアアア!!』

何時の間にかアレイスターが握っていた黄金の剣によりドライグの全身が切り刻まれた。

「それではさよならだ」

『嘘だ! 二天龍であるこの俺が! 赤龍帝であるこの俺があああ!!』

アレイスターの剣から斬撃が放たれる。ドライグへと直撃する瞬間ドライグが光に包まれた。光が収まると巨大なドライグの姿は何処にもない。今まであまりに圧倒的なアレイスターの姿に呆然としていた連合軍はドライグが突然消えたのを見て、ざわめき始める。

「なんだ!! 何が起きた!」

その時、拍手と共に何者かの高笑いが聞こえてきた。

「見事! 実に見事です、金色の魔人よ!」

「てめえ、今まで姿が見えないと思っただら……」

アザゼルが憎憎しげに声のする方向を見る。その先に居たのは聖書の神だ。何やら赤い籠手と白い翼の様な物を身にまとっている。

「まさか二天龍を二体とも倒すとは思いませんでした。しかし、そのおかげで見なさい! 二天龍を宿す神器を作り出すことが出来ました。そうですね、赤龍帝の籠手、白龍皇

の光翼とでも名付けましょうか」

聖書の神が二つの神器を見せびらかす様に見せつける。

「まさかお前……それが目的で……」

「その通りですよ、アザゼル。この力があれば私は『もう喋るな。貴様の声を聞いていると耳が腐る』は？」

黄金の剣が聖書の神を貫く。皮肉にもその剣の先端は十字架になっていた。

何時の間にかアレイスターが聖書の神の目の前にいる。

「ど、どうして……」

「忘れたとは言わせんぞ。言つた筈だ。貴様は余が直々に殺すとな」

聖書の神はなす術も無く次々と現れる黄金の剣に串刺しにされ地面から現れた大きな十字架に貼り付けにされた。

「光栄に思え。この世界でこれを使うのは貴様が初めてだ。さあ、皆の者。刮目せよ！これこそが余の切り札にして絶対の力！鬼械神リベル・レギスだ！」

アレイスターの言葉と共に空が割れ、巨大な機械が現れる。深い、深い、深紅の大きな翼をもつ人型の機械だ。その姿にこの場にいる誰もが目を奪われた。先程の二天龍など比較することもおこがましい程の力を感じる。長く生きている聖書の神達さえも初めて見る存在。絶対の力、あままさにアレイスターの言う通りだ。これ相手には

オーフィスやグレートレッドでさえも見劣りするだろう。

「何だ！一体それは何なんだ！」

「聖書の神よ。貴様は少々やり過ぎた」

辺りに絶望の詠唱が響き渡る。

『其れはまるで御伽噺の様に

眠りをゆるりと蝕む淡き夢

夜明けと共に消ゆる儚き夢

されど

さの玩具の様な宝の輝きを

我等は信仰し

聖約を護る

我は闇

重き枷となりて路を奪う

死の漆黒

我は光

眸を灼く己を灼く世界を灼く熾烈と憎悪

憎しみは甘く

重く

我を蝕む

其れは悪

其れは享受

埋葬の華に誓つて

我は世界を紡ぐ者なり』

『シャイニング・トラペゾヘドロン』

リベル・レギスが光に包まれ手に槍の様な、劍の様な光が形創られる。

シャイニング・トラペゾヘドロン——それは捻じ曲がつた神柱、狂つた神樹、刃の無い神劍。善なる神、旧神の最終兵器。

「此処で聖書の神は死に絶える。だが安心しろ。余が再び復活させてやろう。新たな前はこの世の全ての人間、動物、植物。地球上のありとあらゆる者に嫌われる存在となろう。貴様の足は動く事はなく目が光を移すこともない。言葉を発する事さえも許されぬ。かつて貴様がイヴをそのかした蛇を呪つたように。地に這いつくばつて生きるのだ。されど死ぬことは許されぬ。不老不死を持つて永遠の時を生きるのだ。誰からも愛されることなく、出会う物全てに憎まれるその人生を。これは呪いでは無い。これから世界がそう書き換わるのだ」

邪神によりデモンベインとリベル・レギスの二つに分けられたシャイニング・トラペゾヘドロン。それはかつて再び大十字九郎によつて一つに統合された。それゆえ今のシャイニング・トラペゾヘドロンはその残りカスでしかない。しかしその残りカスでもこの世界では圧倒的な力であった。

リベル・レギスがシャイニング・トラペゾヘドロンを聖書の神に突き刺した。巨大な光の奔流が巻き起こる。この場にいた全員は堪らず目をつむつた。

それが収まった後には一人の醜い生き物が横たわっていた。聖書の神の面影など一つたりとも存在しない。先程のアレイスターの言葉通り見るだけで驚異的な不快感を感じる。

「さあ、新たな生誕だ。好きな様に生きるが良い。世界が貴様を受け入れることなど決してない」

アレイスターが腕を振るい元聖書の神を世界の適当な場所に転移させる。

こうして聖書の神は死んだ。かつて最も信仰された一柱の神は未来永劫受け入れられる事はない。死ぬことも許されず、ただありとあらゆる物に迫害される永遠の責め苦を負わされるのだった。

こうしてなし崩しに戦争は終わり、天使は聖書の神を、悪魔は魔王を、墮天使は多くの幹部と同胞を失った。もはやどの勢力も戦争を続けるだけの力など残されてはいなかった。

長く続いた三竦みの戦争、ようやくそれが終わり冥界は平和を取り戻したのであった。

第8話

戦争が終わり、各陣営は勢力の立て直しが課題となっていた。

それは悪魔も変わりなく戦争による被害の復興と同時に貴族、重鎮達による今後についての話し合いが日夜行われていた。

「それでは次期魔王はサーゼクス・グレモリー、アジュカ・アスタロト、セラフォル・シトリー、ファルビウム・グラシヤラボラスの四名でよろしいですか？」

『異議なし！』

この話し合いで最も時間を費やしたのが次期魔王の選出であった。

今回の戦争でソロモン72柱の約半数は断絶してしまい現在、悪魔自体が存亡の危機にさらされてしまっている状態である。そういう訳で、名家という枠組みを取っ払った上で若く求心力のある悪魔が魔王に選ばれるべきだという意見が大半を占めていた。

しかしそうなると面白くないのが前魔王の血筋の悪魔達である。当然世襲制だと考え自らが正統な魔王の血筋であると思っっている者達がそれに反対し始めその結果、旧

魔王派對新魔王派という対立が勃発し議論を長引かせていたのだった。

旧魔王派と新魔王派の論争は過激化し遂に新魔王派が強行採決をとってしまった。人数自体は新魔王派が大多数を占めていたため旧魔王派は議論を打ち切り退席してしまった。これ幸いと新魔王派は新たな魔王を選出したのだった。

その結果、選ばれたのがサーゼクス達四人の悪魔だ。四人とも先の戦争で輝かしい活躍をした者達である。

「さて、残す議題はあと一つですな……」

議長が悪魔がそう切り出した瞬間に先程まで騒がしかった議会が打って変わって沈黙に包まれる。

「神殺しの悪魔、アレイスターの処分に対する論議を行います」

アレイスターへの処分、それは対二天龍作戦の時聖書の神を殺害した事に対するものであった。あれが戦時中ならば何も問題が無かった。しかしあの時は僅かな期間ではあるが休戦中であったのだ。更に誰がどう見ても故意による殺害であり、天使、墮天使からも、お前らあれどうにかしろよという無言の圧力がかけられていた。

「……………どなたか意見はありませんかな？」

議長がそう促すが誰一人声をあげるものはいない。それもそのはず、皆戦争を通じてアレイスターの圧倒的な力を目の当たりにしているのだ。

誰も発言しないまま時間が過ぎていく。もう何分たったのであろうか、続く沈黙に誰もが痺れを切らし始めた時、一人の悪魔の声が響き渡った。

「やはり……コキュートスへの永久凍結しかないのではないか？」

「ちよ、ちよつとまつてくれ！確かに彼は罪を犯したかもしれない！しかし戦争で最も戦果をあげたのも彼だろう！それに二天龍の時も彼がいなかったら我々は死んでいたではないか！それを忘れて永久凍結とは！」

「そうは言いますがグレモリー卿、あの者の力は大き過ぎる。貴方もご覧になったでしょう？あの聖書の神へと行使した力を。あれはもう一個人としての力を大きく超えている。いつかあの力が我々に牙を向くかもしれないのですよ？」

「そのような憶測で……」

一度広がったもう波紋は止める事が出来ない。それまで沈黙を保っていた悪魔達が次々と永久封印へと賛成の意を示し始める。

「往生際が悪いですぞ、グレモリー卿。貴方以外はもう皆、賛成しているのです」「もういい！埒があかん！私はここで失礼する！」

一人反対の意を示していたサーゼクスの実父であるグレモリー卿が退席する。

その後、まるできたない物には蓋をと言わんばかりに議論はどうアレイスターへと刑を処すかへと移っていった。

「しかしあの者が素直に刑を受けるとは思えませんな。かといって力づくというのとはともじやないが無理だ」

再び議会在が無言に包まれる。

「そのお話、この私に任しては貰えないでしょうか？」

そこへ一人の男が議会へと入ってきた。

「そなたは…… 確かマルファス家の跡取りだったか？」

「マルコ・マルファスと申します」

「して、そなたは何か案があるのか？」

「はい、必ずやアレイスターを捕らえて見せましょう」

「よろしい、それだけ言うのならやってみるがよい」

「はっ！了解しました！」

マルコは怪しく笑みを浮かべながら恭しく礼をする。

こうして再び身の程を知らない男はろくに回らない頭で愚かにもアレイスターを陥れようと企むのであった。

アレイスターとはある屋敷の一室で読書をしていた。現在アレイスターは軟禁状態であるのだが本人からすれば何時でも抜け出せるので久しぶりの休暇のつもりでくつろいでいたのだった。

そこに突然乱暴に扉が開かれる。

「大罪人アレイスター！ 貴様の刑が決まったぞ！ 大人しく従うんだな！」

「もう少し優雅に出来ないのか？ 扉が悲鳴を挙げているではないか」

アレイスターは読んでいた本をボタンと閉じ立ち上がる。

「ふむ、貴公とは何処かであったか？ 何やら見覚えがある気がするが……」

「き、き、貴様！ この俺の顔を忘れたと言うのか！」

マルコが激昂するがアレイスターは首を傾げるばかりで思い出した様子は一切ない。興味のない物には一切頭のリソースを割かないアレイスターはマルコ・マルファスという男の事は当然覚えていなかったのである。

「ふ、ふん！ まあいい。本来ならお前はコキュートスへの封印刑だがこの俺がここで殺してやる！」

「余を殺す？ 貴公の様な三下が？ 残念だがそれは不可能だろう」

「そういつていられるのも今のうちだ！ これを見ろ！」

「貴様……」

マルコを守るように二人の男女が現れる。その容姿は死んだ筈の父エドガー、母ミーシャと瓜二つであった。

「ヒヤハハハハハハ!! どうだ驚いたか! こいつらはお前の親のクローンだ! こいつらを作るのには苦労したぜ! だが流石のお前もこいつ等には攻撃できまい!」

「やはり三下だな、貴様は」

「ヒヤ?」

アレイスターは二人のクローンを躊躇なく切り殺す。

「実に浅はかなり。この様な皮だけ似ている紛い物で余をどうにか出来ると思ったのか? だが我が両親の死を侮辱したのは事実。故にその命を持って詫びよ」

そう言うや否や剣を一闪、マルコの首を跳ねた。あまりの剣速にマルコは自分が死んだ事さえ気付かなかつただろう。アレイスターにしては随分と優しい制裁であった。

アレイスターはゴトリと落ちた首を掴む。

「さて、エセルドレーダよ。この件の黒幕にも挨拶せねばな」

「イエス、マスター」

アレイスターとエセルドレーダはそのまま貴族達の元へ向かうのだった。

「これであの者が成功すれば万事解決ですな」

「そうですな」

はははは、という笑い声が議會沸き起こる。貴族達はまるで肩の荷が下りたかのような笑顔を浮かべていた。貴族達は自分たちが何をやったのかまるで分かっていないのだ。この場に真にアレイスターの事を理解している者が居たらきつと場にいる悪魔全員の事を愚か者と罵ったであろう。

「皆の物、ずいぶん楽しそうではないか。余も混ぜては貰えぬか」

「あ、アレイスター!!!」

突然現れたアレイスターに議會は騒然となる。

「まあそう騒ぐな。余は土産も持参したぞ?」

「ひっ!」

そういつてアレイスターは何か球状の物を議會の中心に投げ入れた。先程切り落としたマルコの生首だ。

「き、貴様!こんなことしてただで済むと思っているのか!」

「なに、この者は先程余を殺そうとしてきたのでな。正当防衛で殺してしまった。その

時に何やら議会がどうの言っていたが皆は何か知ってはおらぬか？」

「し、知らぬ！わし等は知らぬぞ！」

議長が答えるがあくまでしらを切るらしい。

「誠か？」

「ほ、本当……ギヤアア!!」

アレイスターが議長の腕を切り飛ばした。その行動に一切の容赦はない。他の悪魔はそれを見て顔を青ざめている。

「誠か？と聞いている」

「た、確かにお前を封印刑に処すことにはなっていた！しかし殺せとは言っていない！」
「ほう？最初からそういえば腕も無事だっただろうに」

アレイスターは議長から目を外し議会をぐるりと見回した。場にいる悪魔達は次は自分の番ではないかと思ひ戦々恐々としながらアレイスターと目を合わせまいと下を向いている。

沈黙が続く。しばらくするとアレイスターが口を開いた。

「それほど余が邪魔ならば自ら出て行ってやろうではないか」

予想外のアレイスターの言葉に悪魔達は目を丸くした。

「本来ならば皆殺しにしているところだが…… 貴公らのような者でも居なくなれば

サーゼクス達が困るであろう。よって今回は殺しはせん」

自らが助かったことに胸を撫で下ろす悪魔達。

「二度目はない。しかとその胸に刻んでおけ」

その言葉を最後にアレイスターの姿が忽然と消える。緊張の糸がきれた悪魔達は
その場へあたり込むのであった。

◇

「貴公らか。随分と情報が早いではないか」

「アレイスター、今ならまだ正当防衛で済むはずだ。戻ってくるんだ」

もう少して冥界の出口に差し掛かった所でサーゼクス、アジュカ、セラフォルの
三人が待ち構えていた。どうやら三人はアレイスターを引き止める様子だ。

「残念だがそうはいかない。もう悪魔につく義理などない。それに余はこの世界が知り
たいのだ。大人しくそこをどいてもらおうか」

「君をはぐれにさせる訳にはいかない。それに僕たちは次期魔王だ。いくらかの口添え
ぐらいはできるはずだ」

「組織の長として私情を挟むのは感心せぬぞ、サーゼクス」

「アレイ君！」

「くだい。我を通すのなら力を持って示して見せよ」

アレイスターから威圧感が噴き出す。

「マスター、その小娘は私にお任せ下さい」

「エセルドレーダか。まあよい。殺さぬようにな」

「よう、アレイスター。ずいぶんと可愛い子連れてるじゃねーか」

アレイスターの横に少女が現れる。三人は一瞬驚くが警戒を緩めることはない。なぜならばその少女からはアレイスターと同等の威圧感が感じられるからだ。

「ふむ、貴公らには見せた事が無かったか。紹介しよう。我が相棒にして、最愛の伴侶。

エセルドレーダだ」

「始めまして、マスターの友と雌猫」

「うそ……」「本当かい?」「マジか」

サーゼクス達は三者三様に驚く。まさか友人が結婚しているとは思わなかったからだ。特にセラフォルは呆然としている。

「さあ、いつまでも話していてもしょうがない。いい加減始めようではないか」

「貴方の相手は私よ、雌猫」

「ッ！」

アレイスター、エセルドレーダ対サーゼクス達の戦いが始まった。

戦いといってもアレイスターから攻撃する事はない。ただひたすら相手の攻撃を弾く、弾く、弾く。サーゼクス達も全力を持って攻撃するがアレイスターはまるで意にかいた様子はない。

「もう気は済んだか？」

「はあ……はあ……ま、まだだ……」

いかにサーゼクスとアジュカが超越者と言われているようにともアレイスターとではそもそも自力の違いすぎる。その差は歴然であった。もはやサーゼクスとアジュカの体力は尽きかけていた。

「マスター、こちらは終わりました」

エセルドレーダがアレイスターに声をかける。その姿はアレイスター同様、全く汚れておらず右腕にはボロボロのセラフオーを抱えていた。

「よくやった、エセルドレーダ。さて、こちらも終わりでしょうか」

アレイスターが動く。次の瞬間、サーゼクスとアジュカは地面に倒れていた。構えていたはずだった。しかし何をされたかもわからずに地に伏している。

「あ……れい……すた……」

「今日、余達の歩む道は別れる。だがいつかまたその道が交差する日がくるだろう。そ

の日まで暫しの別れだ」

その記憶を最後にサーゼクスとアジュカの意識は途切れた。

「いるのだろうか？ ファルビウム」

「アレイスターは何でもお見通しだね？」

突然、アレイスターがファルビウムの名を呼ぶ。すると木の影からのそのそとファルビウムが現れた。

「貴公も余を止めるか？」

「えー、無理無理。サーゼクスとアジュカの二人掛かりでダメだったのに僕一人で何とかなでできるはずないじゃないか」

「ふっ、貴公らしい発言だな」

アレイスターは笑う。ファルビウムもそれにつられて笑った。

「アレイスター、僕たちは頑張るよ。いつかこの冥界の体質を変えてみせる」

「そうか」

「きつとまた会える日がくる。君に何かあるとは思えないけど、それまで元気でいて」

「ああ。それではな、我が友ファルビウムよ」

「うん」

アレイスターはファルビウムに背を向け歩き始める。

「これから何をしようか？ エセルドレーダ」

「イエス、マスター。マスターが望むのならどのような事でも」

「そうか。そうだな、この世界のあらゆる魔術を知るのもよい。今度は純粋に魔術探求のためにブラックロτζを作るのもよいな」

「イエス、マスター。マスターと共にならどこへでも」

この日、アレイスターははぐれ悪魔としての認定を受ける。そのランクは悪魔史の中で例のないSSSランク。ただし懸賞金はかけられる事は無かった。金に目のくらんだ若い悪魔達の犠牲をなくすための措置だ。

大戦を生き残った者はこう語る。

その悪魔に決して手を出す事なかれ。

さもなければ死すら生ぬるい責め苦を負わされるであろう。

神殺しの悪魔、アレイスター。彼が表舞台に舞い戻るのはまだはるか未来のことであつた。

第9話

アレイスターがはぐれ悪魔になつてから長い年月がたった。あれからアレイスターは世界を巡り様々な魔術、知識を吸収する生活を送っていた。

現在アレイスターは北欧の神が住まう土地、アースガルズへと向かっている。

「北欧の魔術は奥が深いという。どれ程の物か楽しみであるな、エセルドレーダ」
「イエス、マスター」

程なくすると金色に輝く神殿が見えてきた。神殿の中からは神々しいオーラを感じる。おそらくあれが神々の住まう神殿、グラスヘイムなのだろう。

「そのの者！止まれ！ここは北欧の主神オーディン様の住まう神殿。許可なき者が通る事は許されていない！」

「ほう？あれが北欧のヴァルキリーか」

アレイスター達の行く手をヴァルキリー達が遮る。ここまで無断で侵入してきたのだ。その行動は当然の事であろう。

「なに、別段貴公らを害すつもりで参ったのではない」

アレイスターは一步、歩みを進めた。その瞬間、ヴァルキリー達の警戒レベルが上がる。

「動くな！これ以上進むというのならそれ相応の対応を取らせてもらおうぞ！」

ヴァルキリー達の長、ブリュンヒルデがそう警告した。だがアレイスターが止まる事はない。もともと北欧の魔術を見にきたのだ。わざわざそれを使ってくれるというのならそれでもいいか、というのがアレイスターの考えであった。

「ツ！ヴァルキリー隊！放てーツ！」

「馬鹿者！焦るんじゃない!!」

依然として止まる事のないアレイスターに焦った一人のヴァルキリーが攻撃の合図を出す。慌ててブリュンヒルデが止めようとすが時すでに遅し。ヴァルキリー隊が一斉に魔法を放ち、色とりどりの魔法がアレイスターへと着弾した。

「はあ……はあ…… 警告を無視するからそうなるのよ」

「なるほど、これが北欧の魔術か。威力はなかなかのものだ」

「そんな……」

魔法の余波による煙が晴れると傷一つ負った様子のないアレイスターが現れた。その様子に攻撃したヴァルキリー達は啞然とする。完璧に決まっただけでなく、自らの腕にも自信があった。だが結果はどうだ？相手はまるで意にかいた様子がない

ではないか。ヴァルキリー達は己の自信が砕けそうになるが、自分達の使命を放棄する訳にもいかない。必死に自分を奮い立たせ、アレイスターの前に立ちふさがるのだった。

「良い物を見せて貰った礼だ。余も一つ、魔術をお見せしよう」

アレイスターの手に膨大な魔力が集まっていく。たった一人の筈なのにその魔力は先程のヴァルキリー達のそれを遥かに超えていた。

「ABRA……HADABRA!!」

「きゃあああ!!」

次の瞬間、アレイスターの手から雷撃が放たれた。ヴァルキリー隊を飲み込みそのまま神殿へと直撃する。

「ば、馬鹿な…… この様な事が……」

難を逃れたブリュンヒルデは目の前の光景に戦慄する。たった一回の攻撃で自分を除くヴァルキリーのほとんどが全滅したのだ。加えて偉大な神殿、グラムヘイズが爆破解体作業の現場の様になってしまっている。

「なんだ、思ったより残っているではないか。やはり北欧の魔術は優秀だな」

アレイスターとしては全員戦闘不能させるつもりで放ったのだがヴァルキリー達の障壁が思いのほか頑丈であったため、全滅には至らなかったのだ。それでも壊滅とい

う言葉に相応しいだけの被害は出ていた。

そんな中、ただ一人無傷のヴァルキリーが目に入る。

「これは驚いた。まさか余の魔術を防ぎ切るとは」

「あ……あ……」

「逃げろ！逃げろロスヴァイセー！」

ブリュンヒルデが必死にまだ幼いヴァルキリーへと逃げるように叫ぶがアレイスターを目の前にして放心してしまっている。

このヴァルキリーの少女、ロスヴァイセは飛び級で訓練校を終えた非常に優秀なヴァルキリーであった。

勿論いくら優秀であろうともアレイスターの魔術を防ぎ切ったのはロスヴァイセだけの力ではない。周りの年上のヴァルキリー達がロスヴァイセだけでも守ろうと庇ったことも大きかった。

「その年齢でその技術とは……気に入った」

「ヒッ！」

アレイスターがロスヴァイセへと手を伸ばしたその時、

『グングニル!!!』

何処からか声と共に槍が飛んでくる。それからは強大な神の力を感じる。相当な

強者であろうとも屠る事の出来る一撃であった。だが、アレイスターとて普通ではない。慌てずにそれを容易く弾き声がする方を向いた。

「なんじや、まるで効いておらんわい。噂通りのようじゃな？金色の魔人よ。しかし、些か暴れ過ぎではないかね？」

「これはこれは、貴公が主神オーデインであるか？お初にお目にかかる。余は大導師マスターテリオン。世界の魔術を探求する者だ」

そこにはオーデイン、トール、フレイなど名だたる神達が勢揃いしていた。全員がそれぞれの武器を持ち臨戦体制をとっている。

「お主の噂はここ北歐にもよう聞こえてくるわい。して、何用でこのような所まで参った？」

「先程も行ったとおり余は魔術が好きでな？世に名高い北歐魔術を一目見ようとここまできたのだよ」

「貴様！それだけの為にこのような暴挙を働いたというのか!!」

神々の一柱であるロキが激昂する。確かにたつたそれだけで自分達の住まう土地をボロボロにされては溜まったものではないだろう。

「やめんかロキ！他のものも一緒じゃ！決して手を出すでないぞ！」

オーデインは知っていた。アレイスターが聖書の神に対して行った事を。神々に

とつて最も恐れる事はその神性を失う事だ。何としてもそれだけは避けねばならない。決してアレイスターを怒らせてはならないのだ。

しかしオーデインは知識に対して非常に貪欲な神であった。アレイスターが聖書の神に何をしたのか、アレイスターは何者なのか？好奇心からつい左目の水晶の義眼でアレイスターの事を見てしまう。それがどういふ事かもわからずに……

「ツツ!!グアアア!!」

「オーデイン!どうしたオーデイン!しつかりしろ!」

アレイスターを見た瞬間に大量の何らかのイメージが頭に流れ込んできた。何だこれは。こんな物今まで見た事もない。あり得ない。理解出来ない。この世のおぞましさを密集してもこれには敵わない。

強烈な頭痛がオーデインを襲う。正気を保つ事が出来ない。

「アアアアア!!!」

周りの神は突然の事に騒然とし始める。

「ご老公、そこからへんにしておけ。貴公程度の器ではそれ以上視るともう戻れなくなるぞ」

アレイスターがそう言うと、オーデインはその場で崩れ落ちた。

「はあ……はあ……お、お主は一体何なんじゃ……そのようなあり様など……」

「それを知るにはご老公、貴公では些か荷が重すぎる。さて、余の目的はもう達したのでな。ここらで余は去らせてもらおう」

「そう言うわけにはいかないだろうがっ!!」

「いかん! やめよツール!」

去ろうとするアレイスターへとオーデインの制止を無視してツールが突撃する。北欧の戦闘神としての誇りからアレイスターをむぎむぎと帰す訳にはいかなかったのだ。そして、そのまま手に持つミヨルニルをアレイスターへと叩きつけた。

「流星は雷神ツールといった所か。素晴らしい威力だ」

「ッ!!」

しかしアレイスターによつて片手でそれを防がれる。今までこれをくらって死ななかつた者などミドガルズオルムぐらいであった。それでもダメージは与えていたが目の中の魔人にはそれすらも一切見当たらない。

「そら、返礼だ」

「ガハッ!!!」

トールの腹部に一撃、アレイスターの拳が叩き込まれツールはたまらず吹き飛ばされた。

「さて、他のものもやるかね?」

神々は一様に沈黙する。北歐神話最強の神トールが一蹴されたのだ。もはや自分達ではどうする事も出来ないことはわかっていたのだ。

「それでは今度こそお別れと行こう。ではな、オーデインとその他の神よ。またいつか会おうではないか。そしてそのヴァルキリーよ。余は貴公の事が気に入った。次に会う日を楽しみにしていよう」

アレイスターが転移を発動させ目の前から消える。残ったのはポロポロになったグラムヘイズと呆然とする神々のみだ。

「もう二度と会いたくないわい……」

オーデインのこぼした独り言だけがこだまするのであった。

第10話

ここは北欧の森の中。辺りは薄く霧がたちこめ、背の高い針葉樹の上から射し込む日光が薄明光線を作っている。その中をアレイスターとエセルドレーダが歩いていった。その姿は、二人の容姿と周りの景色が相待つてまるで映画のワンシーンのようだ。

「なかなか有意義な時間であったな」

「イエス、マスター」

「特にあのヴァルキリー、将来どれ程のものになるか楽しみだ」

アレイスターは先ほどのアースガルズへの訪問に満足し上機嫌であった。目的の北欧魔術を目にし、面白い人物にも目を付けた。これ以上はない結果だった。

「やはり北欧という場所は美しいな。森一つとっても幻想的なものではないか」

「同感です」

エセルドレーダと会話しながら森を進む。機嫌のいいアレイスターはいつになく饒舌だ。

その時、側の茂みからガサツという音が聞こえた。気配からして獣の類ではないよ

うだ。近づいて覗き込んで見れば、まだ十歳にも見たないであろう白髪の少年が倒れこんでいる。

「はあ……はあ……」

「ふむ」

その姿は血にまみれ、着ている衣服もボロボロであった。痩せ細った手足を見るに栄養失調である事も伺える。ここはまだアースガルズに近い北歐の森の中、本来ならこの様な所に人間がいるのは不自然であった。

「少年よ、貴公は何をしている」

「……………」

少年からの返答はない。衰弱しきって返答する元気もないようだ。放つておけば間もなくこの少年の命は尽きるだろう。そのとき、ふとアレイスターは自分が悪魔であった事を思い出す。今の今まで忘れていたが悪魔は人間と契約する存在だ。せつかく悪魔になったのだ、暇潰しにこの少年を救つてやるのも良いかもしれない。そう思つてアレイスターは再び少年に声を掛けた。

「貴公は間もなく死ぬだろう。だがまだその命に執着するのなら、余がその命、拾つてやろうではないか」

「……………ッ！」

少年の身体がピクリと反応した。

「さあ少年よ、そのまま朽ち果てるか、生にしがみつき生きながらえるか。貴公の好きなように選ぶがよい」

「……………たい」

「聞こえんな」

「……………たい ……きたい 生きたい！生きたい!!! 生きて奴等に！教会に復讐するんだ

!!!」

少年が吠えた。その小さな命は再び生を望む。身体は衰弱し、這いずることしか出来ないがその目は強い意思を宿しギラついていた。

「良い目だ。よろしい、ならば契約だ。その命、余が救つてやろう。これからは余の為にその命を使え」

「あ……………」

アレイスターが少年の傷ついた身体を魔術で回復させる。少年は限界を迎えたのかそのまま意識を失った。

「よろしいのですかマスター？」

「ああ、そろそろブラックロッジのメンバーが欲しかったからな。本日をもって魔術結社ブラックロッジ再結成というこう」

アレイスターが笑い声をあげる。

「しかし、一人目の構成員が魔術師でも何でも少年か。これもまた面白いではないか」

氣を失った少年を無造作に掴み再び二人は歩き始める。こうして遂に、この世界で魔術結社ブラックロッジが設立することとなったのだった。

◇

「ほらほら、しつかり避けなきや死ぬわよ」

「ちよつ！無理無理！これは無理だつて姐さん！」

俺、フリード・セルゼンがボスに拾われてもう一年がたつ。

俺は教会で行われていた聖剣計画の被験者だった。人工的に聖剣使いを作り出すつていう糞みてーな計画だ。俺はそこで聖剣に適合する為に散々身体をいじくり回された。結局、適合する事が出来なくて処分されそうになったので命から逃げて出し死にかけていた所でボスと出会った。初めてあつた時はあのお迎えが来たと思つたね。あんまり綺麗な金髪で浮世離れした雰囲気なもんだから天使だと錯覚しちゃつた。けど蓋を開けてみたらビックリ！

あの金色の魔人じゃくあくりませんか！

多少なりとも裏側に関わる奴ならば誰でも知ってるような大悪魔だ。その時ばかりは終わったと思つたね。だから部下になれて言われた時は心底驚いた。俺みたいな奴が金色の魔人の目に止まるとは思つてもみなかつたからだ。そりやそうだろ？俺はただのズタボロのガキだつたんだ。得意な事なんてありやしない。魔術のまの字も知らないんだぜ？それでもボスは俺を拾ってくれた。だから俺はボスの為なら何だつてするつて誓つたんだ。

ボスは俺がクソツタレの協会に復讐したいと言つても何も言わなかつた。けどその為の力が欲しいと言つてからは俺を鍛えてくれた。実質的な師匠は姐さんだつたが……

姐さんつてのはいつも師匠と共にいる謎の人だ。名前はエセルドレーダ、見た目はロリロリな人だがこの人もボスと同じで半端じゃない。避けなきや一発で死ぬような魔力弾をポンポン放ってくる。そのせいで毎回俺はズタボロになっていた。こんな感じで喋ってるけど今も姐さんが魔力弾を飛ばして来ている。

あつ…… これは避けられない……

「あんぎやー！！！！」

「ふう、今日はこれで終わりね」

もう……むりぼ……

◇

黒焦げになったフリードが転がっている。今日も頑張っていたようだが、流石にたった一年ではあのナコト写本であるエセルドレーダには手も足も出るはずがなかった。

「少し出てくる。留守は頼んだぞエセルドレーダ」

「何か御用事でしょうか？」

今までフリードの訓練を見ていたアレイスターはおもむろに立ち上がりそう言った。

「この辺りで何者かが争っている気配を感じる。それを見に行こうと思つてな」

「わざわざマスターの手を煩わせる訳には行きません。私が確認して参りましょう」

「いらん。エセルドレーダはフリードを見ておけ」

「イエス、マスター」

アレイスター至上主義であるエセルドレーダは自分が行くこと提案するが却下され、留守番を命じられる。無論アレイスターの命令を断るはずもないエセルドレーダは素

直にその命令に従った。

「それでは行つてくる」

「行つてらっしゃいませ、お気をつけて」

アレイスターは夜の街を歩き出す。向かうは先は郊外の神社、姫島神社だ。

◇

「いやあああああつ!!!母さまあああああつ!!!」

「優秀な巫女ではあつたようだが、黒き天使などにそそのかされるからそのような目に遭うのだ」

深夜の神社で一人の少女が母親らしき女性に泣きながら必死に声を掛けている。女性は刃物のような物で袈裟斬りにされたようで、大きな傷口から絶え間なく大量の血が流れていた。少女は必死に女性の身体を揺らす。女性の反応はない。おそらくこの女性は既に亡くなっているのだろう。

少女の周りは武器を手にした大人達に取り囲まれていた。

「さて、邪悪な黒き天使の子よ。次は貴様の番だ」

一人の男が少女にそう告げた。男の持つ武器は血に濡れている。少女の母親を殺

害したのもこの男なのだろう。

「恨むなら貴様の父を恨め」

「ッ!!!」

男が刀を少女に振り下ろす。少女は思わず目をつむった。

刀が少女に当たる直前、辺りに声が鳴り響く。

「二人のいたいけな少女を大の大人が多数で寄つてたかつてというのは美しくない。そうは思わんか？」

「誰だー!」

男は刀を止め声ができる方へと振り向く。そこには金髪の男が立っていた、アレイスターだ。

「誰だか知らんが邪魔しないでもらおうか」

「何故その子を殺そうとする。いったいその子が何をしたというのか？」

「ふん、この子は黒き天使と人の間に生まれた穢れた子、生きてはいけな存在なのだ」

「親がどんな存在であろうと生まれた時点で罪がある子などいないのだよ。それがたええ邪神の子であろうともな……」

「その存在自体が禁忌であるという者もいるのだ! 邪魔をするというのなら貴様もただ

ではおかんぞー！」

「余と敵対するか。それもよからう、ならばかかってくるがいい」

「ほぎけつ!!!」

男達が一斉にアレイスターへと襲い掛かる。しかし、男達は多少なりとも修行を積んだといつても所詮ただの人間、アレイスターの手によって瞬く間に殺されていく。

「残るは貴公一人だな」

「おのれ……なんという理不尽な力だ……」

「貴様もあの少女の母を殺したのだろう？因果応報という奴だ。余が言っても説得力はないがな」

最後の一人の頭が弾け飛ぶ。この場で生きているのはアレイスターと少女の二人のみであった。

「さて、少女よ。無事か？」

「は、はい。あの、助けてくれてありがとうございます」

少女は怯えながらも感謝の言葉を口にす。

「礼はいらん。それよりも貴公の母を吊つてやらねばな」

「ぐすつ、母さまあ…… うわああああん！」

母の死を再確認したのか、少女が再び泣き始める。アレイスターは黙って少女の頭

を撫で続けるのだった。

「朱乃からはなれろおおおお!!!」

「ふむ?」

突如大絶叫と共に光の槍がアレイスターへと降り注ぐ。無論、そんな物が効くアレイスターではないので障壁を張りそれを防ぐ。

すると、一人の墮天使が降りて来た。

「その武人のような雰囲気、貴公には見覚えがあるぞ。たしか……バラキエルという名だったか?」

「何故貴様がこんな所にいるのかは知らんが朱乃から離れろ!そして朱璃の仇を取らせてもらう!たとえ、それが無謀な事だと分かっっていようとみな!」

バラキエルは光の槍を携えてアレイスターへと特攻するが、小さな影がそれを防ぐ。

「止めて!!!」

「あ、朱乃!!!」

「どうしてこの人を殺そうとするの!この人は私を助けてくれたのに!」

バラキエルは自身の娘である朱乃の突然の行動に狼狽する。アレイスターの事を妻を殺した張本人だと思っていたが、それは間違いであつたらしい。

「この人が来てくれなかったら私も死んでたわ！父さまは一体何をやっていたの！今日はずっと家に居てくれるって、休みだって言ってたのに！父さまがいたら、母さまは死ななかつたのに！」

朱乃の糾弾が続く。

「母さまを殺した人達が言ってたわ！父さまが、黒い天使なのがいけないんだって！黒い天使は悪い人だからって！私もこの黒い翼があるから悪い子なんだって！こんな物、こんな物無かつたら母さまも死ななかつた！こんな黒い翼嫌いよ！あなたも嫌い！大嫌い！私の前から消えて！もう二度とその顔を見せないで！うわああああんっ！」

「あ、朱乃……」

「触らないで！」

最後まで言い切った少女、朱乃はバラキエルの伸ばす手を振り払い、アレイスターにしがみつき大きな声で泣き始めた。バラキエルは何も言う事が出来ず沈痛な面持ちで下を向いている。

「親というのは難儀な物だな。この子は余が引き取ろう。なに、悪い様にはせん」

「なっ！しかし…… いや…… そうだな…… 朱乃はこれからも狙われ続けるだろう。それならば貴様の元に居た方が安全なのかもしれん。貴様の元が世界で最も安全な場所なのは間違いないからな。だが一つ、一つだけ約束してくれ。朱乃を無事育てると」

「承った」

バラキエルにとつても苦渋の決断だったのであろう。しかし娘の安全を願ひアレ
イスターへと託す事を決めた。

バラキエルの娘、姫島朱乃はアレイスターに引き取られる事となつた。凶らずも朱
乃はアレイスターの元でその魔術の才能を開花させる。こうして、朱乃はブラツクロッ
ジの二人目の構成員となるのだつた。

第11話

「マスター、朱乃がリアス・グレモリーに接触、予定通り眷属になる事に成功しました」
「そうか……」

朱乃をアレイスターが引き取ってから数年、そこそこの力をつけた朱乃はある任務を言い渡された。その内容は現ルシファーでありアレイスターの友でもあるサーゼクスの妹、リアス・グレモリーの眷属になれという物であった。これはアレイスター達が悪魔陣営の情報を得るための俗にいうスパイである。リアス・グレモリーが選ばれたのはグレモリー家が情愛に深い一族かつサーゼクスもいるので、いざという時にどうにかなる可能性が高いためであり、さらにアレイスターには朱乃に同性の友を持つて欲しいという気持ちもあつたからである。

無論、悪魔陣営だけというわけではなくそのうちフリードを天使、もしくは墮天使陣営へと潜り込ませるつもりであつた。

「マスター？ どうかありませんでしたか？」

アレイスターはエセルドレーダの報告を聞いている時にもなにやら不満気な顔をしていた。朱乃は無事、その任務を果たした。エセルドレーダには特にアレイスターが不

機嫌になる訳が思いつかない。どうやらそれはフリードも同じようで不思議そうに首をかき上げている。

「エセルドレーダ、魔術師が足らん」

「はあ」

アレイスターの言葉に一瞬理解する事が出来ずにポカンとしてしていると、アレイスターがその先を話し始める。

「魔術師だ、魔術師。我がブラックロτζジは魔術結社だというのにエセルドレーダを含めても魔術師が2人しか居ないではないか。その上、フリードはまるで魔術が使えん」

フリードがグフッ!とシヨックを受けているのを横目で見る。結局、フリードには魔術の才能が欠片も存在しなかった。魔力が全く存在しなかったのだ。魔術結社の構成員としてはどうなのかと思うが、使えないならしょうがないとフリードは己の剣の技術を鍛え続けた。結果、そこらの魔術師よりよっぽど強くなり戦闘員としては非常に優秀であった。

「これは由々しき事態だ。なので余はスカウトへ行こうと思う」

「はあ」

いつになく熱くなっている自身のマスターに流石のエセルドレーダも若干の呆れ顔だ。だが確かにアレイスターの言葉も最もである。たった二人では組織を名乗るこ

とさえ難しいだろう。少数精鋭にも程がある。

「実はもう目星をつけている人物がいる。これからその者の所へスカウトへ行ってくるぞ。ついて来いフリード」

「あいさー!」

先ほどまでショックを受けていたフリードはアレイスターの言葉を聞いた瞬間に元気の良い返事をして復活している。まさに忠犬フリードだ。

「はあ………いってらっしやいませ」

エセルドレーダは呆れながらもアレイスター達を見送る。

アレイスターはフリードを引き連れて意気揚々とスカウトとやらへ向かうのであった。

◇

「曹操、次はフランスへ行こう。どうやらジャンヌ・ダルクの子孫が居るらしい。そいつも十分英雄の素質があるだろう」

「フランスか……ゲオルク、今度は本当だろうな。今回みたいにハズレだったらい加減怒るぞ」

「ははは…… 今度こそは大丈夫さ」

ここはトルコの片田舎。まだ日は沈み切っておらず鮮やかな夕焼けが空を染めている。そこを二人の学生服を身に纏った中学生らしき少年達が歩いていった。曹操と呼ばれた少年は学生服の上から漢服を羽織っていて、もう一人の少年はローブの様な物を着ている。

「今回もゲオルギウスの子孫が居ると聞いていたんだけどね？リサーチ不足だったよ」
「全く……」

相方の無責任な言葉に曹操は呆れた様のため息を漏らす。ゲオルクという男は優秀ではあるのだが今回の様にしようもないミスをする事がしばしばあったのだ。二人はそこそこ長い付き合いであるのもう曹操がそれに苦言を言う事はない。もはや慣れてしまったのだ。

「英雄の子孫達はなかなか集まらないが神器所有者はだいぶ集まってきたな」

「ああ、しかしやはり世界中どこでも神器所有者というのは迫害されているんだな。……被害を被るのは何時も俺たち人間だ」

「だけど曹操、俺含め皆、神器所有者は君に救われてきたんだよ」

「恥ずかしい事をいうな」

曹操は恥ずかしそうに顔をそっぽに向けた。ゲオルクは微笑ましそうにそれを見

ている。はたからみても仲がいいのがよく分かる光景だ。

「ッ！曹操!!」

「分かつている!」

次の瞬間、二人は一瞬顔を見合わせると臨戦体制をとった。曹操は手に光り輝く槍を、ゲオルクは霧の様な物を辺りに発生させている。二人の顔は先程の軽口を叩き合っていた時とは打って変わって真剣なものとなり、額に汗を垂らしながらある一点を見つめている。

「ほう?やはり二人とも優秀な様だな、フリード」

「はいな、ボス」

曹操、ゲオルクが見つめていた場所に突如、魔法陣が出現しその上に二人の人物が現れた。

「始めまして、余はブラックロツジが大導師マスターテリオン。こちらは部下のフリードだ」

「どうもよろしく♪」

一人は金髪の、もう一人は白髪の男だ。白髪の方はまだいい。確かに強者の雰囲気は感じられるがまだわかる。だがもう一人は別だ。恐ろしい程の力を感じる。気を抜けば膝まづいてしまいそうになるのを曹操は必死に堪えた。それに今この男は何

といった？マスターテリオン…… その名は……

「金色の魔人…… アレイスター……」

「ふむ、余としてはマスターテリオンの方を広めたいのだが…… 何故何時もアレイスターと呼ばれるのだろうかフリード」

「そりゃ昔の大戦の時のボスの悪名が強すぎるからでしょ」

「なるほど」

曹操は目の前で楽しそうに会話をしている二人を目にしながらも槍を握る力を緩める事は無い。何故なら目の前の人物が圧倒的な強者だからだ。金色の魔人アレイスター、かつて大戦時に天使、墮天使両陣営に莫大な被害をもたらした二天龍さえ容易く屠ったと言われている大悪魔だ。大戦を生き残った者たちは今だにアレイスターの事を恐れているという。

この時、曹操自身は気づかなかつたのだが槍を握る自身の手は力を込め過ぎて真っ白になっていた。

「それで、マスターテリオン殿は私達なんぞに一体何の用があるのでしようか？」

「そう固くならんでもいいぞ、三国志の英雄の子孫、曹操よ。余が会いにきたのは貴公では無い。ゲオルク・ファウストの子孫、そなただ」

「俺ですか？」

ゲオルクはまさか自分とは思わなかったため変な声が出そうになるが、それをぐつと堪える。ゲオルクの持つ神器、絶霧は神滅具だ。アレイスターはそれが狙いなのだろうか？二人はそう考えるがその予想はアレイスターによって否定される。

「何か勘違いしている様だが余が欲するのは貴公の持つ神滅具などでは無い。それが持つ能力など余にかかれれば魔術で再現出来る程度の物だ。余が真に欲するのは貴公の魔術の腕、つまり貴公自身だ」

「ツーなんと……それは光栄だ」

ゲオルクは絶霧を再現出来るというアレイスターの言葉に絶句するが、実際にアレイスターが言うのだから可能なだろう。それよりも驚愕すべきはアレイスターが自分が欲しいと言ったことだ。おそらく世界で最も魔術に精通した男であろうアレイスターからそう言われるのは魔術師としては素直に嬉しかった。しかしゲオルクにはその誘いを受ける気はなかった。

「貴方の言葉は非常に嬉しい。だが俺はその誘いを受けるつもりはない」
「ほう？」

アレイスターの表情が心なしか楽しそうな表情へと変わった。薄く笑みを浮かべ、視線でゲオルクにその先を言う様に促している。

「俺は既に曹操というリーダーがいる。曹操の英雄になる、そして人間としてどこまで

行けるかを追求するという信念に共感してるんだ。だから貴方の誘いは断らせてもらう」

「ゲオルク……」

ゲオルクはアレイスターを目の前にしてハッキリと拒絶の言葉を口にした。曹操は嬉しそうな、驚いた様な顔をしている。すると、それを聞いたアレイスターは手を叩きながら笑い始めた。

「素晴らしい！人間としての高みを目指す、良いではないか。余は常々、最も強い生き物は人間であると思っている。貴公達の信念は実に素晴らしいな」

金色の魔人は人間の可能性を語る。その様子は実に楽しそうだ。アレイスターの怒りをかうのではないかと思い、内心戦々恐々としていたゲオルクはアレイスターのその反応に呆気にとられる。

「誘いを断られてしまったのは残念だが良き者達に出会えた。余は貴公達の行く末を楽しみにしているよ。帰るぞ、フリード」

「はいな。でもボス、俺っち来た意味あったんですか？」

「特に無いな」

「ちよ！ボス！」

アレイスターとフリードはそう言うと言うと曹操達の目の前から姿を消した。アレイス

ターの姿が消えた瞬間、身体にかかっていた重圧が消え失せる。二人はホッと肩を撫で下ろした。

「ふう〜 いやはや驚いた。まさか金色の魔人のお出ましとは。全く生きた心地がしなかったな」

「ああ、俺は曹操が手を出すんじゃないかとヒヤヒヤしたよ」

「いや、あの隣にいたフリードとかいう奴が睨みを効かせていたからな。手を出し様にも出せなかった。今の俺では金色の魔人はおろかあれにも敵わないだろう」

ゲオルクは曹操の言葉に驚く。何故ならフリードがそこまで強い様には見えなかったからだ。

「そんなにか？正直そうは見えなかったが……」

「軽そうな奴だったがあれは強いぞ。いくら挑んでも切り捨てられるビジョンしか見えなかった。それにあの金色の魔人の側にいる奴が弱いはずがないだろう？」

言われてみればそれもそうか、とゲオルクは思う。こんなトルコの片田舎で予想外のエンカウントをするとは思ってもみなかった二人は一気に精神力を使った気がした。

その後、曹操とゲオルクは当初の予定通りフランスへと向かうのであった。

暗闇の森の中を一人の着物を着た女性が走っている。その後ろからは何人かの追っ手がその女性を追いかけていた。

「はあ……はあ……」

「ははは！何時までも逃げられるとは思うなよ！」

最悪だにやん……追っ手はまだまだ沢山いるし……

「痛ッ！」

「ふはは！遂に追い詰めたぞ、SSランクはぐれ悪魔、黒歌よ！」

「チッ！」

私、黒歌は主殺しをしてはぐれになった転生悪魔。妹の白音を守るためとは言え肝心の白音には拒絶されてしまった。それから追っ手の悪魔達から逃げる日々が始まった。逃げてても逃げててもそれは終わらない。私はそこそこ強いつていう自負があったから今まで追っ手に捕まる事はなかったけれど、追っ手を殺してしまう事はあった。そのせいでどんどんはぐれとしてのランクが上がっていき、遂にSSランクになってしまった。SSランクといえば上から二つ目、その上がああの金色の悪魔のみということを考えれば最上位と言っても過言ではない。その結果、悪魔達も本腰をいれ始めたのか今までは違い大戦を生き残った古くからの強者達を送り込んで来た。力では負けるつもりは無かつけど相手は経験が違う。徐々に徐々に追い詰められてしまったのだ。

「散々逃げ回ってくれたがそれも今日で終わりだ！Sランク以上は生死問わず。今まで貴様に殺された同胞の敵をここでとつてくれる！」

「白音…… ゴメンね駄目なお姉ちゃんで……」

足は傷つき動かない。もうダメだ……殺されると思った時、誰かの声が辺りに響いた。

「変わった気配があると思えば…… 面白そうな事になつてるではないか」

金髪と白髪の2人組だ。二人ともどう見てもヤバそうな感じがする。絶望が二倍になったかと思えば、今にも私を殺そうとしていた奴が悲鳴を上げた。

「あ、あ、あ、アレイスター！な、何故だ！何故貴様がこの様な所にいる！」

「アレイスター!?!」

さつきまで余裕な態度だった追つ手の悪魔が狼狽え始めた。顔は青ざめて全身が震えている様に見える。何事！と思つたけど追つ手の口にした名前に私も驚愕と共に納得した。金色の悪魔アレイスター、そんな大物が現れるとは思つても見なかったからだ。

「ふむ、貴公は猫又か？なるほど……」

「にや！にやあ……」

アレイスターが私を見つめている。美しい金色の瞳だ。まるでその瞳に吸い込ま

れるような錯覚を味わう。そして、同時に猫又としての本能が私に告げた。この人は格が違う、逆らってはダメだと。

「あ、あ、アレイスター！い、今ならその悪魔をおいて去るとならば、み、見逃してやらんこともないぞ！むしろそのままいなくなつて欲しいなくなつて……」

「外野が煩いな…… フリード、始末しろ」

「了解つすボス」

「な、何だ貴様は！やめ……ギャー！」

あつ…… 白髪に追つ手が殺されたにやん。さつきまであれだけ余裕かましてた癖に最後はかませみたくないやつだった。それでもあいつを瞬殺するなんて、白髪の方もヤバ強いにや。

「貴公、名はなんとという？」

「く、黒歌だにや」

「黒歌か、貴公は何やら変わった術が使える様だな」

「仙術のことかにや？」

「仙術か…… ふむ、魔術適性も高そうだ。ならば黒歌よ、我が部下となれ」

「にや!!？」

部下!? 私が金色の魔人の!?

「なんだ？不服か？」

「そそそそんなことないにや！めっちゃ嬉しいにや！」

無理無理無理！この人からの誘いを断るなんて無理にや！

「よし、目当ての人物には断られてしまったが良い拾い物をしたな」

にや！なんか凄い上機嫌だにや！けっこう……いやかなりカツコいい……つていやいやいや！この黒歌さまに限ってそんなニコポみたいな……

白音え……お姉ちゃんヤバイのに目を付けられたかと思っただらもつとんでもないのに捕まっちゃつたにや……

◇

後日、黒歌はブラックロツジが社員旅行もあり福利厚生もしっかりしている超優良企業？だと分かり大喜びするのだった。

第12話

私立駒王学園、近辺の私立では最も設備が整っている事で有名な学校である。また、ここの特徴としてつい数年前に共学になったばかりであるため女子の割合が大きく、女子の意見が強いという物があった。

そんな学園の中庭で一人の少年が寝そべっている。腕は空へ伸ばしており、両手は何やらワキワキと動かしていた。

「あく、おっぱい揉みてえなあ」

おっす！俺は兵藤一誠。ちよつと女の子のおっぱいが好きな高校二年生だ。おい！そこ！変態っていうな！ただでさえ学校で変態三人衆って言われてんだぞ！あ、ちなみにあと二人は松田と元浜だ。二人ともそれぞれ『セクハラパラッチ』、『スリーサイズカウンター』という恐るべき異名を持つ猛者であり、俺の心の友でもある。

学校の女子は俺達を嫌悪してるけど俺は胸を張っておっぱいが大好きだつて言うね、胸だけに。大体、男なんてみんなエッチな事で頭がいっぱいなんだよ。彼氏持ちの女子ども！お前らの彼氏だつてきつとおっぱいのことばっか考えてると思うぞ。いや、

そうに違いない！絶対そうだ！

「おーい！イッセー、素晴らしい覗きスポットを発見したぞ。松田が待つてるからさっそく覗きに行こうぜ！」

あの周りに人が居たら通報されるであろうセリフをはきながらこつちに向かって来る坊主頭は松田だ。その目はまるで宝物を見つけた様に輝いている。ふう、全く覗きだなんて。俺がそんな犯罪めいたことをするはずが……

「何だと！こんな事してる場合じゃねえ！早く案内しろ、松田ア！」

あるんだなく、これが。だって覗きスポットだぞ！そんな場所があるのに行かないのは男じゃねえだろ！それに松田が素晴らしいっていうレベルだ。これは期待できるぞ。ぐふふ、おっぱい達が俺を待つてるぜ！

だけど松田に案内されて着いた場所はただの倉庫だった。

「おい、松田、元浜。ここはどこが覗きスポット何だよ」

「ふっふっふ、そう焦るなイッセー。倉庫の周りを良く見ろ」

「なっ！こ、ここはまさか！」

「そうだ。この倉庫は女子剣道部の部室と隣合わせになっている」

俺は全身が雷に打たれたような気がした。素晴らしい！まさに目から鱗だ！なんでもままで気づかなかつたんだ。学校にこんな覗きスポットが存在していたなんて！

「うおおおお!!よっしやあ!それじゃあきつそく覗こうぜ!」

「さて、イツセー。この覗き穴はそこまで大きくない。だからこのスポットを見つけ
た俺らが最初だ。お前は後」

「まあしやうがないか。早くしてくれよ!」

うー、そう言われたら黙るしかない。ここを先に見つけたのは松田達だもんな。

松田が僅かに空いている穴を覗き始めた。ちくしよう、顔がニヤついているのが丸
かりだぜ。

「かああ!片瀬いい足してんなあ!」

「うおお!村山の胸、マジでけえ!」

何だと!村山はうちのクラスでもかなりおっぱいが大きい女子だ。壁の向こうに
はあのおっぱいがあるのか!俺だって目を付けてたんだぞ!

「二人とも早く変わってくれ!」

「待て!もうちよつと、もうちよつとだけ!」

くそく、二人ともなかなか穴から離れねえ。早く退いてくれないと剣道部の着替え
が終わっちゃう!

「……何か聞こえない?」

やばっ!気づかれたか?

「みんな！隣の倉庫から覗いてる奴がいるよ！」

「やべえ！ばれた！」

ちよつと騒ぎ過ぎたせいかな剣道部に覗いてることがばれちゃった！俺まだ覗いてないのに〜！

「あつ！変態三人衆がいるわ！きつとこいつ等よ！」

「おい！逃げるぞ！」

『逃がすかゴラアアア!!!』

ひゃ〜！剣道部の女子が竹刀持って追いかけてくるよ！完全に女子の出す声じゃないし！目も血走ってるぞ！あれ？俺今回なんも悪いことしてなくね？

「まずいつ！このままだと追いつかれるぞ！奴ら尋常じゃない！」

「くそ！こうなったら……」

「お、おい！なんで俺の方むくんだ！」

まさかそんなことしないよな？俺たち親友だもんな？

「さらば相棒！俺たちのために死んでくれ！」

「イツセー！お前の勇姿は忘れん！」

「ちよつ！お前等ふざけん……グフっ！」

嘘だろ！あの野郎ども！俺を置いて逃げやがった！何が相棒だよ！

松田にタツクルされた俺は体制を崩してその場で転んだ。すぐ後ろには剣道部の追手が迫ってきている。もはや逃げたす時間も無く俺は取り囲まれた。ああ、皆さん完全にキレていらつしやる……

「あのく、俺は覗いてないなんて言い訳通したりは……」

『するはずないでしょ!!!』

「ですよねく」

『天誅!』

「ギヤアアアアアアアア!!」

松田……… 元浜……… てめえ等……… 絶対にゆるさねえ………ぞ………

◇

「うく、身体中が痛い………」

ちくしょう、あいつ等散々人の事竹刀で叩いてくれやがって。木刀でなかっただけましと思うべきか……… 大体俺は今回何もしてねえっつーの! 日頃の行いのせいであるで信じて貰えなかったけどな!

「ふふ、相変わらず欲望に忠実な男だ」

「く、クロウ先輩……」

急に話しかけられたから誰かと思えば何時の間にか三年のアレイ・クロウ先輩が立っていた。アレイ・クロウ、名前から分かる通りこの人は外国人でありハイパーイケメンだ。同学年にも木場っていうイケメンがいるけどこの人はそいつとは違う。具体的何が違うって言われると困るんだけど、こう何か違うんだよな。木場が女子に囲まれてチャホヤされてるのを見ると頭カチ割ってやろうかと思うけど、この人に対してはそんな事は思わない。そもそもクロウ先輩は女子に囲まれるという感じが無い。駒王学園二大お姉さまの一人、姫島先輩がいつも一緒にいるというのもあるけどこの人の前に立つと自分ごとつてもちつぽけな存在に感じるんだ。なんかこう、オーラみたいな物を感じて、エッチな事を考えるのも恥ずかしくなってくる。絶対普通じゃないよな、この人。

俺はこの人に何故かはわかんないけど気に入られたのか、こうして話しかけられることが多かった。

「間も無く時代は動き出す。それも貴公を中心としてだ。せいぜい死なんよう気をつけることだな、赤き龍の宿主よ」

それだけ言うとかクロウ先輩は去っていった。

??? 時代？赤き龍？いつもよく分からない事を言う人だが今日はいつにもまして

よく分からなかった。

◇

「ご主人様、先程の言葉は？」

「学内ではそれは辞めろと言ったはずだぞ朱乃」

「ッ！失礼しました」

放課後の学園の廊下を二人の生徒が歩いていた。一人は姫島朱乃、もう一人はアレイ・クロウだ。もちろんアレイ・クロウというのはアレイスターが駒王学園へ潜入する為の偽名である。朱乃がスパイとしてリアス・グレモリーの眷属になって数年後、赤龍帝の籠手の反応が感知された。そして偶然その反応があつたのはリアス・グレモリーの縄張りであつた。

二天龍は争いを引きつける。暇を持て余していたアレイスターは確実にこの先、何が起こると思ひ駒王学園へと潜入していたのだ。

「そう遠くないうちに、あれは目覚めるであろう。人間のまま生き抜くか、それとも人外へと転生するか…… ふふ、楽しみだ」

「アレイ君が楽しそうで何よりですわ。さて、それでは私は今日もリアスの所へ行つて

きますわね」

「ああ、今日の夕食はもつ鍋だ。あまり遅くならん様にな」

「あらーそれは楽しみですわ」

辺りに他の生徒の姿はない。アレイスターと朱乃の笑い声だけが廊下に響き渡るのだった。

第13話

「おい黒歌！その肉は俺っちのだろうが！」

「ふふふ、甘いにやん、甘々にやんフリード！この世の中は弱肉強食！それは鍋でも変わらないわ！」

「あらあら、二人ともそんなに焦らなくてもまだまだ沢山ありますわよ」

現在、アレイスター家兼ブラックロzzaアジト（50L3D2K）は夕食の真っ最中であつた。基本的に各員それぞれなんらかの任務があり全員が集まることは少ないのだが、本日は珍しく一人も掛けずに仲良くもつ鍋を突ついている。ここだけ見ればまるで休日の家族の団欒の様に感じるだろう。

フリードと黒歌は激しい肉の争奪戦をしていて朱乃は鍋を取り仕切る鍋奉行役だ。エセルドレーダは黙々とアレイスターの分をよそる専属給仕と化している。アレイスターはエセルドレーダから器を受け取りながらそれを楽しそうに眺めていた。

「フリードよ、貴公がここにいるということは墮天使が動き出したのであろう？それはどうなっている」

唐突にアレイスターが口を開く。現在のフリードの任務は墮天使陣営へのスパイであり本来ならばここに居ないはずだった。黒歌と肉争奪戦をしつつもフリードはアレイスターへと報告を始める。

「そつすね、あいつ等この町で何かやるつばいっす。まあ下つ端の暴走みたいなんでアザゼルは関わってないですね。あ！あと例の赤龍帝の子に手を出そうとしてるみたいっす。赤龍帝だつっことは分かってないんですけどね」

「ふむ、フリードは引き続き任務をこなせ。黒歌、禍の団のほうはどうなっている？」

フリードの報告によれば近いうちに面白い事が起こるようだ。赤龍帝にもなんらかの変化が起こるだろう。アレイスターは僅かに口角をあげ、日本酒を呷る。そのスッキリとした辛口な味わいを楽しみながら一息ついた後、今度は黒歌へと報告を促した。

「うくん、こっちはまだあんまり動きがないにや。いろんな派閥に分かれてるから纏まりがないし…… どのいつもこいつもオーフィスの力が目当てなのよ」

「そう、我いっばい蛇渡したのに誰もグレートレッド倒してくれない」「にやっ」

黒歌は突然聞こえた此処にいるはずのない人物の声が聞こえたため椅子から転げ落ちた。気がつけば一人の少女が椅子に座っていた。まだ幼い、外見はエセルドレーダと同じくらいにも関わらず物凄い勢いでもつ鍋を食べている。

「な、な、な、なんでオーフィスが此処にいるにやん!!」

「我、黒歌について来た」

オーフィスの言葉に黒歌はへニヤッと座り込む。心なしか猫耳もへたれていた。

「なんだ知らなかったのか。余はてつきり黒歌が連れて来たのかと思つていたぞ」

「俺つちもボスがなんも言わないからそうだと思つてたわ」

「ぐぬぬ…… 不覚だったにやん……」

どうやら黒歌以外はその存在に皆気づいているようであった。ただあまりにオーフィスが自然であつたため誰も突つ込まなかつたのだ。

「して、今日は何用で参つた、無限の龍神よ」

「我、アレイスターにグレートレッド倒すの手伝つて欲しい。聖書の神を殺したあれならば我とグレートレッドも容易く滅ぼせる」

「何度も言うがそれは断らせてもらう」

アレイスターがはぐれ悪魔に成つてからこうしてオーフィスは度々アレイスターに助力を求めてきた。しかし、アレイスターはそれを断り続けている。

「余はな、もともと貴公の事はあまり好いてはおらん。余は無限という物が嫌いなのだ。それこそ憎いほどにな。それは無限であろうと夢幻であろうと変わらん」

オーフィスは無限の龍神。かつて邪神に囚われ無限回廊に縛られていたアレイス

ターにとって当然好ましい物ではなかった。

「そう、でも今日は対価を持ってきた。アレイスターの組織、対価次第では手伝ってくれ
るって前言ってた」

「ほう、言ってみるがいい」

確かに以前、アレイスターはあまりのオーフィスのしつこさに思わずそう言った記憶があった。

無限の龍神が払う対価。自信満々なオーフィスを見てると少しばかり興味が湧いてきた。

「アレイスターがグレートレッド倒してくれたら我の事好きにしてい。それこそぐつちよんぐつちよんのねつちよんねつちよんにしてくれてもいい」

『は?』

場にいる誰もが思わず声を出す。オーフィスの爆弾発言に場が凍った。オーフィスはアレイスターがグレートレッドを倒した暁には自らを差し出すというのだ。誰も予想だにしなかった発言に皆、空いた口が塞がらない。

「なぜその様な事を思いついた?」

代表してアレイスターがオーフィスにそう聞き返す。オーフィス自身は非常に無垢な存在であるためまさかその様な事を思いつくとは思わなかったのだ。そもそも

オーフィスが自分の言ったことを理解しているかさえ怪しかった。
「ん」

オーフィスがある方向を指差した。皆、一斉にその方角を見る。するとそこに居たのはオーフィスとそう変わらない少女、エセルドレーダだった。

「アレイスターはロリコンだつて言つてた。我やエセルドレーダみたいなのが好きだつて」

先程の比ではない沈黙が場を支配した。瞬き一つする事が出来ない。まるで時間停止の魔術が発動したような感覚だ。しかしただ一人だけ、そう見ただけで分かるくらいに怒りを浮かべている人物がいた。

「オーフィス、貴方にそれを教えたのは誰かしら？」

「黒歌」

「にゃっ」

あまりのエセルドレーダの形相に速攻で自白するオーフィス。その冷や汗を流す姿は誰が見ても無限の龍神とは思わないだろう。

その一方で黒歌はこの世の終わりのような表情を浮かべている。

「(ざ)(ざ)誤解にゃ！ ただボスが私の誘いに乗つてこなかったからそうなのかな」

「……」

「マスターが貴方に手を出さないのは貴方にその価値がないからよこの駄猫!!!」
用、お仕置きよ!!!」
問答無

「ぎにやああああああ!!!」

エセルドレーダの魔術が雨あられの様に黒歌に炸裂する。

「そんな!!」主人さま!私の様な育った女は眼中にないと!!」

「それは違うぞ朱乃。余はロリが好きなのではない。好きになった女がロリだったのだ」

「それならば私にもチャンスがあるのですね!」

「ふふ、余が欲しいと思うような女になる様に励む事だな」

「よーさすがボス!」

エセルドレーダは黒焦げになった黒歌へと更に執拗に追撃を加え、オーフィスはアレイスターにしがみつきながら涙目でプルプルと震えている。朱乃は何やら決意を新たにして燃えている様だ。フリードは謎の忠誠心からアレイスターの言葉に感動している。一言でいえばカオス空間が広がっていた。

この騒ぎは夜遅くまで続くのだった。

夜の町を一人の少年が必死の形相で疾走している。そのスピードはオリンピック選手さえも凌駕しているかもしれない。

「糞！なんでこんな事になったんだよ！」

少年、兵藤一誠はそう悪態をつく。この所イツセーの身には不可解な事ばかりが起きていた。朝に異常に弱くなる、今のように夜に身体能力が極端に増加する、そして極めつけは——つい先日できた彼女に殺される夢だ。その次の日から彼女の存在は忽然と消えた。携帯からはメールアドレスが消え、友人達は誰一人としてそれを覚えていない者はいなかった。

「なんだ？鬼ごっこはもう終わりか？」

「ひっ！」

イツセーの目の前を空から降りてきた男が遮る。

今日は連日の不思議な現象に疲労していたイツセーを見兼ねた友人達が開いてくれたA V鑑賞会だった。その帰り道、突如として羽の生えた男に襲われたのだ。羽なんて物が生えている時点で明らかに普通じゃない。イツセーは必死に逃げようとするが、相手は空を飛ぶことが出来る。そのスピード差は歴然でありその結果が今の目の前の光景であった。

「その困惑した様子…… 貴様まさかはぐれか？」

目の前の男がなにやらボソボソ喋っているがなんの事かイツセーは全く理解する事ができない。体力は既に尽き、膝は震えていてもう逃げれそうになかった。

「はぐれなら殺してしまっても問題ないだろう。些細なことで計画が狂っても困るしな」

そう言うのと男の手に光の槍が現れる。それを見た瞬間、イツセーは猛烈な悪寒に襲われた。光の槍がとてつも無く危険であることが自然と理解できる。それにイツセーにはその槍に見覚えがあった。件の彼女が夢の中で自分の事を刺し殺した槍と一緒に。そういえば夕麻ちゃんもこの男と同じ翼が生えていた気がする、そんな事をイツセーが考えていると男が槍を投げた。上がった身体能力のおかげか目で槍を捉える事は出来るが、一高校生でしかないイツセーは槍自体をよける事はできない。

「ぐ……あああ……」

イツセーの腹に槍が突き刺さり、尋常ではない痛みが全身を襲う。たまらずイツセーは膝をついた。明らかに普通ではない痛みだ。同じように包丁で刺されてもこれほどの痛みはないだろうと思えるほどの痛みであった。

「痛いか？痛いであろう。お前たち悪魔にとつて光は猛毒だからな。しかし、意外と頑丈だな。一撃で死ぬと思つたのだが」

男は再び手に光の槍を出現させる。マズイっ!と思うがあまりの激痛に身体が動かず逃げる事が出来ない。

「それでは今度こそさよならだ」

「それは少し待ってもらおうか」

「あ……せん……ばい……」

男が槍を投げようとした瞬間、特徴的な声と共に見慣れた先輩が現れた。神出鬼没な人だがまさかこの場所にまで現れるとは思っても見なかった、朦朧とする意識の中でイツセーはそう思った。

「なんだ貴様、人間か?」

「生憎だが、まだ物語はプロローグさえ終わっていない。ここで兵藤一誠を死なせるわけにはいかないのだ」

「意味の分からない事を…… 邪魔をするならば貴様からだ」

男がアレイスターへと槍を投げる。それをみてアレイスターは心底つまらなそうに呟いた。

「このまま逃げるのならば見逃したが…… 敵対するのならばしょうがない。ン・カイの闇よ」

アレイスターの手から黒い重力球が発射された。ン・カイの闇……それはかつて宇

宙の爆発さえも耐えるデモンベインの装甲を容易く削り取った魔術だ。

重力球は簡単に光の槍を飲み込み、そのまま男を消滅させた。断末魔を上げることさえ出来ない、あまりにも呆気ない最後だった。

「無事か？兵藤一誠よ」

「は……はい……」

「ふむ、どうやら喋るだけの元気はある様だ」

イツセーはなにご起きているのか全く分からなかったが見知った人物に声を掛けられ少しばかり落ち着く事ができた。ただ落ち着くと今度はまた腹の痛みにのたうちまわる事になる。

「無様な様だがまあそれはしょうがないか。しかし、かなり豪快に穴が空いているな。見せてみる」

アレイスターがイツセーに手を伸ばした瞬間、

「その子に触らないで!!!」

「おっと」

アレイスターの目の前を消滅の魔力を帯びた魔力弾が通り過ぎる。

「いやはや懐かしい物を見せてもらった。こんばんわ、グレモリー家の姫よ」

紅い髪の少女がイツセーをかばう様にアレイスターの前に立ち塞がった。その目は厳しくアレイスターの事を睨みつけている。

「貴方…… まさか同じ学年のクロウ君？ 一体その子に何をしたのかしら」
「勘違いして貰っては困る。余は兵藤一誠を助けてやったのだよ」

アレイスターは紅髪の少女、リアス・グレモリーに先程の墮天使の羽を見せつける。リアスはそれを見て驚いたように声を上げた。

「ちよつとまって！ 貴方が墮天使を倒したって言うの?!」

「そうだと言っている。さて、もう夜も遅い。余はこれで帰らせてもらおうぞ」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！」

「余にかまっついていて良いのか？ 兵藤一誠が死ぬぞ？」

「あくもう！ 明日学校で詳しく聞かせて貰うわよ！」

今にも死にそうなイツセーをみて重要度がどちらか高いか判断したりリアスはアレイスターを引き止めるのを諦めイツセーへと駆け寄った。

「ふふ、ようやく時代が動き始める。ヒーローとヒロインが出会う、典型的なボーイ・ミーツ・ガールだが……王道だからこそ面白い。兵藤一誠はまだまだ弱いがやはりヒーローというものはそれで無くてはならん」

夜の町を一人、アレイスターが歩く。

「奴がこれから何処まで成長するか…… 奴には大十字九郎と似た雰囲気を感じる。で
きれば大十字九郎のように余の所まで登ってきて欲しいものだ」

アレキスターはこれからの想像し笑いながら消えて行くのだった。

第14話

「やあ、兵藤一誠君はいるかな？」

「ああ、俺は此処だ」

イツセーが羽の生えた男に襲われてから一夜明けた放課後、学校のイケメン王子こと木場祐斗がイツセーの教室へと訪ねてきた。

昨日の夜の不可解な出来事、それは夢でもなく現実だった。謎の男に腹を貫かれた事も現実で、その男を学校の先輩が殺したことも現実。にわかには信じられないが朝の出来事がそれを証明していた。

「この場ですぐ説明してくれるって訳じゃないんだよね？」

「そうだね、僕はあくまで案内役。それを君に説明するのは部長、リアス・グレモリー先輩の役目さ」

リアス・グレモリー、鮮やかな紅の髪で抜群のスタイルの先輩。学園の二大お姉さまの一人でもあり、イツセーからしたら高嶺の花もいとこだ。その人が今日の朝起きたら同じベッドで全裸で寝ていたというのだからイツセーはそれはそれは驚いた。ち

なみにその時に人生初の生乳を見るといふ衝撃的な出来事もあつたのだがそれは割愛する。

そのリアス・グレモリーが昨晚の事をすべて説明する、使いを遣るから放課後まで待てと言うのだからイツセーは渋々待つていたのだつた。

「さあ、ついて来てくれ。部長の元に案内するよ」

ついに来たか、これですよやく最近の謎が解ける、イツセーははやる気持ちを抑え木場の後を追う。周りの女子が木場×兵藤とか兵藤×木場とか何とか言つてゐるがそんな事は今のイツセーの耳には全く入つてこなかつた。

◇

「ここに部長がいるんだよ」

木場にイツセーが連れて来られたのは旧校舎の一室。旧校舎などこんな機会が無ければ来る事はないためイツセーはつついキヨロキヨロと辺りを見回してしまふ。旧校舎は新校舎と違つて木造二階建てで外から見る分には非常に寂れていた。しかし、こうして中から見ると先程とは全く異なる印象を受ける。旧校舎特有の幾重にも張り巡らされた蜘蛛の巣や積もつた埃が目に入ることはなく、廊下は綺麗に掃除されてい

る。木造という所を目をつむれば現役で使用していると言われても違和感がなかった。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

木場が目の前扉をノックする。するとすぐに扉の向こうから朝聞いた声と同じ声が返ってきた。扉のネームプレートにはオカルト研究部と書かれている。オカルト研究部、明らかに怪しい雰囲気だ。一抹の不安を感じるが此処で帰ったら真実を知る事が出来ない。イツセーは意を決して部屋の中へと入るのだった。

「遅かったな、兵藤一誠」

「にやあ〜」

「って何やってるんですか先輩！」

オカルト研究部の部室へと入ったイツセーの目にまず飛び込んできたのはソファアーに座り、学園のアイドル塔城小猫を膝に乗せ撫で回しているアレイスターの姿だった。あまりの予想外の出来事に思わずツツコミを入れてしまう。こっちは覚悟して入ったというのに……そう思わずにはいられないイツセーだった。

「何と言われてもな…… ペットの猫を撫でているようなものだ」

「にや〜ん」

「いやいやいやいや！」

アレイスターは何だそんな事か、と言いながらも小猫を撫でるのを止める事は無い。小猫は小猫で非常に気持ち良さそうにしてされるがままになっている。普段学校で見せる無愛想な小猫しか知らないイツセーにとってその姿は衝撃的であった。どうやらそれは木場も同じ様で目を丸くして驚いている。同じ部活の木場ですらこの驚き様だ。これはかなりレアな光景なのだろう。

「またえらく懐いてるね小猫ちゃん？」

「アレイ先輩に撫でられると、何処かの王様のペットになった気がします」

確かに小猫の言うとおり、今のアレイスターと小猫の姿は自分のペットを可愛がる王とそのペットの様だ。驚くべきはその違和感の無さ。これも全てアレイスターの纏う雰囲気の為だろう。

そこでイツセーは肝心のリアス・グレモリーが居ない事に気がついた。先程部屋に入る時には声が聞こえたので居ないはずはない。一体何処に居るのだろうかと部屋を見回す。先程は衝撃的な光景に目を奪われたが、なるほどオカルト研究部の部屋はその名に相応しく、胡散臭い魔方陣や文字が至る所に書かれている。

すると部屋の奥からシャーっと水の流れる音が聞こえてきた。そちらの方へと視線を向けてみれば今度はシャワーカーテンが目に入ってくる。こんな部屋にシャワー完備!?と思うがそんな事はこれからの話に比べれば些細な事だ。しばらくするとシャ

ワーが止まりそこから二人の女性が出てきた。一人は言わずとしたりアス・グレモリー、もう一人は今の時代では貴重なポニーテール保持者、姫島朱乃だ。

「ゴメンなさいね、昨晩は色々忙しくてシャワーを浴びれなかったから今汗を流してたの」

そう言いながら出てきたリアスの髪の毛はほんのり湿っていて実に扇情的だ。イツセーはついつい先程のシャワーシーンを想像し自然と顔がだらしなくなる。健全な男子高校生な上に性欲の塊のようなイツセーだ。それもしょうがない。小猫がジト目でイツセーを見ているが、小猫は小猫でアレイスターに撫でられて目以外はだらしく緩みまくっているのでお互い様だろう。

「リアス・グレモリー、貴公が余達を呼びつけたのだろうか？ならば早く本題に入るがいい。それと朱乃、茶だ」

「分かつてるわよ。待たせて悪かったわ。それにしても貴方くつろぎ過ぎじゃない？」「何を言う。余は全くの自然体だ」

「はあ、頭が痛いわ」

正直この部屋の主は誰かと聞かれたらほぼ全員がアレイスターだと答えるに違いない。しれつと朱乃に茶を要求するアレイスターの態度はそれ程までに堂々としていた。

アレイスターに促され、ようやくため息を尽きながらリアスが話を始める。

「これで全員揃ったわね。それじゃあ兵藤一誠君、アレイ・クロウ君。いえ、イツセーとアレイ」

「は、はい」

「私たちオカルト研究部は貴方達を歓迎するわ、悪魔としてね」

イツセーはリアスの言葉にポカンとしている。対するアレイスターは只々笑みを深めるばかりであつた。

◇

「粗茶です」

「あ、どうも」

朱乃の入れたお茶を飲んで一服、イツセーはしばし考える。先程リアスは悪魔と言つた。それは一体どういう事なのか。頭のおかしいオカルトかぶれか、はたまた本当に悪魔という種族なのか。考えても分からないので結局イツセーは話の先を待つ事にした。

「イツセー、驚かないでね。私たちは悪魔なの」

「はあ」

正直そう言われてもいまいちピンとこない。イツセーの想像する悪魔と言えば羽や角が生えている異形の存在だ。それに比べて目の前の人物はどう見ても普通の人間と変わりない。想像する悪魔の姿とは似ても似つかなかった。

「信じてなさそうね？じゃあこんなのはどうかしら——天野夕麻」

その言葉を聞いた瞬間イツセーの目が大きく見開く。天野夕麻、それはイツセーの彼女であり突如として消えてしまった者の名前だ。思い返してみればこの少女との出会いが全ての発端だった気がした。

「詳しく…… 詳しくお願いします」

「天野夕麻、この少女は間違いなく存在したわ。朱乃」

「はい」

朱乃が懐から一枚の写真を取り出した。そこには一人の少女、天野夕麻が写っている。よく見れば昨晚の男と同じ様に背中からカラスの様な黒い羽が生えている。

「この子、いえ、これは墮天使。貴方にも分かるでしょう？これが人間でない事は」

イツセーは頷く。リアスの言葉通りにそれは一目瞭然だった。何処に羽の生えた人間がいるというのだ。

「これは元々貴方を殺すために接触した。目的を達したから周りの人間から自分の記憶

を消したのよ」

「でも先輩！俺生きてますよ！」

「それはこれから説明するわ。貴方はその身に神器と呼ばれる物を宿している。恐らくその所為で狙われたんでしょう」

「そんな！たつたそれだけで！」

「二誠君、よく聞くんた。神器は特定の人間に宿る規格外の力。その力は墮天使や悪魔をも凌駕する可能性がある。その墮天使は君の力を恐れたんだろう」

取り乱すイツセーを木場がなだめる。落ち着いてよく考えてみるとそういえば神器という物はイツセーにも聞き覚えがあった。天野夕麻に刺された時、確かその様な事を言っていた気がする。

「イツセー、手をかざして頂戴」

「手ですか？」

「そう、そして貴方が最も強いと思う物を想像するの」

「強い者……ドラグ・ソボールの孫空悟かな？」

「それじゃあ次にそれが最も強く見える姿を真似るのよ」

「えっ」

「早くしなさい」

イツセーは渋々立ち上がった。正直言ってこれはかなり恥ずかしい。もう物語の登場人物の真似事をするような年齢ではないのだ。しかし周りの人間の顔は真剣であつたため嫌ですとは言える雰囲気では無い。

「す〜は〜……」

かつて幼少の頃、イツセーはドラゴン波が撃てると思い込み一心不乱に練習していた事があつた。今思い返して見れば馬鹿な事をしていたと思う。だがその時はきつと練習すればいつかは出来ると信じていたのだ。

あの懐かしき日々から数年後、身体も大きくなり少年はそろそろ青年に差し掛かるうとしている。もう昔の様な無邪気な心は忘れてしまった。だが今だけは、そう今だけはあの頃の気持ちを思い出そうではないか。

構えを取ろうとすると驚く程に身体がスムーズに動いた。何百、何千と繰り返しその動きはしっかりと身体が覚えていたのだ！その事実自然と笑みが浮かぶ。

深く深呼吸をして精神統一をする。もう後戻りは出来ない。ならば最高のドラゴン波を演じて見せようではないか、イツセーは遂に覚悟を決めた。

「ド〜ラ〜ゴ〜ン〜波ああああああ!!!」

やった！やりきつたのだ！ハリウッドなど目では無い。この時、イツセーは本物の孫空悟になつたのだ。

「さあ、目を開けて。魔力漂うこの空間なら神器も容易く……つてあらう？」

「えー!!!何も起こないじゃないですかあ!!」

「おかしいわねえ、どうしてかしら?」

「そんなあ!!!」

男イツセー、17歳にして渾身のドラゴン波であった。その結果が何も起こらないなど流石に不憫過ぎる。リアスも思惑と違ったのか不思議そうに首を傾げている。

すると此処にきて今まで沈黙を貫いていたアレイスターが声を上げた。

「やり方がヌルいのだよりアス・グレモリー。こういう男は多少強引なほうが上手く行くものだ」

「ちよ、ちよつとなにするのよ」

アレイスターは立ち上がりおもむろにイツセーの腕を掴む。リアスが慌てて止めようとしたがアレイスターはそれを無視。イツセーに魔力を流し始めた。

「最初からこうすれば早かったのだ」

「アバババ!!アババ!!アババババババ!!」

「イツセー!!大丈夫なの!!イツセー!!」

数秒後、アレイスターが手を話すとイツセーは崩れ落ちた。慌ててリアスが駆け寄る。

「イツセー無事☒意識はある!？」

「は、はい…… なんとか……」

「見てみる。上手く行つたではないか」

「あつ! 本当だわ!」

アレイスターの言葉通りイツセーの左腕には赤い箆手の様なものがはめられていた。

「うわ! なんじゃこりゃ!」

「イツセー、それが神器よ。貴方はそれを危険視されて殺されたの」

「あの…… それじゃ俺が殺されたのも本当で事ですか?」

「ええ、あの時は貴方に召喚された。そこで死にそうな貴方を見つけてその命を救うことにしたのよ。ほら、このチラシ。貴方も見覚えがあるでしょう?」

リアスはそう言つて魔法陣の書かれたチラシを取り出す。それは確かにイツセーにも見覚えがあつた。たしか駅前で配られていたものを貰つた記憶がある。

「イツセー、貴方は私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わった。私の下僕悪魔としてね」

次の瞬間、イツセーとアレイスター以外の全員の背中から悪魔の翼が生えた。一瞬、ギョツとするがイツセーも恐る恐る自分の背中を触つてみると確かに手のひらから

翼の感触が伝わってきた。信じたくないが手のひらの感触が確かに現実だという事を伝えている。

「……マジですか？」

「おおマジよ。さあ、改めて紹介するわ。まずは、祐斗」

「僕は木場祐斗。分かってるかもしれないけど君と同じ二年生。僕も悪魔さ」

「二年、搭城小猫。悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。この部の副部长でもあります。私も勿論悪魔ですわ」

「そして私がこのオカルト研究部、部長。グレモリー家リアス・グレモリーよ。爵位は公爵。よろしくね、イツセー」

「こ、こちらこそよろしくお願ひします！」

まさか悪魔に転生するとは……

次々と発覚する衝撃の事実にはイツセーの頭は

もうパンク寸前となっている。だが、どうやらとんでもない事になったということだけは理解する事ができた。

「イツセーには悪いけど……」

本題は此処からよ、アレイ」

「ようやくか、余は退屈過ぎて帰ろうかと思つたぞ」

実際、アレイスターはイツセーが神器を発現させたのを見て満足していた。正直後の事はどうでもいいと考えていたのもう飽きていたのだ。ぶつちやけあと少し遅け

れば帰っていただろう。

「アレイ、単刀直入に聞いわ。貴方は何者なの？ 貴方から感じる雰囲気は人間の物。それなのに昨晚貴方は墮天使を倒していた」

「ふむ、余が何者か…… 人間だといえば人間であるし、悪魔だといえば悪魔でもある。だがそのどちらでも無いといえればそれもまた正しい」

「誤魔化さないで！」

リアスが声を荒げるがアレイスターの態度が崩れることは無い。

「別段誤魔化している訳ではないさ。どれも本当のことだが、まだすべてを語るには時期尚早だ。だが敢えて言うならそうだな…… 余はただの魔術師、とだけ言っておこうか」

言いたい事を言い切ったのかアレイスターは帰ろうと立ち上がりドアへ向かった。しかし、木場と小猫が扉の前に立ちふさがる。リアス達にしてみれば当然納得いかなかったのだ。

一方、邪魔をされているアレイスターは少々不満げだ。

「残念だけはいそうですかと帰す訳にはいかないわ。ここは私の領地ですもの。不穏分子を放つて置くはずがないでしょ？ さあ、怪我したくなかったら素直に白状しなさい！」

「ふふ、ははは！余が怪我か！いいだろう、出来る事ならやってみるがいい！」

「っ！祐斗！」

「はい！申し訳ありませんが少し眠ってもらいます！」

売り言葉に買い言葉でリアスが木場にアレイスターを止める様に命令を出した。木場は自身の神器、魔剣創造で創った剣を片手にアレイスターへと突貫するが、対するアレイスターは薄く笑みを浮かべ動く様子はない。

「とつた！」

「なるほど、魔剣創造か。珍しい物を持っている。だが……まだまだ練度が足らんな」

「そ、そんな馬鹿な！」

木場の振るった剣はアレイスターの人差し指一本に止められてしまう。木場は目の前の光景に驚き足を止めてしまった。目の前の男からは多少不思議な雰囲気を感じられる。だが悪魔である自分の剣を止められるとは思っても見なかったのだ。

「実戦で止まるのは感心せぬぞ」

「ぐわあああ！」

「祐斗！」

自分より強い相手を前に足を止めるのは愚の骨頂。アレイスターが木場の剣にでこぴんを一回、それだけで剣は粉末化し生じた衝撃波によって木場は吹き飛ばされた。

木場はなす術もなく壁に叩きつけられてそのまま意識を失う。まさか自慢の騎士がでこぴんでやられるとは思わなかったリアスはその光景に絶句した。

「まだやるか？」

「わ、私はグレモリー家次期当主として……」

気丈にもそう言い放つがリアスの声は震えている。目の前で一瞬にして木場が倒されてしまったのはリアスにとって予想外の事であった。相手は一人、容易く捉えられないはず、その考えが甘かった。アレイスターの力を見誤ったのがリアスの最大のミスだ。いや、そもそもアレイスターに挑む事自体が誤りであったのだ。

「心意気は認めるが勇猛と無謀は別物だ。それに余は別に貴公らと敵対するつもりは無い。その証拠に兵藤一誠を助けてやっただろう？」

「ッ！」

アレイスターの言葉にリアスは狼狽える。ここ最近、自分の領地への墮天使の無断侵入など問題が起きていた。此処ら一带を任されているという責任もあり、リアスはそうやすやすとアレイスターの事を信用するわけにはいかなかったのだ。それは責任者としては当然の行動だろう。

だがアレイスターの言葉通り、アレイスターが居なければイツセーは死んでいたのも事実。リアスは何が最善手なのかを頭の中で必死に考える。

「先輩……」

「……………はあ。イツセー、そんな目で見ないで頂戴。私が悪かったわ」

結局はイツセーの不安そうな目にリアスが折れた。子犬の様な目つきでジツと見つめられるのは中々にくるものがある。こういう甘さがリアス・グレモリーの短所でもあり長所でもあるのだろう。

「取り敢えずはアレイ、貴方の言葉を信じる。私もすこし神経質になり過ぎてたようだよ。でもいつかは貴方の事を教えてもらおうよ」

「ああ、そう遠くない内に分かるだろう。それまで楽しみにしておくことだ。それでは余は失礼する」

「あ、あの！クロウ先輩！俺の事助けてくれてありがとうございました！」

「礼はいらんさ。時代は既に動き始めた。これから兵藤一誠、貴公の歩む道は険しくなるぞ。日々挫けぬ様に精進する事だ」

一旦振り返りそれだけ言うたアレイスターは出口へと向かう。今度はアレイスターの行く手を阻む者は誰も居なかった。

第15話

自身が悪魔に転生したという衝撃の事実が発覚してから数日、イツセーは毎晩自転車に乗り市内を爆走していた。手に持つ携帯機器に表示された家のポストへとチラシを投函してはまた次の家へと向かう。悪魔のお仕事、と言えば聞こえは良いかもしれないがやっている事はただのチラシ配りだ。

チラシ配りが悪魔の仕事？と思うかもしれないが、イツセーはまだ悪魔に成り立ての新人である。いふなればこのチラシ配りは新人研修であつた。勿論これが終われば悪魔の本来の仕事である契約取りが待っているのだ。

あの日、リアスはイツセーに言つた。悪魔として功績を上げ爵位を貰えばハーレムも夢ではないと。それを聞いたイツセーのテンションの上がり方は尋常では無かつた。それからのイツセーはまさにチラシ配りの鬼。今までリアス達の使い魔が一週間に配っていた量のチラシを一晩で配り切つて見せたのだ。

一方、アレイスターといえればあれからオカルト研究部に入り浸つていた。朱乃が入れたお茶を飲みながら小猫を撫で回し雑談をして飽きたら帰るといふ気ままな生活。

リアスもアレイスターに対しては強気に出る事が出来なかった。それでもなんとか頼み込み、オカルト研究部に籍を置く事だけは容認させたのだった。

そんなこんなで研修も終わり、今日はイツセーの契約取り初日だ。

「さあ、イツセー。魔法陣の準備が出来たわ。中央に立ちなさい」

「は、はい！」

「イツセーに予想外のチラシ配りの才能があつたから思ったより早く契約取りをさせてあげられるわ。今日イツセーに向かってもらうのは小猫に入った二件の予約の内の一つよ。そう難しい内容では無いはずだから気楽に行つてきてちょうだい」

「分かりました」

「この魔法陣は貴方を依頼人の下へ転移させ、依頼が終わればこの部屋に戻してくれるわ。到着後はマニュアルを見て頑張りなさい。さ、もうすぐ転移が始まるわよ」

「おぉー」

魔法陣の準備をしていた朱乃とリアスが離れると、魔法陣が青く輝き始める。こういった類の物を見ると実際に悪魔になったのだなという実感が沸き起こってきた。

魔法陣がより一層輝く。イツセーは思わず目をつむった。次に目を開いたら依頼人の目の前にいるのだろう。明るい未来の為の第一歩だ。しつかりと契約をとってみせる！そう意気込んでイツセーは

絶句するイツセー。魔方陣が利用出来ない、つまりイツセーは自らの足で依頼人の下へと向かわなくてはならないのだ。今までこんな悪魔がいただろうか？

「……無様」

「ああ、無様だな」

「あふん！やめて！小猫ちゃんもアレイ先輩もそんなゴミを見る目で見ないで！」

二人分の強烈なジト目がイツセーに突き刺さる。しかし、いくらイツセーが嘆いた所でどうしようもない。無い物は無いのだ。

「イツセー！依頼人を待たせるわけにはいかないわ。しょうがないから今から自転車で現場に向かいなさい！」

「う、うわああああん！がんばりますうううう！」

イツセーは涙を流しながら、チラシ配りの時同様、自転車に跨る。こうして、イツセーの契約取りは初日から難航する事となるのだった。

◇

「……………」

「あ、あの……」

部長？」

イツセーは産まれたての子鹿の様にプルプルと震えている。イツセーの眼前には明らかに怒っているリアスが立っていた。

あれから数日、イツセーは二回契約取りを行った。しかし、結果は二回とも破談だったのだ。

「二回目は漫画のバトルごっこ、二回目は魔法少女のアニメを一緒に観てたですって？」

「あはは、前代未聞だよ」

「うう、反省してます。すみません」

流石の木場もこれには苦笑するしかない。本来、依頼人と契約を結ばなかった場合すぐさま帰還する、というのが普通のことなのだ。

「……契約後、依頼人にはアンケートを書いてもらうことになっているの。『悪魔との契約はいかがでしたか?』って」

リアスが二枚のアンケート用紙を取り出してイツセーに文面を見せつける。

「二つ目は『楽しかったです。こんなに楽しかったのは初めてです。イツセー君とはまた会いたいです。次はいい契約をしたいと思います』 二つ目は『楽しかったによ。またミルたんは悪魔君と魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブをみたいによ。次はミルキーシリーズ一気見をしたいによ』」

「森沢さん…… ミルたん……」

イツセーは契約は結べなかった。しかし、依頼人は満足している。流石のリアスもこうなるとは予想する事が出来なかった。

「はあ、こんなアンケート初めてでどうしたら良いか分からないわ」

「まあ、そう怒るな、リアス・グレモリー。初心者なのだ。まだまだこれからだろう」

「アレイ先輩……」

ここで、リアスに怒られる十二人のアンケートにより泣きそうになっていたイツセーにアレイスターが助け舟を差し出した。

「しかし、7オルタナティブか…… このミルたんという者はなかなか分かっているではないか。だが余からすれば無印の4が一番だがな」

「ん？んん？?!」

あれ？おかしいぞ？今、目の前の人物から放たれるはずのない言葉が聞こえたような…… イツセーは思わず己の耳を疑う。

「そもそもとして魔法少女ミルキーは無印が本編でありオルタナティブが番外編である。本編が王道的な魔法少女であるのに対し、番外編であるオルタナティブはいまいち盛り上がり欠けるといふ点がある。いや、決して余もオルタナティブを貶している訳ではないぞ。本編とは異なり、明確な敵が出てこなくダラダラとした日常物である分、安心して見れるというのは大きなポイントだ。脇役やライバルの活躍が多いというの

もオルタナティブの人気の一つであろう。さて、少々話はそれたが次に何故余が無印ミルキー4を押すかという事を話そうと思う。無印ミルキー4の最大の目玉と言えやはりミルキーのライバルであるダークミルキーの初登場作品であるということだろう。1〜3まで順風満帆であったミルキーがダークミルキーと出会うことにより初めて挫折を味わう事になる。ミルキーとダークミルキーが『ストップ！ストップです！先輩！』む、まだ十分の一も話していないぞ」

「聞き間違いじゃなかった！いきなり何を言い出すんですか！」

まさかアレイスターが魔法少女を語り出すとは思わなかったため、イツセーは呆然とするが我に返ると慌ててアレイスターを止めた。恐らく、アレイスターのあの様子では止めなければ永遠と魔法少女トークが続いていただろう。オカルト研究部の面々も信じられないような物を観たかのような顔をしている。

「何だ？余がこのような物に造詣が深いのがそんなにも奇妙か？」

アレイスターの言葉に朱乃以外の皆が激しくブンブンと首を縦にふる。アレイスターと魔法少女、普通だったらどう考えても結びつかない両者だ。

「余ほど永く生きていればな、こういったサブカルチャーにも手を出すほど暇を持て余してしまうのだよ。まあ、魔法少女については友の影響であるがな」

「はあ」

イツセーは分かったような分からないような生返事を返す。イツセー達はアレイスターについて知っている事は殆どない。それゆえ初めて分かった事が浮世離れたアレイスターの趣味が魔法少女だったのというのがあまりに衝撃的だったのだ。

「さて、兵藤一誠。いつまでもそうしている時間は無いのではないか？」

「うわっ！本当だ！もう行かなきゃ次の契約に間に合わねえ！それじゃあ部長！行つてきます！」

「イツセー！今度はしつかりと契約を結んで対価をもらつてくるのよ！それが悪魔としての基本なのだからね！」

はい！と元気の良い返事をしてイツセーはオカルト研究部の部室から飛び出して行った。新たな依頼人の元へと向かうのだ。

「全く。面白い子ね、イツセーは」

イツセーを見送りながらリアスはそう呟いた。

その後は続々と木場、朱乃も魔方陣で契約取りへと向かう。そんな中、小猫がアレイスターの服の裾を掴み話しかけた。

「……アレイ先輩」

「何だ？搭城小猫」

「私はミルクィ6オルタナティブが好きです」

「なるほど。貴公もまたミルクィニストであったか……」

『魔法少女ミルクィ』それは冥界、人間界問わず人々を魅了して止まない超人気作品なのである。

こうして今日もまた、ミルクィの輪が広がるのだった。

◇

学校からの帰り道。既に日が暮れて暗くなった市街地を一人、アレイスターが歩いていった。

「フリード、新たな報告か？」

アレイスターがポツリと声を出した。辺りにはひと気がある様子はない。第三者から見ればただの独り言の様に聞こえるかもしれない。だが、それは誤りだ。

アレイスターの声に呼応する様に一陣の風が吹く。すると何時の間にか一人の男がアレイスターの眼前に跪いていた。

「いえ、別に緊急事態って訳じゃ無いんですけどね。墮天使達が本格的に動き出す様でどうします？目障りなら今すぐサクツと始末しちゃいますか」

「ふむ……」

アレイスターは顎に手を当て暫し考え込む。そして数分後、考えが纏まったのか口を開いた。

「そうだな、その墮天使どもにはリアス・グレモリー達の当て馬になって貰おうか。フリード、お前はその者達の所へ潜り込んでおけ」

「なるほど、ボスも悪いお人っすね。それで？俺たちも赤龍帝の子にちよつかい出してもっ。」

「構わん、だが殺さぬ様にな」

「さっすがボスう！あつ、これは全然関係ない話なんですけどね。その墮天使達の所に一人、神器持ちの子がいるんすよ。その子がまた不憫な子でして。理不尽に教会の糞共に異端審問されて教会から追い出されたつてのに健気に神を信じてがんばってるんすよ」

「ふむ」

「俺つち的にはもう見てるだけで涙がちよぎれそうになるからどうかしてあげたんですけど……」

「まあそれについては好きにするが良い。自らが最善であると思う行動をしろ」

「了解っす！」

やはり自分の主は最上だ。フリードはアレイスターへの忠誠を再確認して元氣良く返事をする。正直、フリードのそれはもう盲信の域まで達しているのだがフリードの人生を垣間見ればそれもしようがない事なのだろう。

盲信的な部下というのは得てして、ある種の扱いずらさというものがある物だ。しかし、アレイスターには既にエセルドレーダがいた。エセルドレーダはアレイスターに対しては盲信を通り越して狂信の域である。アレイスターの為ならば即座に地球をぶっ壊すレベルだ。なので、アレイスターにしてみれば一人増えようが今更な話なのであった。

第16話

「二度と教会に近づいちゃ駄目よ」

イツセーが金髪美少女シスターと知り合ったその日の夜。リアスは真剣な顔をしながら、強くイツセーに念を押していた。

「私たち悪魔にとって教会は敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。いつ光の槍が飛んできてもおかしくなかったのよ？」

「そ、そんなにですか！」

イツセーはリアスの言葉に身体を震わせる。確かに教会に近づいた時、悪寒が走るのを感じた。やはりそのまま入らなくて正解だったのだ。あの光の槍を食らうなんて二度とゴメンである。絶対に教会には近づかないようにしよう。イツセーは固くそう心に誓うのだった。

「教会の関係者にも近づいては駄目よ。特に『悪魔祓い』は我々の仇敵。もし神の祝福を受けた悪魔祓いに滅ぼされたら完全に消滅する。———無。完全なる無よそれがどういう事か分かる？」

「無……ですか」

イツセーはかつて墮天使に光の槍で刺された時に感じた感覚を思い出す。単純に死ぬのとは違う。耐え難い激痛と共に自分という存在が消えてゆくのを感じた。今思いついてもゾツとする。あれが無になるということなのだろう。

「ちよつと怖がらせ過ぎたかしら？とにかく、そういう訳だから今度からは気をつけてね？」

「あらあら。お説教はすみましたか？」

「おわっ！」

突如、背後から話しかけられたイツセーは驚き変な声がでる。

「あら？朱乃。どうかしたの？」

「討伐の依頼が大公から届きました」

◇

——はぐれ悪魔。主を殺し逃げ出した者。自らの力を使い暴れまわる者。それ等を総称してはぐれ悪魔と呼ぶのだ。

基本的にはぐれ悪魔は害となる。従って見つけ次第、元主か他の悪魔が消滅させる

事となっているのだ。それが悪魔のルールである。それは他の勢力でも同じ事で、天使、墮天使達もはぐれ悪魔を見つけ次第殺すようにしている。

また、はぐれ悪魔には懸賞金がかけられる事が多い。実はブラックロツジの主な収入源ははぐれ悪魔討伐なのである。はぐれ最強のアレイスターの組織がそんな事をするのは可笑しく思うかもしれないが、これがなかなかどうして良い金額になるのだ。

今回、リアス達の元へと届いた依頼もそういった類の物であった。

「……………血の臭い」

小猫がそう呟き、制服の袖で鼻を覆う。

時間は既に深夜。周囲には背の高い木が生い茂り、遠目には廃屋となっている建物が見える。そこをリアス達一行は歩いていった。

「イツセー、良い機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

「ええー！お、俺なんか戦力にならないですよー！」

「まあ、それはそうだろう」

「ええ、そうね。ってアレイ?! 貴方なんでここにいるのよ!」

リアスが驚き声を上げる。何時の間にかアレイスターが一行の中にしれつと混じっていたのだ。

「何だ? 余もオカルト研究部に籍を置くのだ。ここにいても何らおかしな事はないだろ

う。それともあれか？余だけ仲間外れにしようというのか？ああ、何という悲劇！余は悲しいぞ」

「ああもう！分かったわよ！もう何も言わないから変な事だけはしないで頂戴！」

「そう怒るな、リアス・グレモリー。短気は損気というだろう？」

リアスもアレイスターにかかれば何時もの調子を崩されてしまう。思わず頭痛を感じずにはいられないリアスであった。

「さて、そうこうしているうちに獲物が向こうからやってきた様だ」

アレイスターがそういつた瞬間、全員が身構えた。初心者のイツセーでも分かるくらしいの濃い殺気や敵意が徐々に近づいて来ていたのだ。イツセーはゴクリと唾を飲む。悪魔としての始めての戦い。心強い仲間はあるもの、やはり緊張するなというのは無理がある。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

ケタケタと笑い声を上げながら現れたのは異形の存在。上半身は裸の女性、下半身は巨大な獣。両手には一本ずつ槍を構えている。何種類もの動物を掛け合わせたキメラなのだろうか？その醜悪な姿はイツセーが今まで想像していた悪魔通りの姿であった。

「はぐれ悪魔バイサー！大公の命により貴方を消滅しに来たわ！」

「小賢しい小娘ごときが！その紅の髪のように、お前の身体を鮮血でそめあげてくれるわ！」

「雑魚ほど良く吠えるのものね！祐斗！」

「はっ！」

リアスの声に従い、今まで側に控えていた木場が物凄いスピードで飛び出した。今のイツセーではその姿を捉えるのもやっとだ。

「さて、それじゃあイツセー。今から駒の特性について説明するわ。悪魔の駒とその役割は前に説明したから覚えてるわよね？」

「は、はい」

悪魔の駒。それはかつての大戦で多くの純血悪魔を失った為に考案された道具である。これを用いて他の種族を悪魔へと転生され下僕とするのだ。

純血悪魔は出生率が低い。悪魔の駒は悪魔の数を増やす為の苦肉の策であった。そうして大戦後は悪魔の数を増やしてきたのだ。

「よろしい。悪魔の駒には実際のチェスの様に特性があるわ。祐斗の役割は『騎士』、特性はスピード。見なさい」

イツセーはリアスに促されるまま木場の方を見る。木場のスピードはどんどん上

がってそろそろイツセーの目には捉えられなくなりそうだ。

「す、すげえ……」

「ふふ、驚いたかしら？でも祐斗の真骨頂はまだまだこれからよ」

イツセーは木場のスピードに思わず感嘆の声を漏らす。バイサーは必死に腕を振るっているがその攻撃は木場に擦りもしない。

すると次の瞬間、木場が一瞬止まった。手には幅広の西洋剣が握られている。それを鞘から抜き放ち、再び木場はバイサーへと切りかかった。

「はあああああ!!! 『つまらん』へ?」

木場の振るう白刃がバイサーを捉えたと誰もが思った瞬間、バイサーが爆ぜた。文字通り身体の内側からパンツ!という音を立て破裂したのだ。当然バイサーは即死。皆、突然の出来事に理解力が追いついていないのか呆然としている。

「おっと、すまない。もう少し楽しめるものかと思っていたのだが…… 予想以上の小物だったのだな。つい手を出してしまった」

「……………一体何をしたのかしら?」

リアスは顔をしかめながら問う。

相手が急に爆発する、というのはリアスにも心当たりがある。だが、内側から爆発するなど聞いた事もなかった。

バイサーの身体はいたる所に飛び散っている。見るも無残な光景だ。イツセーなどは気分を悪くして吐きそうになっている。

「単純なことだよ。相手の全身の血を魔力で操作。後はそのまま内側からボンツ！だ」
「ツ！そんな簡単に……」

まさか。リアスは思わずそう言いそうになるのを我慢する。

そもそもとして魔力のある生物の血というのはその生物自身の潤沢な魔力が含まれている。それに干渉して操作するなど一体どれだけの高等技術が必要とするのだろうか。それはリアスの兄であり、テクニクタイプのサーゼクスでさえ不可能な芸当であらう。

それを目の前の男は何の気なしにやってのけたのだ。その事実にはリアスは戦慄する。

「変な事はしないで言って言ったわよね？どうしてくれるの。これからバイサーを使ってイツセーに悪魔の駒について説明しようとしてたのに」

「何と。それはすまない事をした」

全く悪びれた様子の無いアレイスターにリアスは再び頭が痛くなるのを感じた。

「はあ。こうなった以上はしょうがないわ。イツセー、帰ったら座学でのお勉強よ。文句はアレイに言いなさい」

えーっ！つとイツセーが嫌そうに声を上げた。かと言ってイツセーがアレイスターに文句など言えるはずもない。

こうして、イツセーの悪魔としての初めての実践はグダグダのまま終わりを告げたのであった。

◇

「はあ……出世の道は遠いなあ」

結局あの後、イツセーは部屋に戻ってから悪魔の駒についての説明を受けた。そこで、自分の駒は『兵士』だと言うことを告げられたのだ。

兵士はチェスの中では一番の下っ端。将棋でいう歩だ。出世の道はそう甘くはないということなのだろう。

「いつまでもウジウジしても仕方ないか。一歩ずつ進むしか無いもんな。よし！先ずは契約取りだ。今日こそは契約を結んで見せるぞ！」

イツセーは自分に気合を入れ直し、依頼人の家のインターホンを押そうとした。そこで、ふとある事に気づく。玄関扉が開いているのだ。こんな深夜に扉が開いているというのは不自然極まりない。嫌な予感を感じたイツセーは恐る恐る空いた扉から家へ

と侵入した。

「うっ！」

リビングへと入ったイツセーの目に飛び込んできたのは貼り付けとなった男性の死体。この人物が依頼人だったのだろうか？血は滴り落ちて血溜まりとなっていて、太い釘により壁に貼り付けられている。この前、バイサーの惨状を見ていなかったら恐らくイツセーは吐いていただろう。

「なんだ…… なんだよこれ！」

『悪魔に与する者には等しく死を』ってね」

突然聞こえていた声の方を振り返ってみれば、そこにはゴスロリを着た一人の……
「墮天使!? どうしてもここに!？」

「どうしてもこうしてもないっつーの! 偶々通りかかったら悪魔を呼ぼうとしてる人間を見つけたから殺しただけだし。まあでもラツキーだったかな? こんな所でレイナーレ様が殺し損ねた雑魚を見つけたんだからさあ！」

「ッ！」

目の前のゴスロリ墮天使が光の槍を作り出す。やはり何度見てもなれる事は無いのか、またイツセーは悪寒を感じた。

「お、お前がこの人を殺したのか!？」

「はあ? あんた馬鹿? さつきからそう言ってるじゃん。あ、もしかしてそんな事も理解出来ない程の低脳ゴミ屑野郎なんですか? ギャハハ! まあでも関係ないよね。あんたはここで死ぬんだからさあ!」

そういうや否や墮天使は槍を振りかぶりイツセーへと突撃してきた。

最近はこんな事ばかりだと内心悪態をつきながらも必死にどう対処しようか考えていた時、

「やめてください!」

「んっんー、こいつは面白い事になってるじゃないの」

「あ、アーシア! ……と誰だ?」

イツセーが聞き覚えのある声をする方へと視線を移してみればそこには見覚えのある金髪シスター、アーシアと一人の白髪の神父の姿があった。

第17話

「あん？アーシアとフリードじゃん。なにやってんの？外で見張つとけつて言つたっしょ」

墮天使が眉を釣り上げながらそう言つた。

「そんな…… ミツテルトさん、どうして…… !? い、いやあああああ！」

「あーあー、こんなにしちやつて。こいつは純真なアーシアちゃんにはインパクトが強すぎるっしょ」

室内を見回したアーシアの目に貼り付けにされた遺体が飛び込んできた。当然、そういつたことにあまり耐性のないアーシアは大きな悲鳴を上げる。するとすかさずフリードが一体何処から取り出したのだろうか、大きなブルーシートを広げ遺体に覆いかぶせた。

「あ？何やつてんだよフリード」

「うるせえぞ、誰に向かつて命令してんだ？俺に命令していいのは二人だけなんだよ。殺すぞ。」

「ひっ！」「ッ！」

突如、フリードから強烈な殺気が放たれる。フリードは先ほどまで飄々としていた人物だとは思えないほど別人のように様変わりしていた。

自分に対して放たれた殺気でも無いにも関わらず、イツセーはその瞬間自分の死を感じ取った。もろに受けた墮天使、ミッテルトは溜まったものでは無いだろう。現に顔を蒼くさせ歯をカチカチと鳴らしている。

「さて、そんじゃあそろそろお仕事でもしますかねえ」

「なっ！」

ミッテルトからフツと視線を外したフリードは何処からともなく光の剣を取り出しイツセーと相對する。何時の間にか雰囲気は元に戻っていた。

「隙あり！ちえりやあ！」

「があっ！」

変な掛け声と共にフリードが一誠へと斬りかかる。その斬撃は劍術という点で見ればあまりに適当でお粗末な一撃であった。しかし、アーシアに注意を向けていたイツセーはワントンポ反応に遅れてしまう。

せめて致命傷だけは避けねばならないと思ひ必死にイツセーは身体を捻る。その

結果、咄嗟の判断が功を奏したのか、フリードの剣はイツセーの腹部を薄く切るだけに留まった。

「ハアハア、た、助かつ……グアアアア！」

薄く切られただけ、そう思っていたイツセーを強烈な痛みが襲う。何事かと傷口を見てみればジュウジュウと音を立てて身体をとかしていた。

「あれあれ？もしかして助かったと思っちゃった感じ？残念でした。この光の剣はエクソシストの標準装備、そして悪魔くんには効果抜群の必殺武器なのさ」

「そんな……イツセーさんが悪魔？」

ビュンビュンと光の剣を振り回しながらフリードは愉快そうにそう述べた。アーシアはフリードのその言葉に目を大きくして驚く。信じたくはないが現に光の剣のダメージを受けているその姿はイツセーが悪魔であるということアーシアに伝えていた。

「ほんじゃあとどめと行こうかねえ」

「待つてくださいい！」

激痛に身をよじらせているイツセーにとどめをさそうとフリードが歩み寄る。しかしアーシアが手を大きく広げ、その行く手を阻んだ。

「ん、どうしちゃったのかな？アーシアちゃん。もしかして悪魔くんを庇っちゃやう系

なの？」

「イツセーさんは良いお方です！どうか見逃してあげてください！」

「うーん、アーシアちゃんの言う事はなるべく聞いてあげたいんだけど……こいつばっかしはそうもいかないんだよね」

「悪魔にだって良い人はいます！」

「悪魔にだって良い人はいる……か。なるほど、その通り。そいつは真理だ。この世には良い悪魔だっているし、糞みたいな神父だっている。けどな、アーシアちゃん。仮にこの悪魔くんが良い人だったとしても、はいそうですかと簡単に見逃す訳にはいかないんだよ」

「っ！そんな！」

「ふう、一つ話をしようか。昔あるところに一人の悪魔がおりました。その悪魔はまだ力も弱い下級悪魔でした。そこにある日、一人の神父が訪れます。その悪魔を見つけた神父は当然悪魔を滅しようと思いました。完璧に滅せられようとした時、その悪魔が必死に神父に命乞いをしたのです。神父はここで一つのミスを犯してしまいます。悪魔に情けを掛けて見逃してしまったのです。さて、この悪魔はその後どうなったのでしょうか」

「……神父さまに感謝して改心したのではないのですか？」

「ぶっぶー！外れー。正解は人々の害となる残虐非道の悪魔になったでしたー！ちなみに、この悪魔が結局討伐されたがエクソシストにもかなり大きな被害が出たらしいよ。今の話は昔からエクソシスト達に伝わる有名な話さ。もう分かっただろう？今は善良でもこの後どうなるか分からない。だから悪魔は見つけ次第殺す。それが俺たちエクソシストの仕事なのさ」

「それでも！それでも私は！」

「分かってるさ、アーシアちゃんならそう言うつてな。だから今は……」
「うっ！」

「少しばかり眠っててくれ」

フリードは手刀を一発、ストーンとアーシアの首にあて崩れ落ちたアーシアを優しく抱きかかえた。

「さて、それじゃあ今度こそ……」

「やらせないよ」

フリードが再びイツセーの方へ振り向いた瞬間、部屋を中心に魔法陣が出現し複数の人影が躍り出た。

「おっつと！ここにきて悪魔の団体様御一行の到着か〜！」

「悪いね、彼は僕らの仲間でさ。こんな所でやらせる訳にはいかないよ」

「あん？悪魔の癖にそういう事気にしちゃう系なの？あ！もしかしてあれか？モーホーか！悪魔のモーホーとかマジないわー」

「下品な口だ。はぐれエクソシストをやってるのも納得だよ」

「あらあら、困った神父さんですわ……プツ」

木場はフリードの口の悪さに顔を歪ませる。他の眷属の面々も同様だ。ただ一人朱乃だけは意外とノリノリで普段あれだけ嫌っている神父のふりをしているフリードを見て吹き出しそうになっていた。

「イツセー、ゴメンなさいね。まさかこんな事になるとは思わなくて……でも安心しなさい。もう大丈夫よ」

「は、はい。うっ、痛たた……」

「っ！イツセー！貴方怪我してるじゃない！」

「あ、すいません……そ、その……切られちゃって……」

イツセーは苦笑いで誤魔化そうとしたがリアスは憤怒の表情をフリードに向けた。リアスからは怒りのあまり紅い魔力が漏れている。

「ずいぶんと私の可愛い下僕をかわいがってくれたみたいね？」

「おいおい、そんなのはただの挨拶じゃないの。本番はこれからっしょ。なんたつて獲物がこれだけ増えたからね。俺っちがまとめてフルボッコにしてやんよ！」

シュツシュツと声を出しながらその場でフリードはシャドーボクシングの様な動きをする。相手を完全にバカにした態度にリアスの我慢もそろそろ限界の様だ。

「もういいわ！ここで貴方を滅ぼしてあげる！」

「っ！待ってください部長！ここに複数の墮天使が向かって来ています。負けるつもりはありませんがこの場で戦うのは賢明ではありません」

リアスが傲慢の滅びの魔力を発射しようとした瞬間、朱乃が慌ててそれを止める。
「……………イツセーを回収しだい帰還するわ。準備を」

「はい」

リアスはフリードを一睨みした後悔しそうにしながら帰還命令を出す。一方のフリードはヘラヘラと笑いながらもこちらへと攻撃を仕掛けてくる素振りはなかった。

「待ってください部長！あの子も一緒に！」

「無理よ。この魔法陣は私の眷属しかジャンプ出来ないわ」

「そんな…………」

「あら？もう帰っちゃうの？バイビー！」

イツセーとしてもこのままアジアをおいて行くのは心残りではあったが、先ほどのフリードの様子からそこまで酷い事はされないだろうと思いついて後髪を引かれる思いで部屋へと帰還したのだった。



「レイナー様、もうすぐでミッテルト達の所へと到着します」

「全く、あの子達にも困ったものね。ただでさえドーナシークがアンノウンに殺されているというのに。特にアーシアはこれの完成には不可欠な存在。逃がすわけにはいかないわ。そう、私が至高の墮天使になるためにはね……」

レイナーレはそう言っただけで愛おしそうに手に持つ本を撫でる。その禍々しい本の表紙にはこう書かれていた。

『金枝篇 血液言語版』

第18話

「言いたい事は色々あるかもしれないけれど先ずはイツセーの治療から始めるわよ」

部室へと帰還してきたリアス一行。最近は怪我してばかりだと思いつつセーは治療を受けるのだった。

「部長、助けにきてくれてありがとうございます」

「私の大切な眷属だもの。当然の事だわ。それに謝らなければいけないのはこちらの方よ。ごめんなさいイツセー。まさか依頼人の元に墮天使達がいるとは思わなかったの」

「ッ！そうだ！あの神父！部長、なんで墮天使と神父が一緒に行動してたんですか！」

「あれは恐らくはぐれ悪魔払いよ」

「はぐれ悪魔払い？」

「はぐれ悪魔と似たようなものさ。教会で異端とされた悪魔払い。それがはぐれ悪魔払いだよ」

イツセーの疑問に木場が横から答える。どの組織にもそういう者はいるのだ。人間社会でもそれは変わりない。

「さて、それじゃあこれからの予定を伝えるわ」

そしてリアスの口から伝えられたのは、領土内に侵入した墮天使の討伐であった。

「領土への侵入のみならず、数名の民間人の殺害。流石にこれ以上黙っているというのは無理な話だわ。『神の子を見張るもの』にも文句は言えないはずよ。既に敵の本拠地は掴んでる。イツセーの怪我が治り次第殴り込みに行くわよ！」

「な、殴り込みですか！」

「安心しなさいイツセー。今度は一人ではないわ。それに敵の主戦力は墮天使数名にあのぐれ悪魔払い一人。十分私たちでも勝算のある相手よ」

「はい……」

リアスの鼓舞する言葉にもイツセーはいまいち自信を持つ事ができない。イツセーの不安の種はフリードであった。先ほど感じたフリードの殺気。あれはリアス達が束になっても敵わない、別次元の存在の様に思えたのだ。そして僅かにだが自分の知る超常の存在、アレイ・クロウに似た雰囲気も感じ取っていた。

「あの……アレイ先輩は一緒に来ないんでしょうか？」

「それは出来ないわ。イツセー、貴方は私の眷属よ。けど、アレイは違う。これは私の領土内での不祥事なの。だから私たち自身で解決しなくては意味がないのよ。バイサーの時は勝手に着いてきてしまったけれど私はもうアレイを関わらせるつもりはないわ。勿論、アレイは大切なオカルト研究部の仲間だとは思っているわよ。関わらせないのは

私達で対処しなくてはならない時だけ。わかってちょうだい」

頼みの綱のアレイが参加しないと聞きイッセーの不安はさらに増してしまう。その様子を見たリアスは更に言葉を続ける。

「イッセー、貴方はあのシスターを助けたいんでしょう？」

「っ!？」

今の言葉にイッセーが反応した。我ながらずるい言い方である。とリアスは自嘲する。

「さっきは助けられなかったあのシスター。今度は助けられるかもしれない。できるかどうか、それは貴方次第よ」

リアスの言葉に段々とイッセーの目にやる気が灯っていく。

「俺が……俺がやれば……」

「そうよ、イッセー。貴方はどうするの？」

「やります！俺が！俺がアーシアを助けるんだ！」

「その意気よ！さあ、話している間に怪我は完治したわ！早速だけど今から殴り込みに行くわよ！」

イッセーがついに覚悟を決める。あの心優しきシスターを、自らの手で救うのだと。

時間は未だ深夜、人一人歩いていない町をリアス達一行は墮天使の本拠地である教会へと向かうのであった。

◇

「あらあら、あちらも準備万端のようですわ」

既に教会が目視できる距離まで近づいてきたリアス達。朱乃の言葉通り、武装した神父集団と二人の墮天使が教会の前に陣取っていた。

「ここは集団戦に向いている私と朱乃に任せなさい。イツセー、祐斗、小猫の三人は裏手から教会内に侵入するのよ」

「はいー!」

「あそこに墮天使が二人いるということは教会内にはあの神父とリーダーの墮天使のみのはずよ。祐斗、小猫。イツセーを守ってあげてちょうだい。イツセー、兵士の特性は覚えているわね? プロモーションの許可を出すわ。全力でやりなさい」

「今から私が大きめの攻撃をします。その隙に走って下さい。それじゃあ行きますわー!」

朱乃が手に集中させていた魔力を解き放つ。極大の雷が敵の集団を襲った。今の

でおよそ3分の一は倒しただろう。その隙にイツセー達三人が走り出す。

「さて、朱乃。敵は人数が多いだけの烏合の衆。さつさと片付けてみんなの後を追うわよ」

「もちろんですわ」

全身に魔力をたぎらせ、二人は敵中に飛び込むのだった。

◇

一方、教会へと侵入する事に成功したイツセー達はフリードと相對していた。

「おっとー！さつき会ったばっかなのにもう来たのか！それ程までに俺つちに切られたかったのかい？」

「バカな事いうんじゃねえ！俺たちはお前たちを倒すために来たんだ！」

「俺つちを倒す？ブハハ！そいつは冗談きついわ。チミ達が俺つちを倒すなんてそれなんて無理ゲー？」

「あいにくだが君に構ってる時間はあまりないんだ。さつさと決めさせてもらおうよ」

木場が持ち前のスピードを活かしフリードへと突撃する。

「んっんー、スピードは中々のもんだ」

「なっ!」

木場が驚嘆の声を上げた。フリードは木場のスピードに対応し剣を容易く受け止めたのだ。

「君はどれだけ人をバカにすれば気が済むんだ」

「うん? なんのこつちや?」

木場が憎々しげに見つめるフリードの手には一本の焼き鳥の串が握られていた。

「ハアアアア?! な、なんだよそれ!」

「ハアアアア?! 悪魔君達は知らないんですか? こいつは『妖刀焼き鳥ブレード つくね』なんですけど?」

「妖刀焼き鳥ブレード つくね!」

何をバカな事を! と内心イツセーは叫ぶが現に木場の剣を受け止めたのだ。まさか本当に妖刀なのではないかと思いかけ……

「落ち着いて下さい二人とも。あれは本当にただの焼き鳥の串です。恐らく気で強化しているでしょう。ちなみにあの串は駅前焼き鳥屋の串です」

小猫によって現実に戻された。

「ハッ! お、驚かせやがって……」

「君がそれで戦うというのなら僕はそれで構わないよ。ただ、いつまでその余裕が続く

のかな？」

気を取り直して木場が再度突貫する。

「ふっ！ほっ！せいっ！ちえりやあ！」

「グウツ！」

自身の全力を持ってフリードへと切りかかる。しかし、その刃がフリードを捉える事はなかった。炎の、氷の、雷の、光の、闇の、様々な魔剣を使い、時には二刀で切りかかるうとも全て焼き鳥の串に防がれる。

その様子を見てイツセーは嫌な予感が当たったと考えていた。やはりフリードの実力は別格なのだ。しかし、フリードを突破しない限りアジアを助ける事が出来ないのもまた事実。

「小猫ちゃん！」

自信を戦車へとプロモーションさせて小猫とタイミングを合わせフリードへと殴りかかる。戦車二人分の打撃だ。これでダメージを受けないやつはそう居ない。だがそのイツセーの甘い考えは簡単に覆された。

「パワーもまあ年齢を考えれば大したもんだ」

「おいおい、嘘だろ……本当に人間かよ」

「信じられません……」

そこにはイツセーと小猫の二人の拳を受けてなおその場から一步も動く事なく平然としているフリードの姿があった。

「お前達の個々の能力は良い線いつてるよ。同年代でも上から数えた方が早いくらいはあるんじゃないの？」

予期せぬ敵からの賞賛にイツセー達の動きが止まる。

「だけど俺たちには届かない。そんなんじやアーシアちゃんを助けるなんぞ夢のまた夢だな」

「クソっ！」

「一つ、良い事を教えてやるよ。アーシアちゃんだけどな、このままだと無事じゃすまないだろうなあ」

「どういう事だ！」

「この奥でなここのリーダーがアーシアちゃんを使つて何かやろうとしてるんだよ。何をやろうとしているかは俺たちには分からんけど無事じゃすまないだろうな」

「そんな！このままじゃアーシアが！なんで！なんで俺にはアーシアを助ける力がないんだ！」

「……おいおい、悪魔君。まだ使つてない力があるんじやねーの？」

「……使つてない力？使つてない…… うん？そうか！神器か！」

イツセーはすっかり忘れていたが自分には神器が宿っていることを思い出した。前にリアスが言っていた言葉、神器は思いに答える。ならばそれは今ではないのか。そしてイツセーは力の限り叫ぶ。

「お前が全ての始まりなんだ！お前のせいで俺は色々酷い目にあつたんだぞ！だったら少しぐらい……少しぐらい俺に力をかしやがれえええ！」

『Dragon booster!!』

光と共にイツセーの腕に紅い籠手が現れる。

「おおでた！よし！行くぜえええ！」

「ようやくか…… んじゃあかかって来なさいな！」

イツセーの身体は自分が思っていたよりも速く動きフリードへと迫る。これが神器の能力なのだろうか、一瞬その考えが頭よぎるがいや今は目の前の敵を倒すのが先決だと考えて思考を切り替えフリードへと殴りかかった。

「ん〜！良い具合になって来てるな！」

「すぐにその口を黙らせてやるよ！」

『boost』

籠手から再び音声が流れる。その瞬間、イツセーは自分の中の力が増すのを感じ

た。

「おお！良いよ！良いよ！良い感じだよ！」

「うおおおおお！」

『boost』

雄叫びをあげながらイツセーは何度も何度もフリードへと殴りかかるがその度に焼き鳥の串で防がれ、避けられ、転がされる。だがイツセーがその手を休める事はなかった。

「ハアハア」

「おっと！そろそろ悪魔君はお疲れかな？」

「……して」

「あん？」

「どうして！どうしてそれだけの力がありながらお前がアーシアを助けてやらないんだよ！お前、アーシアには優しかったじゃねーか！」

疲労が溜まり限界へと近づきつつある中、イツセーはずっと疑問だった事をフリードに聞いた。その言葉にフリードの動きも止まる。

「……まあ悪魔君のいう事も最もだな。確かに俺たちならアーシアちゃんを助けるのは簡単だ。だけどその役目は俺たちじゃないのさ」

「役目ってなんだよ！」

「役目っていうのは少し違うか……俺つちじやアーシアちゃんを本当に光の当たる場所に連れて行く事が出来ないのさ」

「何言ってるのかわかんねーよ！」

「おーう、もう限界か」

イツセーの打撃に遂に耐えられなくなったのかフリードの持つ妖刀焼き鳥ブレード つくねが真ん中から折れた。まあ焼き鳥の串にしてはよく持ったほうだろう。

「アーシアはお前を信用していた！光の当たる場所だかなんだかはしらーねけどお前のそれは全部ただの言い訳だろうがああああ！」

『Explosion!!』

「何っ！うおおお！」

イツセーの怒号と共に再び籠手から音声が流れる。その瞬間、イツセーの身体は爆発的に加速し、その拳は遂にフリードへと頬へと突き刺さった。フリードはそのまま吹き飛ばされ壁へと衝突する。

「ハアハア……ど、どうだ！やったぞ！」

「おー、痛つつ。良いの一発もらっちゃ……プベッ！」

フリードが再び動き出そうとした瞬間、何処からか座椅子が落下してフリードに命

中した。その後立て続けにいくつもの座椅子が落下して完全にフリードは下敷きになってしまった。

「こ、小猫ちゃん……」

「何か文句でも？祐斗先輩」

「い、いや何も……」

座椅子を投げた犯人、それは他でもない小猫だった。騎士として一言文句を言いたい木場ではあったが、何か落ち度でも？と言いたげな小猫の前に黙るしかないのであった。

「さて、行きましょう二人とも」

「お、おう」「う、うん」

学園のマスコットである小猫の正体は恐ろしかった……そう思いながらイツセーは先に進むのだった。

◇

イツセー達が去ってから少し後、教会内に二人分の足音が響き渡る。

「いつまでそうしてるのフリード。それともお仕置きがお望みかしら？」

「はい起きた！俺っち今起きたよ！だからその手の魔力は引つ込めてえええー！」

フリードの上に覆いかぶさっていたいくつもの座椅子が一瞬で細切れになり、下からフリードが現れる。

「全く、最初からそうすれば良いのよ」

「姐さんは容赦なさすぎて俺っちガクブルだわー」

フリードにとつてエセルドレーダとは母親の様な存在であり、どうにも頭が上がらないのであつた。

「今代の赤龍帝はどうであつた？」

「はい、ボス。実力はまだまだまだ橋にも棒にもかかりません。しかし……爆発力は大したものです。俺っちも最後に良いの一発くらっちゃいました。将来が楽しみですね」

「ほう？お前がか？」

頬を抑えながら苦笑するフリード。アレイスターは興味深そうに聞き返した。

「ええ、ああいうのがボスの言うヒーローってやつなんでしょうね。耳の痛い小言も貰っちゃいましたよ」

「そう思うなら最初からあの娘を助けてやれば良かったものを」

「後悔先に立たずって奴です。けどもうアーシアちゃんには俺っちは必要ないですよ。今度こそ本当の友達が沢山出来るんだから……」

「さて、お前がそう思っても相手がそう思ってるとは限らんがな……」
「何か言いましたかボス？」

「いや、何も…… ふむ、どうやらあちらも終わったようだ」

『吹っ飛べ！クソ天使ッ！』

アレイスターが言葉を言い終えるその時、イツセーの大声と強烈な打撃音が教会内に響き渡った。

「これでようやくプロローグが終わりを告げるか」

イツセー達が堕天使を倒したのだろう。もはやここに用事のないアレイスター達も帰路に着こうとした瞬間、教会内を巨大な魔力が支配した。

「これは……」

「マスターー！」

この感覚、アレイスターとエセルドレーダにとっては忘れる事など出来ない、前世で幾度となく感じてきたものであった。

「この感覚。中々に力のある魔導書だな」

次の瞬間には重苦しい気配は霧散した。力を感じたのは一瞬。恐らく魔導書の持ち主は既に逃げ去ったのだろう。

「失態だな、フリード」

「も、申し訳ありませんボス！今すぐ持ち主をぶっ殺して……」

「いや、今回はこれほどの魔導書が近くにありながら気づかなかつた余の落ち度もある。それよりもフリード、お前は今から魔導書の持ち主を監視しろ。殺す必要はない」「了解です」

フリードは一陣の風となりその場から消え失せた。

「まさかこの世界に機械神を召喚する事の出来るほどの力を持つ魔導書が存在していたとは……」

「イエス、マスター。たとえどんな相手であろうとマスターと私、そしてリベル・レギスの前には敵は居ません」

「勿論だともエセルドレーダ。ああ一体どのような担い手なのだろうか。今から楽しみであるな」

アレイスターは大きな笑い声をあげながらその場を立ち去るのだった。

◇

ここは神の子を見張るものの本拠地のとある一室。八枚翼の墮天使とボロボロになった一人の中級墮天使が顔を合わせて居た。

「コカビエル様！遂に、遂にこれが完成いたしました！」

ボロボロの墮天使、レイナーレが興奮しながら八枚翼の墮天使、コカビエルへと一冊の本を差し出した。

レイナーレの持つ魔導書『金枝篇 血液言語版』それは666人の血、そして一人の信心深い聖女の血を吸う事で完成となる魔導書であった。レイナーレはリアス達に止めをさされる直前、最後の力を引き絞りアシアの血液を奪取、そしてあらかじめ仕込んで置いた術式で神の子を見張るものに帰還し無事コカビエルから言い渡された任務をこなしたのだった。

「よくやった。だが貴様の役割はこれで終わりだ」

レイナーレから魔導書を受け取ったコカビエルは光の槍をレイナーレに突き刺した。

「な……何故……コカビエル様……」

「何故俺がわざわざ手間を掛けて貴様に魔導書の完成を任せたか分かるか？貴様は聖女の血を吸わせて完成だと思っていたようだがそれは違う。最後に必要な工程、それは持ち主の魂を捧げる事だ」

「そ……そんな……私は……至高の……墮天使……に……」

「安心しろ。至高の墮天使には俺がなる」

た。
コカビエルは虫の息であったレイナーレの頭をぐしゃりと踏み潰し高笑いを上げた。

「フハハハハハ！ようやくだ！ようやく奴を打倒できる力を入れた！待っているア
レイスター！

貴様はこの俺、コカビエルが殺す！」

第19話

アーシアが悪魔となった教会襲撃から数日が経ち、イツセー達は平和な日々を過ごしていた。勿論悪魔となったのだから今までの通りの生活というわけにはいかない。イツセーはリアス監督の下、毎日トレーニングに励んでいる。同様にアーシアもイツセーと共に深夜のチラシ配りの仕事をやっていた。しかしそんな平和は長くは続かない。新たな騒乱が着々と近づいているのだった。

「はあ〜」

現在、イツセー、アーシア、木場の三人は旧校舎にある部室へと向かっている。イツセーはため息をつきながら廊下を歩き、その足取りはどことなく重い。アーシアがそれを心配そうに見つめているがその視線にイツセーは気づかなかった。

「部長は一体どうしたんだろう……」

リアスはこのところどこか心ここにあらずといったようにポーツとしている事が多かった。誰が話しかけても反応が鈍く、何かしら厄介事を抱えているのはイツセーから見ても丸わかりであった。

そして遂に昨夜、イツセーの部屋にリアスが押しかけ裸で抱いてくれと迫ってきたのだ。流石のイツセーもこれには驚いた。勿論、眼福ではあったのだがいきなり抱いてくれと言われはいそうですかと頷けるほどの度量は童貞のイツセーには無い。そのままりアスに押し倒され理性が飛びそうになったその時、一人の乱入者に止められその場は収まったのだった。

昨夜の怒涛の出来事の中では混乱の極地にいたイツセーだが、一夜明ければ流石に冷静になってくる。リアスがあそこまで強行手段に出たのだ。事態はイツセーが思っていたよりも深刻なのかもしれない。以上が現在イツセーを悩ましている出来事の一連の流れだった。

「部長のお悩みか。たぶん、グレモリー家に関わる事じゃないかな？」

イツセーは移動中に木場へと尋ねる。帰ってきた答えは以上の通り。木場は詳しくは知らないようだ。眷属になってまだ数日であるイツセーは悪魔の事情などまだまだ知る由も無い。ましてやグレモリー家などと言われても分かるはずもなかった。

「朱乃さんなら知ってるよな？」

「そうだね。朱乃さんは部長の懐刀だから」

あまりリアスの事情を詮索するのは良く無いとはわかっていながらもイツセーはどうしてもその事が気になるのであった。

そんな事をしていっているうちにオカルト研究部の扉が見えてくる。

「僕が……まで来て初めて気配に気づくなんて……」

木場は目を細め、顔を強張らせる。恐らく何か感じ取ったのだろうがイツセーはそんな事はお構いなしと扉を開ける。

「全員揃ったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

部屋の中にいたのはリアス、朱乃、小猫、そして昨夜イツセーを止めた銀髪のメイド、グレイフィアの四人であった。いつもの和気あいあいとした雰囲気はなりをひそめ、張り詰めた空気が部室内を支配している。

「実はね……」

リアスが口を開いた瞬間、部屋を中心の魔法陣が光出した。もともと書かれていたグレモリーの紋様がイツセーの知らない形へと変化してゆく。

「——フェニックス」

木場の呟いた言葉と共に眩い光が部屋を覆った。次の瞬間、魔方陣から炎が巻き起こり人影が現れる。そのシルエットが腕を振りすると周囲の炎が掻き消えた。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

現れたのは赤いスーツを身に纏う一人の男。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

男は片手で髪を掻きあげ甘ったるい声でそう言い放った。

◇

「いやー、リアスの女王が淹れてくれたお茶は美味しい物だな」

「痛み入りますわ」

魔方陣から現れた男ライザー・フェニックス、純潔の上級悪魔であり古い家柄を持つフェニックス家の三男、グレイフィアからそう説明されたイツセーは驚きを隠せなかった。さらにその後、リアスの婚約者だと伝えられた時のイツセーの表情は筆舌に尽くし難いものであった。

そのライザーは現在ソファに座りリアスの髪や肩などを触り続けている。単なる下僕でしかないイツセー達は少し離れた席からそんな二人の様子を見ている事しか出来ず歯痒い思いをしていた。

「いい加減にしてちょうだい！」

そんな中、遂に堪忍袋の緒が切れたリアスの怒号が室内に響き渡った。リアスは立ち上がりライザーを鋭く睨んでいる。

「ライザー！前にも言ったはずよ！私にはあなたと結婚なんてしないわ！」

「はあ、リアス。そんなまがまがが通用すると思っっているのか？分からないのか？この

縁談には悪魔の未来がかかっているんだ。君だってグレモリー家を潰すわけにはいかないんだろ？」

「私は家を潰さないわ！媚養子だって迎え入れるつもりよ。でもライザー、それはあなたじゃない！私は私が良いとおもった者と結婚する。それぐらいの権利はあるはずだわ！」

リアスのはつきりとした拒絶の言葉にニヤニヤとした笑みを浮かべていたライザーの機嫌が徐々に悪くなっていく。

「これでも俺はフェニックス家の看板を背負った悪魔なんだよ。フェニックス家に泥を塗るわけにはいかないんだ。だいたい俺はこんなところには来たくなかったんだ。人間界の炎を風は来たない。フェニックスの悪魔としては堪え難いんだよ！」

ライザーの言葉と共に周囲を炎が駆け巡る。

「俺は君の下僕を全部燃やし尽くしてでも君を冥界に連れ帰るぞ！」

ライザーから放たれたプレッシャーが部屋を支配するとともに炎が勢いを増した。ライザーは墮天使よりも圧倒的に強いのだろう。イツセーはその殺意、敵意に晒され全身が震え出す。

ライザーの炎が背中へと集まり翼のような形を作り出す。確かにその姿はフェニックスにふさわしかった。限界まで張り詰めた部屋の空気。いよいよライザーが動

きだそうとした瞬間、いつもの冷静で恐ろしい、しかしイツセーにとっては何よりも心強い男の声が響き渡った。

「やれやれ、この場は話し合いの場ではなかったのか？どこぞのネゴシエイターではあるまいし。それ以上は些か無粋ではないか？」

いつも通り、気づけはアレイスターがソファへと腰掛けている。一触即発の部屋の雰囲気などお構いなしにくつろぐその姿はイツセーに落ち着きと安堵を与えてくれるものだった。

「ちよつとアレイ。今は大事な話し合い中なん『リアス!!!下がりなさい!!!』キャッー」

グレモリー眷属でないアレイスターを巻き込む訳にはいかないとリアスがアレイスターへと退出を促そうとした瞬間、リアスは強い力に引っ張られ投げ飛ばされた。一体全体何事かと思ってみればグレイファイアが顔を真つ青にさせ震えながらもここは通さないとわんぱかりにアレイスターの前に立ちふさがっていた。

「ちよ、ちよつといきなりどうしたのよグレイファイア」

「何をしてるのリアス！早く逃げなさい！ライザー様も！一刻も早くこの場から離れるのよー！」

グレイファイアはメイド時の敬語ではなく切羽詰まったようにそう叫んだ。今までそのようなグレイファイアを見たことがなかったリアスは慌ててグレイファイアを止めよ

うとする。

「急にどうしたのよグレイファイア！あれはオカルト研究部の部員のアレイ・クロウよ！落ち着いて！」

「アレイ・クロウですって！何をバカな！あれは……あれはアレイス『始めまして。アレイ・クロウだ。今はそう名乗っている。間違えるなよ？』 ツ!!!」

アレイスターから言葉を掛けられる。ただそれだけでグレイファイアは立ち向かうとしていた心がくじけそうになった。何に変えても自分の義妹を守らなくてはならない、意識が飛びそうになりながらもグレイファイアはアレイスターから発せられる重圧に耐えた。

グレイファイアは大戦を生き残った悪魔だ。当然アレイスターのことは知っているし戦場で見かけたこともある。そう知っているのだ。アレイスターのその理不尽なまでの力を。それゆえグレイファイアはアレイスターを恐れる。グレイファイアにとってアレイスターとは恐怖の象徴であった。どれだけ夫からアレイスターはそんな奴じやないと言われてもそれだけは今まで変わることはなかった。

「奴もいい女を妻にしたものだ。余を知りつつも立ち向かおうとするのだからな」

「あなたは……あなたは何故このようなどころに？」

「そうだな……面白いものを見つけた、とでも言っておこうか」

当然その答えはグレイフィアが納得できるものではなかったがこれ以上アレイスターに問いただしても何も答えないだろうし、そもそもグレイフィアにはアレイスターに対して問いただすという行為ができなかった。

「さて、グレモリー家とフェニックス家との縁談であったな。話し合いが難航しているようだが余にいい考えがあるぞ。たしか成人した悪魔同士が戦うゲームがあつただろう？その勝者の言い分を聞くというのはどうだ？」

「レーディングゲームのことでしょうか？」

「そう、それだ。異論はあるか？」

「いえ。この世にあなたに意見できる者がどれだけ居ましようか？少なくとも私には無理です」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！なに勝手に話を進めてるの！というかグレイフィアはアレイと知り合いなの?!」

グレイフィアが動き出してから呆気に取られて居たりアス達、そしてライザー。いち早く正気に戻つたりアスが抗議の声を上げた。

「お嬢様、もともと話し合いがこじれた時はレーディングゲームで決着をつけよと両家から仰せつかつております。これはもともと予想されていたことです。そして私とアレイ様が知り合いかという問いについては答えることは出来ません」

ある程度落ち着きを取り戻したのか元の口調に戻ったグレイフィアがそう答える。

「な、なんだかよく分からんがゲームで決着をつけるというならば好都合だ。だけどリアス。本当に良いのか？」

「どう言うことかしら？」

「なに、俺はすでに成人しているし何度もゲームをやっている。それになアリアス、まさかここに居る面子が君の下僕なのか？」

「アレイは違うけどかねがあつてゐるわ。だとしたらどうなの？」

「これじゃあ話にならないんじゃないか？君の女王である雷の巫女ぐらいいしか俺の可愛い下僕に対抗出来そうにないな」

そう良いながらライザーがパチンと指を鳴らすとフェニックスの魔法陣が光出し総勢15名の眷属悪魔が現れた。

「とまあこんなもんだ。これを見てもまだ君は勝ち目があると思うのか？」

「くっ！」

ライザーが自慢げにそう言い放つ。数というのはなんにおいても大きなアドバンテージとなる。質より量という言葉があるくらいだ。レーディングゲームにおいてもそれは変わらない。だが、量に勝る質があるのなら話は変わる。質より量、しかしまだ若いリアスの手札には量に勝る質は存在していなかった。

「だが俺も鬼じゃない。その人間、あれを助つ人として参加させてもいいぞ。かまいませんよね？グレイファイアさま」

「それは……」

グレイファイアが言い淀む。アレイスターこそ量より質の典型だろう。アレイスターが出れば完全に出来レースになる。いや、そんな些細な問題ではない。きつと冥界中が大騒ぎになるに違いない。そんな事はグレイファイアも分かっている。どうしようか悩んでいると当の本人であるアレイスターが拒否の声をあげた。

「何故余がおままごとにつき合わなければならんのだ？」

「おままごとだと！」

「むしろおままごと以外のなんだというのだ？余からすれば貴公らの戦いなど見戯に等しい」

「き、貴様！先ほどから黙っていれば調子に乗りやがって！」

「ほう？余に弓を引くか」

「黙れ！そのすかした口を二度と開けないようにしてやる！」

「いけません！ライザー様！」

グレイファイアの静止も虚しく、激昂したライザーがアレイスターめがけて炎を放つ。

「アレイ！」「先輩！」

その様子を見たイツセー達は悲鳴をあげる。アレイスターはいつもの微笑を浮かべ、一切の回避行動を取らずに炎に包まれた。

「なんてことを……」

グレイファイアがそうつぶやく。次の瞬間、燃え盛る炎は一瞬にして消え失せ中から無傷のアレイスターが現れる。

「なっ！ば、馬鹿な！俺の炎が！」

「この程度の炎など我が宿敵の無限熱量に比べれば微々たるものだ」
「待ってください！どうか！どうか寛大な慈悲を！」

立ち上がり一歩、また一歩とライザーの元へ歩みを進めるアレイスターへとグレイファイアは必死に頭を下げ許しを請う。

「下がっている、メイド。躰のなっていない子供を叱るのは大人の役目だ」

「ひいっ！く、くるな！なんなんだ！なんなんだお前は！」

ライザーは尻餅をつきながらも必死に炎を飛ばすがまるで効果は無くアレイスターの歩みを止めることは出来ない。自慢の眷属達も完全にアレイスターに臆していきるようであり物にならなかった。

「少しばかり反省する事だな。なに、フェニックスなのだ。一週間程で元に戻るだろう」

「うわあああ！なんだこれは！俺はフェニックスだぞ！嫌だ！俺は……俺は誇り高きフェニツ……」

アレイスターが手をかざした瞬間、ライザーのつま先が凍り始める。ライザーは氷を溶かそうと炎を放つが氷の侵食を止めることは出来ない。そして時間にして数秒、もがき断末魔をあげながらライザーは完璧な氷像に変わってしまった。

「一体どういふことなのよこれは……」

しんと静まりかえった部屋で先ほど置いてきぼりであつたりアスがそうつぶやいた。アレイスターの登場、グレイファイアの変貌、最後はフェニックスの氷像だ。

「くくくつ……誇り高きフェニツクスか。ならこの氷像は誇り高きフェニツクスの像と名付けてやろうではないか」

アレイスターは愉快そうに笑う。フェニツクスは炎の化身だ。それが凍るなんて一体どういうことなのだろうか？子猫は珍しそうにライザーをペシペシと叩いている。それを見たりアスはもう考えることを諦めるのだった。

「お嬢様、今日のところは解散にしましょう。ゲームの詳細は後日お伝えいたします」
「え？」

「申し訳ありませんが私は至急冥界へと帰還しなくてはなりません。それでは皆様、アレイ様、失礼いたします」

「ちよつ！グレイファイア！」

リアスの制止も無視し氷像となったライザーをひつ掴むとライザーの眷属達と共にグレイファイアは冥界へと帰還してしまうのであった。

◇

「何ということをしでかしてくれたのだあのバカ息子は！」

ここは冥界のとある屋敷、魔王ルシファアの居住だ。その屋敷の廊下を一人の中年男性が慌てながら歩いていた。息を切らせながら進むこと数分、目的の部屋にたどり着き男性は身なりを整え入室した。

「魔王さま！遅くなりました！」

「おお、フェニックス卿もいらつしやったか」

「これはこれはグレモリー卿。お待たせしてしまい申し訳ない」

部屋にいたのは中年と青年の男性、そして女性が一人。魔王ルシファアとグレイファイア、そしてサーゼクスの父、グレモリー卿だ。

「この度はライザーが大変な迷惑を……」

「いやいや、フェニックス卿。今回の事は誰が予想できましようか。まさか今になって

彼が現れるとは……」

「いや、私がしっかりと教育しておけばあの魔人に喧嘩を売るなんてバカな真似はしなかったでしょうに。ああ！三男だからといって好きにさせていたのが間違いだった！もうフェニックス家はお終いだ！縁談ももう破談にした方が良いでしょう。そうでないとグレモリー家にも迷惑がかかる」

「いや、それはやめた方が良いでしょう」

完全に憔悴しきった顔で破談を進めるフェニックス卿にサーゼクスが待ったを掛けた。

「今回は彼、アレイスターがレーディングゲームをするように提案した、そうだろうか？グレレイファイア」

「はい」

「ならばこのままゲームを行うべきでしょう。むしろ破談にした方場合アレイスターがどう出るのか予測できません。それよりもライザー君がアレイスターの満足するゲームを行えば彼は何もしないでしょう」

「フェニックス家の命運はライザー、あのバカ息子にかかっているという訳か……ああ！不安だ！どうしてルヴアルじゃないんだ！」

「落ち着いて下さいフェニックス卿。流石に彼もフェニックス家を潰すということはし

ないでしょう……たぶん。それよりも何故今になって彼が出てきたのか……」

「……我々に対しての復讐ではないのか？サーゼクス。我々は彼に対して取り返しのつかない事をしてしまったから」

「いえ、それはしないでしよう父上。彼はそんな事を気にする男ではありません。それに復讐であるのならあの時にすべて終わらせていたはずです。それよりもフェニックス卿、父上。決してアレイスターの事は口外しないでいただきたい。下手に漏らせば冥界は大混乱になる」

「わかつとる」

「ええ、勿論ですとも」

「ああ、アレイスター。君は何故今になって現れたんだい？現れるなら僕たちの目の前に出てきてくれれば良いのに。いやきつともうすぐ会えるんだろうね。その時が楽しみでしょうがないよ」

第20話

ライザーとの話し合いの翌日、リアス率いるグレモリー眷属はある場所へと向かっていった。

「あの、部長。俺たちは今どこに向かっているんですか？」

「あら？ イツセーには言っただけじゃなかったかしら？」

「いやいや！ 俺起きた瞬間にいきなり拉致られたんですよ！」

昨夜、悶々としてなかなか寝付けず寝不足のまま朝っぱらから叩き起こされてこうして連れ出されている一誠は疲労困憊のようだ。

「イツセー、今私達が向かっているのはアレイの家よ」

「アレイ先輩の家?!」

「そう、今日こそはアレイに自分の事を話してもらおうと思ってる。今までうやむやにしていたけれどアレイの存在は異常すぎるわ。私が戦慄するほどの魔力と操作技術、ライザーの攻撃を受けてもまるでダメージを負わなかったあの耐久力。ライザーはあんなの上級悪魔だわ。アレイは人間……かどうかは分からないけど仮に人間だとしても無傷なんではあり得ない。それに極めつけはグレイフィアのあの様子。あんな

なに怯えたグレイフィアなんて初めて見たわ」

リアスの言葉にイツセー、アーシアを除く眷属達は大きく頷く。対する二人の頭には大きな？マークが浮かんだ。

「あの、部長。グレイフィアさんが怯えていたって言ってもあの人はメイドさんじゃ？」
「ああ、イツセーには言つてなかつたわね。グレイフィアはグレモリー家のメイドであると同時に魔王ルシファー様の女王。そして、それは冥界最強の女王であることを意味するの」

「えく!!!グレイフィアさんが冥界最強の女王!?!」

「ええ、だから私達は驚いているのよ。それに昨日の二人の様子だと二人はお互いの事を知っている。アレイの事を聞こうと思つてもグレイフィアは冥界へと帰つてしまつたから直接本人に聞くしかないでしょ?」

「でもだからと言つてアレイ先輩が話してくれるとは思いませんけど……」

「正直私もそう思うわ。でもだからと言つてそのままにしておくわけにはいかないでしょ? 昨日散々引つ掻き回してくれたのはアレイ本人なんだから」

「ええ、そうです……ぬあつ!」

イツセーが言葉を言い切る直前にビクンと身体を震わせた。

「どうかしたイツセー? 体調不良?」

「いや、なんだか最近急にこういうことがあって。別に何処か悪い訳では無いと思うんです。ただ、なんかこう体の中にある何かが怯えているような……そんな感じがするんです。それに決まってアレイ先輩の話をしている時に」

「アレイの話をしている時……ね。まあ近いうちに病院へ行っておきなさい。何かあるといけないから。さあ、もうすぐでアレイの家よ。えーつと……どうやらあれのようね」

リアスが地図と睨めっこしながらある場所を指差した。リアスの指に従い、その方向へと目を向けるイツセーを待っていたのは超が3つも4つもつくであろうかという豪邸であった。

「えっ！ちよっ！えっ！あれ!？」

「はうく大つきいです!」

「いやはやこれは予想外と言うべきか予想通りと言うべきか……」

「あらあら」

「(……姉様の匂い?)」

「グレモリー家の本邸並みね」

閑静な住宅街に突如現れた大豪邸に空いた口が塞がらない一誠達はリアスの言葉によって現実へと引き戻される。

「いつまでも驚いてないでさっさと行くわよ。でもこの家ってインターホンはあるのかしらっ？」

「止まりなさい」

「ッ!!」

リアスがインターホンを探すために家へと近づこうとした瞬間、家から一人の人物が出てきた。外見は幼い、しかし隠しきれない妖艶さを合わせ持つ可憐な少女。そしてなにより……

(なんて濃い死の気配!!)

少女とリアスの目が合う。リアスの意識があつたのはそこまでであった。

◇

「なんて脆弱な…… マスターはこんなものどどこが気に入ったのかしら?」

「まだまだ成長途中ですもの。これから先、どうなるかわかりませんわエセルドレーダ様」

「そんなこと貴方に言われなくても分かっているわ朱乃」

他のグレモリー眷属が軒並み倒れている中、朱乃は一人涼しい顔をしている。

「それにしても私一人でみんなを運ぶのは大変ですわね」

「大変と出来ないは違うわよ」

「まあそうですが……ってあら？」

朱乃が皆を連れて部室へと帰ろうとした時、魔法陣が出現しその中からグレイフィアが現れた。

「お嬢様?!大丈夫ですか!どうしてここに?!」

「グレイフィア様、落ち着いてください。リアスは他の皆同様眠っているだけですわ」

「眠っているだけ?……はあ、よかった」

「よかったじゃないわ。全く今日は招かれざる客が多すぎる。せつかくマスターと二人きりだというのに」

倒れているリアスを見た瞬間大慌てしたグレイフィアは朱乃によって落ち着きを取り戻す。しかし、ホツと息を着いたのも束の間。エセルドレーダの苛立った様子によつて場に緊張感が現れた。

「エセルドレーダ……様でございますね?」

「あら?どうして私のこと知っているのかしら?」

「貴方の事はレヴィアタン様より聞き及んでおります」

「レヴィアタン?……ああ、あのマスターに色目を使った雌猫ね。たしか今、魔王だった

かしら？どうでもいいけれど」

グレイフィアは目の前の少女に戦慄を覚えた。魔王の事をどうでもいいと吐き捨てる。エセルドレーダはその主同様化け物なのだ。グレイフィアは思った。心は恐怖に支配され、身体は震えが止まらないが己の使命を果たそうと懸命に口を開く。

「アレイスター様へとお伝え下さい。我が主が貴方をお呼びしていまあつ!!？」

その瞬間、エセルドレーダの細腕がグレイフィアの首を捕らえ締めあげる。

「一体何様なのかしらね貴方達は。マスターを呼びつける？下等生物の存在でなんたる不敬。その身をもって償いなさい」

「あ……ああ……」

エセルドレーダが首を折ろうと力を込める。

(サーゼクス……)

グレイフィアは己の死を覚悟し目をつむった。しかしいつまでもたってもその時は訪れない。どうということだと目を開いた瞬間、地面へとグレイフィアは投げ捨てられた。

「……マスターに感謝しなさい。マスターから伝言よ。帰って自分の主に伝えなさい。用があるなら自分で出向け、とね」

エセルドレーダはそう言うと言館の中へと消えていった。

「大丈夫ですか？グレイファイアさま」

「ゲホツゲホツ……ハア……ハア…… ありがとうございますごさいます姫島様」

「みんなの事もあります。一旦部室へと戻りましょう」

朱乃の言葉にグレイファイアは息絶え絶えになりながら頷き、部室へと転移して行くのであった。

◇

「う、うくん。あら？ここは……」

「起きたのね？リアス」

「ご無事ですか？お嬢様」

「朱乃？グレイファイア?! どうしてグレイファイアがここにいるの？それにここは部室?! なんで部室に…… いや、思い出したわ。私達気絶してたのね」

しばらくして目を覚ましたリアスはグレイファイアがここにいることに驚くも徐々に状況を把握していく。

「様するに今回はアレイにも会えず何も分からなかったと……」

「ええ、そうですわね」

「恐ろしい子だったわ。今でも身体が震えているもの。あの女の子がいる限りアレイには合わせてもらえそうに無いわね…… だったらいいわ。グレイフィア、アレイについて教えてくれないかしら？」

「彼についてですか……」

「なんでもいいのよ。少しでも彼の事を教えて欲しいの！」

「……それはできません」

「グレイフィア」

「できません」

「グレイフィア!!!」

「できない!できないのリアス!世の中には知らなくてもいいことがある!知らない方が幸せなことがあるのよ!」

メイド口調を忘れ声を荒げるグレイフィアにリアスは気圧される。

「私は彼が恐ろしい。サーゼクスは怒るかもしれないけれど私は彼が恐ろしくてたまらない。リアス、貴方には彼にだけは関わって欲しくはなかった……」

「グレイフィア…… 貴方が何故そんなにもアレイを恐れているのかは私には分からない。でもアレイはオカルト研究部の大事な仲間よ。彼が何者であろうともそれは変わらないわ」

リアスはグレイファイアの言葉を振り払うかのように声を高々にそう宣言した。

「……ライザー様とのレーティングゲームは一週間後に決まったわ。今はそちらに集中しなさい。応援しているわリアス」

「ありがとうねグレイファイア」

グレイファイアが冥界へと帰還するための魔法陣が現れる。

「それじゃあねリアス。一週間後に会いましょう」

——彼は……あの方はそんなにもぬるく優しい人物ではないのよ…… ——

最後にそう呟いたグレイファイアの言葉をリアスは聞こえない振りをするのであった。